

關通商條約係約日本外交文書

第一章 林外務大臣時代

日露通商航海條約案提出ノ件

明治三十九年四月十四日
日露通商航海條約案提出ノ件
附屬書一 御委任状案
二 日露通商航海條約案
三 議定書案
四 交換外交文書案
二 右ニ對シ説明
一 右決裁

明治三十九年二月二日起草
同 年四月十四日附

西園寺外務大臣

外務大臣 藤田

四一八	三大	日 目 次 細 目	牧野外務大臣ヨリ 英國臨時代理大使宛	海峽殖民地及錫蘭ノ日英條約加入了承...一一三三 ノ件
四一九	三大	月正	牧野外務大臣ヨリ 山本總理大臣宛	上海殖民地及錫蘭ノ日英條約加入ノ儀...一一三三 ノ件
四二〇	三大	月正	牧野外務大臣ヨリ 山本總理大臣宛	海峽殖民地及錫蘭ノ日英條約加入告示...一一三四 ノ件
四二一	三大	月正	牧野外務大臣ヨリ 小池駐英臨時代理大使宛(電)	香港ノ日英條約加入ニ関シ照会ノ件...一一三四 ノ件
四二二	三大	月正	牧野外務大臣ヨリ 英國臨時代理大使宛	日英條約第一條又第八條ノ解釈ニツキ...一一三五 回答ノ件
四二三	三大	月正	牧野外務大臣宛(電)	日英通商條約適用殖民地表中香港ヲ含...一一三五 ミ居ル旨通報ノ件
四二四	三大	月正	小池駐英臨時代理大使ヨリ 牧野外務大臣宛	香港ノ日英條約加入ニ關シ英國政府ト...一一三六 交渉ノ件
四二五	四大	月正	小池駐英臨時代理大使ヨリ 牧野外務大臣宛	香港ノ日英條約加入ニ関スル件...一一三六 直轄殖民地及保護領ノ日英條約加入ニ...一一三七 件
四二六	四大	月正	英國大使宛	英領直轄殖民地及保護領ノ日英通商航...一一三七 海條約加入ノ件
四二七	四大	月正	外務省告示	英領直轄殖民地及保護領ノ日英條約加...一一三九 入ニツキ上奏ノ件
四二八	四大	月正	牧野外務大臣ヨリ 山本總理大臣宛	一一三九

奥ヲ存スルモノハ悉ク之ヲ除去シ更ニ時務ニ適切ナル諸條項ヲ挿入スル等必要ナル改訂ヲ加ヘ茲ニ別冊之通り日露通商航海條約案ヲ作成シ之ヲ以テ成ルヘク速力ニ本野公使ヲシテ露國政府ト開談相成度ト存候間右至急閣議決定之上別紙案ノ如キ談判全權御委任状ヲ同公使ヘ御授与相成候様致度候

右閣議ニ提出候也

(附屬書一)

御委任状案

天佑ヲ保有シ萬國一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治三十八年九月五日帝国ト露西亞國トノ間ニ締結セシ講和條約第十二條ノ規定ニ基キ通商航海條約ヲ締結スルコトヲ欲シ露國駐劄帝國特命全權公使從四位勲三等法学博士本野一郎ニ付与スルニ露西亞國全權委員ト会同商議シ條約ヲ締結シ之ヲ記名調印スルノ全權ヲ以テス而シテ其ノ議定スル各條項ハ朕親シク閱覽ヲ加ヘ其ノ妥善ナルヲ認メタル後之ヲ批准スヘシ

該臣民ハ其ノ権利ヲ伸張シ及防護セムカ為自由ニ且容易ニ

裁判所ニ訴出スルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其権利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民ト同様ニ代言人弁護人及代理人ヲ撰挾シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法取扱ニ閑スル各般ノ事項ニ付相互ノ條件ヲ以テ内國臣民ノ享有スル總テノ権利及特典ヲ享有スヘシ

住居権、旅行権及各種動産ノ所有、遺囑又ハ其ノ他ノ方法ニ因ル所ノ動産ノ相続并合法ニ得ル所ノ各種財產ヲ如何ニ处分スルコトニ關シ兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内國臣民若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特典自由及権利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國臣民若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ税金若ハ賦課金ヲ徵収セラルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ関シ完全ナル自由及法律勅令及規則ニ從テ公私ノ礼拝ヲ行フ

ノ権利并其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬若ハ火葬ノ為設置保存セラル所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬若ハ火葬スルノ権利ヲ享有スヘシ

農業及不動產ノ所有權ニ關スル各般ノ事項ニ關シテハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ

神武天皇即位紀元一千五百六十六年明治三十九年月日 東京宮城ニ於テ親ク名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 国璽

外務大臣副署

(附屬書二)

日露通商航海條約案

(○○印ハ旧條約ト異ナル場所ヲ示ス)

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ兩國通商上ノ關係ヲ進捗セシメムカ為明治三十八年九月五日即干九百五年八月二十三日(九月五日)締結講和條約第十二條ニ基キ公正主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ新ニ一ノ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決シ之力為ニ日本國皇帝陛下ハヽヽヽヽヽヽヽ全露西亞國皇帝陛下ハヽヽヽヽヽヽ各其金權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任状ヲ示シ其ノ良好ノ妥当ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國ノ法律ニ遵由シ何レノ所ニ到リ旅行シ或ハ居住スルモ全ク隨意タルヘク而シテ其ノ身體及財產ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

前記ノ免除ハ不動產ノ所有ニ付着スル所ノ賦課金及一般ノ内國臣民カ土地所有者農業者又ハ土地若ハ建物ノ占有者トシテ負担スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵癆ヲ包含セサルモノトス

第二條

兩締約國ノ間ニハ相互ニ通商航海ノ自由アルヘシ

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ總テ工業又ハ手工業ニ從事シ正業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸売若ハ小売營業ニ從事スルヲ得ヘシ右營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ為シ或ハ代理人ヲ以テ

シ又ハ一人ニテ之ヲ為シ或ハ外国人若ハ内國臣民ト組合ヲ
結ヒテ之ヲ為スモ随意タルヘク又家屋倉庫ヲ所有シ或ハ之
ヲ借受ケ又ハ使用シ住居及營業ノ為ニ土地ヲ借受クルコト
ヲ得但シ内國臣民ト同様其ノ國ノ法律、警察規則及稅關規
則ヲ遵守スルヲ要ス

該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地、諸港及諸河ニシテ外国

通商ノ為開カレ又ハ開カルヘキ場所へ船舶及貨物ヲ以テ自
由ニ到ルヲ得且通商及航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏一
私人或ハ会社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利
益ノ為ニ課セラル所ノ稅金或ハ取立金ハ其ノ性質若ハ名
稱ノ如何ヲ論セス内國臣民ノ払フ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ
多額ノモノヲ払フコトナク内國臣民ト同一ノ取扱ヲ受クヘ
キモノス

△¹
然レトモ本條及前条中ニ掲タル規定ハ兩國ノ一方ニ於テ現
ニ行ハレ又ハ行ハルヽコトアルヘキ商業、警察、公安及衛
生ニ関スル特別ノ法律、勅令、及規則ニシテ外国人一般ニ
適用ス。ヘキモノニハ何等ノ影響ヲ及ホササルモノトス。

第三條

兩締約国ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居、商
業若ハ工業ノ為ニ供スル家宅、倉庫、店舗及之ニ屬スル構

第五條

兩締約国ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ輸出スル
一切ノ物品ヘハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シ賦課
シ若ハ賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅金又ハ
雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約国ノ一方ノ版圖内
ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ
他ノ一方ノ版圖内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セ
サルヘシ

第六條

兩締約国ノ一方ノ臣民ヘ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ内地通過
ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦露西亞國ノ船舶ヲ以
テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルモノハ獎勵金、便益及稅金ヲ得
税、倉入獎勵金、便益及稅金、払戻ニ關シ最惠國ノ臣民或ハ
人民ト全ク均等ノ取扱ヲ享受スヘシ

第七條

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ日本國ノ船舶ヲ以テ適法
ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦露西亞國ノ船舶ヲ以
テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ
日本國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ稅金或ハ

造物ハ侵スヘカラス

右家宅及構造物ヘハ猥ニ侵入捜索スヘカラス又帳簿、書類
或ハ簿記帳ヲ検査点閱スヘカラス但内國臣民ニ對シ法律、
勅令及規則ヲ以テ制定セル条件及定式ニ拠ルトキハ此ノ限
ニ在ラス

第四條

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產或ハ製造ニ係ル物品ヲ
何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版圖内ヘ輸入シ又日本國皇
帝陛下ノ版圖内ノ生產或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ
全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生
産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ稅ニ異ナルカ或
ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラルコトナカルヘシ

兩締約国ノ一方ノ版圖内ヘ別國ノ生產或ハ製造ニ係ル物品
ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ノ生產或ハ
製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入セラル、モ之ヲ
禁止スルコトナカルヘシ此規定ハ人畜或ハ農業ニ有用ナル
植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニ
適用スヘカラサルモノトス

△²
兩締約国ノ一方ノ版圖内ノ生產若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路溝渠國境

雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ稅金
雜費等ヲ課セサルヘシ又全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸
港ヘ露西亞國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘ
キ物品ハ亦日本國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ヘ輸入ス
ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ露西亞國船舶ガ右様ノ物品ヲ
輸入スルトキ課スヘキ稅金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テ
スルモ更ニ別種或ハ多額ノ稅金、雜費等ヲ課セサルヘシ右
相互對等ノ取扱ハ右物品ノ直チニ原產地ヨリ到ルト其ノ他
ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施スモノトス

△³
輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘ
シ故ニ締約国ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ
物品ハ其ノ輸出ノ日本船舶ニ依ルト露西亞國船舶ニ依ルト
ニ拘ハラス又其ノ仕向先ノ締約国ノ一港タルト第三國ノ一
港タルトヲ問ハス締約国ノ版圖内ニ於テハ之ニ課スルニ同
一ノ輸出稅ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ獎勵金並稅金払戻
ノコトヲ以テスヘシ

第八條

性質並名義ノ如何ニ拘ハラス同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶一般ニ課スルモノニ非サレハ兩締約国ノ一方ハ其版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セザルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ両国ノ船舶カ何レノ地域ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第九條

兩締約国ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港、灣、船渠、碇泊所或ハ河川ニ於テ船舶ノ繫留又ハ貨物ノ船積、船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就キ他ノ一方ノ締約国ノ船舶カ均霑セサル特典ヲ自國船舶ニ許与セサルヘシ但本件ニ關シテモ亦兩締約国ノ目的ハ両国ノ船舶ニ對シ互ニ全々均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

第十條

兩締約国ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス各其ノ法律勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル露西亞國臣民又ハ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル日本國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各右法律、勅令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許与シ若ハ許与セラルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル露西亞國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩余ヲ陸揚スル為他ノ一港若ハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但常ニ両国ノ法律及税關規則ニ從フヘキモノトス

ス

第十一條

兩締約国ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ為已ムヲ得ス他ノ一方ノ港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ払フヘキ税金ノ外何等ノ税金ヲ払フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ纏裝ヲ為シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル為其ノ積荷ノ一部ヲ売却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及税目ヲ遵守スヘキモノトス

兩締約国ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乘上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ但若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セス

壳捌ク場合ニハ普通ノ関税ヲ納ムルヲ要スルモノトス
兩締約国ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ一方ノ版圖内ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主、船長若ハ持主代理人力不在ノ場合若ハ現場ニ在リテ請求スル場合ニハ當該總領事、領事、副領事若ハ代辦領事ハ其ノ自國民ニ必要ナル補助ヲ与フル為干与スルコトヲ許サルヘキモノトス

第十二條

ルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ通知スヘシ
右難破若ハ乗上ケタル船舶並其ノ器具及其他一切ノ附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物並商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラルタルモノ又ハ之ヲ売却シタルトキハ其ノ收回得金並該遭難船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ又持主又ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ内國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ代辦領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ内國船舶難破ノ場合ニ於テ払フヘキ所ノ物品保存費並難破救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ払フヘキモノトス

難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ為ニ通關手続ヲ為スモノニ非サレハ一切ノ關稅ヲ免除スヘシ但消費ノ為ニ

スルトキハ該地方官ハ其ノ權力ノ及フ限該臘船人ヲ逮捕シ且之ヲ引渡ス為助力ヲ為スラ要スルモノトス
但海員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脱船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第十四條

兩締約國ハ其ノ一方ノ通商航海及工業ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商航海工業及手工業ニ關スル一切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニ現ニ許与シ或ハ将来許与スヘキ一切ノ特典、殊遇若ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶又ハ臣民ニモ即時ニ且條件ヲ附セスシテ之ヲ許与スヘキコトヲ兩締約國ニ於テ約ス

第十五條

兩締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都府及其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事ヲ置クコトヲ得ヘシ但領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラズ

然レトモ右ノ制限ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締約國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事ハ相互ノ條件ヲナリ。

明治三十九年月日即千九百六年月日(月日)

ニ於テ之ヲ作ル

△1「欄外朱書」
△2「欄外朱書二」
△3「下ヶ札
此條項ヲ露國ニ提議スル前先以テ左ノ閣議決定ヲ要ス

遼東租借地ニ輸入スル日本並諸外國ノ生産及製造品ハ将来総テ無税タルコト

各大臣 記名

(朱書)

「此付箋ハ原内務大臣ノ発議ニ係リ各大臣ノ同意ヲ求メタルモノニシテ閣議ヲ請フタル條約案ニ添付シアルヲ茲ニ転載シタルモノトス

野村」

(附屬書三)

議定書案

以。テ。一切ノ職務ヲ執行シ且其ノ在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ現ニ許与シ或ハ将来許与セラルヘキ一切ノ特典、特權、免除及職権ヲ享有スルコトヲ得ヘシ
露。西。亞。國。ニ。於。ケ。ル。文。書。檢。閱。ニ。對。シ。テ。ハ。日。本。國。ヨ。リ。露。西。亞。國。
ニ。派。遣。ス。ル。外。交。代。表。機。關。及。正。式。領。事。館。並。之。ニ。附。屬。ス。ル。諸。官。吏。ハ。新。聞。雜。誌。並。學。術。技。芸。及。文。學。ノ。著。作。ニ。閱。シ。完。全。ナ。ル。自。由。
ヲ。享。有。ス。ヘ。シ。

第十六條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ法律ニ定期ムル所ノ手続ヲ履行スルトキハ專売、特許、商標及意匠ニ關シ内國臣民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

第十七條

本條約ハ批准交換後十日ヲ経テ實施セラレ茲ニ規定シタル方法ニ依リ終了スル迄効力ヲ持続スヘシ
兩締約國ノ一方ハ明治四十三年七月十七日即千九百十年七月四日(十七日)以後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ他ノ一方へ通知スルノ権利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ為シタル後十二箇月ヲ経過シタルトキハ本條約ハ全然消滅ニ届スヘキモノトス

調印セシ通商航海條約ノ外雙方ニ關スル特別ノ事項ヲ規定スルヲ以テ兩國ノ利益ト為シ雙方ノ全權委員ハ左ノ約定ニ同意セリ

第一 日本国臣民ノ携帶スル自國ノ旅券ニ對スル露西亞國官憲ノ查證ノ有効期限ヲ六箇月トス露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外國行旅券ヲ交付シ若ハ其ノ取持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手數料若干取立金ハ何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス五拾哥ヲ超過セサルヘシ
重細重露西亞ニ旅行シ若ハ居留スル日本國臣民ノ旅券或ハ居留券ニ對シ徵收スル査證料及手數料若干取立金ハ歐ノ二分ノ一ヲ超過セサルベシ
羅巴露西亞ニ對スル旅券或ハ居留券ニ關シ徵收スル金額ノ如何ナル場合ニ於テモ西比利諸港ヲ經テ露西亞國領土ノ輸入スル貨物及商品ニ對シテ賦課スルモノヲ超過セシ
メアルコトニ同意ス

。批准セラレタルモノト看做サルヘシ又本議定書ハ前記
條約ノ無効ニ帰スルト同時ニ終了スベキモノトハ
右證拠トシテ双方ノ全権委員ハ本議定書ニ記名調印スルモ
ナリ

明治三十九年 月 日即千九百六年 月 日 (月 日)
ニ於テ之ヲ作ル

(附屬書四)

交換文書案

(1)

在露日本国公使ヨリ露国外務大臣ニ至ル

外交文書案

拝啓陳者日本國ト重露ノ通商及漁業上ノ關係著シク發達シ
且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付此際帝国政府
ハ浦潮港及「リコラエフクス」港ニ帝國領事館「ペトロペ
ウロフスク」港ニ領事館分館ヲ設置致度候間貴國政府ニ於
テ之ニ御同意相成候様致度此段得貴意候敬具

(11)

露国外務大臣ヨリ在露日本国公使ニ至ル

外交文書案

拝啓陳者從来松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締
結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許
セサルコトニ規定相成候處其ノ後ニ於ケル滿洲内地ノ商
工業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ニ該航權ヲ今後日本帝國
ノ船舶ニ及ホスコトニ閱スル日本國皇帝陛下ノ政府ノ本日
付公文ニ對シ帝國政府ハ帝國ノ閥スル限リ全然之ニ同意ヲ
表シ候此段得貴意候敬具

(四)

露国外務大臣ヨリ在露日本国公使ニ至ル

外交文書案

拝啓陳ハ從來松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締
結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許
セサルコトニ規定相成候處其ノ後ニ於ケル滿洲内地ノ商
工業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ニ該航權ヲ今後日本帝國
ノ船舶ニ及ホスコトニ閱スル日本國皇帝陛下ノ政府ノ本日
付公文ニ對シ帝國政府ハ帝國ノ閥スル限リ全然之ニ同意ヲ
表シ候此段得貴意候敬具

(右英文)

DRAFT TREATY OF COMMERCE AND NAVIGATION BETWEEN JAPAN AND RUSSIA.

ARTICLE I.

The subjects of each of the two High Contracting Parties shall have full liberty conforming themselves to the laws of the country to enter, travel or reside in any part of the territories of the other Contracting Party, and shall enjoy full and perfect protection for their persons and property.

They shall have free and easy access to the Courts of Justice in pursuit and defence of their rights; they shall be at liberty equally with native subjects to choose and employ lawyers, advocates

拝啓陳者重露ト日本國ノ通商及漁業上ノ關係著シク發達シ
且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付浦潮港及「リ
コラエフクス」港ニ日本國領事館「ペトロペウロフスク」
港ニ領事館分館ヲ設置スルコトニ閥スル日本國皇帝陛下ノ
政府ノ本日付公文ニ對シ帝國政府ハ前記各港ニ日本國領事
館及分館ヲ設置スルコトニ全然同意ヲ表シ候此段得貴意候
敬具

(11)

在露日本国公使ヨリ露国外務大臣ニ至ル

外交文書案

His Majesty the Emperor of Japan and His Majesty the Emperor of All the Russias, being equally desirous of promoting the commercial relations of the two countries, have resolved, in pursuance of the provisions of Article XII of the Treaty of Peace concluded on the fifth day of the ninth month of the thirty eighth year of Meiji, corresponding to the twenty third of August (fifth of September) one thousand nine hundred and five,

and representatives to pursue and defend their rights before such Courts, and in all other matters connected with the administration of justice they shall, on the condition of reciprocity, enjoy all rights and privileges enjoyed by native subjects.

In whatever relates to rights of residence and travel; to the possession of goods and effects of any kind; to the succession to personal estate by will or otherwise, and the disposal of property of any sort in any manner whatsoever, which they may lawfully acquire, the subjects of each Contracting Party shall enjoy in the territories of the other the same privileges, liberties and rights, and shall be subject to no higher imposts or charges in these respects than native subjects, or subjects or citizens of the most favoured nation.

The subjects of each of the Contracting Parties shall enjoy in the territories of the other entire liberty of conscience, and subject to the Laws, Ordinances and Regulations, shall enjoy the right of private or public exercise of their worship, and also the right of burying or cremating their respective countrymen according to their religious customs, in such suitable and convenient places as may be

ARTICLE II.

There shall be reciprocal freedom of commerce and navigation between the territories of the two High Contracting Parties.

The subject of each of the Contracting Parties may engage, in any part of the territories of the other, in any sort of industry or metier and in trade either by wholesale or retail in all kinds of produce, manufactures and merchandize of lawful commerce either in person or by agents, singly or in partnerships with foreigners or native subjects; and they may there own or hire and occupy the houses and warehouses, and lease land for residential, commercial and professional purposes, conforming themselves to the Laws, Police and Customs Regulations of the country like native subjects.

They shall have liberty to come with their ships and cargoes to all places, ports and rivers in the territories of the other, which are, or may be, opened to foreign commerce, and shall enjoy, respectively, the same treatment in matters of commerce and navigation as native subjects, without having

established and maintained for that purpose.

It is understood that in all that concerns agriculture and the right of ownership of immovables, Japanese subjects in Russia and Russian subjects in Japan shall enjoy the same treatment as the subjects or citizens of the most favoured nation.

They shall not be compelled, under any pretext whatsoever, to pay any charges or taxes other or higher than those are, or may be, paid by natives subjects, or subjects or citizens of the most favoured nation.

The subjects of either of the Contracting Parties residing in the territories of the other shall be exempted from all compulsory military service whatsoever, whether in the army, navy, national guard or militia; from all contributions imposed in lieu of personal service, and from all forced loans or military exactions or contributions

The foregoing exemption does not include charges which attach to the possession of immovables nor military prestations and requisitions to which all subjects of the country may be called to submit as landlords, agriculturists or occupiers of land or buildings.

ARTICLE III.

to pay taxes, imposts or duties, of whatever nature or under whatever denomination, levied in the name or for the profit of the Government, public functionaries, private individuals corporations or establishments of any kind, other or greater than those paid by native subjects.

It is, however, understood that the stipulations contained in this Article and the preceding Article do not in any way affect special Laws, Ordinances and Regulations with regard to trade, police and public security and health, which are or may be in force in either of the two countries and are applicable to all foreigners in general.

ARTICLE III.

The dwellings, warehouses and shops of the subjects of each of the High Contracting Parties in the territories of the other, and the premises appertaining thereto destined for purposes of residence, commerce or industry shall be respected. It shall not be allowable to proceed to make a search of, or a domiciliary visit to, such dwellings and premises, or to examine or inspect books papers

or accounts, except under the conditions and with the forms prescribed by the Laws, Ordinances and Regulations for subjects of the country.

ARTICLE IV.

No other or higher duties shall be imposed on the importation into the territories of His Majesty the Emperor of All the Russias of any article, the produce or manufacture of the territories of His Majesty the Emperor of Japan, from whatever place arriving; and no other or higher duties shall be imposed on the importation into the territories of His Majesty the Emperor of Japan of any article, the produce or manufacture of the territories of His Majesty the Emperor of All the Russias, from whatever place arriving, than on the like article produced or manufactured in any other foreign country.

No Prohibition shall be maintained or imposed on the importation of any article, the produce or manufacture of the territories of either of the Contracting Parties into the territories of the other, from whatever place arriving, which shall not equally

extend to the exportation of the like article to any other country.

ARTICLE VI.

The subjects of each of the High Contracting Parties shall enjoy in the territories of the other, a perfect equality of treatment with the subjects or citizens of the most favoured nation in all that relates to transit duties, warehousing, bounties, facilities and drawbacks.

ARTICLE VII.

Articles which are, or may be, legally imported into the ports of the territories of His Majesty the Emperor of Japan in Japanese vessels may likewise be imported into those ports in Russian vessels, without being liable to any other or higher duties or charges of whatever denomination than if such articles were imported in Japanese vessels; and, reciprocally, articles which are, or may be, legally imported into the ports of the territories of His Majesty the Emperor of All the Russian vessels may likewise be imported into those ports in Japanese vessels, without being liable to any other or higher duties or charges of

extend to the importation of the like article being the produce or manufacture of any other country. This last provision is not applicable to the sanitary and other prohibitions occasioned by the necessity of protecting the safety of persons or of cattle or of plants useful to agriculture.

No import duties shall be levied on articles produced or manufactured in the leased territory of Liao-tung, imported by land and over the frontiers of Manchuria into Russia, and on articles produced or manufactured in Russia, imported over the frontiers of Manchuria and by land into the leased territory of Liao-tung.

ARTICLE V.

No other or higher duties or charges shall be imposed in the territories of either of the High Contracting Parties on the exportation of any article to the territories of the other than such as are, or may be, payable on the exportation of the like article to any other foreign country; nor shall any prohibition be imposed on the exportation of any article from the territories of either of the two Contracting Parties to the territories of the other, which shall not equally

whatever denomination than if such articles were imported in Russian vessels. Such reciprocal equality of treatment shall take effect without distinction, whether such articles come directly from the place of origin or from any other place.

In the same manner there shall be perfect equality of treatment in regard to exportation, so that the same export duties shall be paid and the same bounties and drawbacks allowed in the territories of either of the High Contracting Parties on the exportation of any article which is, or may be, legally exported therefrom, whether such exportation shall take place in Japanese or in Russian vessels, and whatever may be the place of destination, whether a port of either of the Contracting Parties or of any third Power.

ARTICLE VIII.

No duties of tonnage, harbour, pilotage, lighthouse, quarantine or other similar or corresponding duties of whatever nature or under whatever denomination, levied in the name, or for the profit, of the Government, public functionaries, private individuals, corpora-

tions or establishments of any kind, shall be imposed in the ports of the territories of either country upon the vessels of the other country, which shall not equally and under the same conditions be imposed in the like cases on national vessels in general. Such equality of treatment shall apply reciprocally to the respective vessels, from whatever port or place they may arrive, and whatever may be their place of destination.

ARTICLE IX.

In all that regards the stationing, loading and unloading of vessels in the ports, basins, docks, roadsteads, harbours or rivers of the territories of one of the two countries, no privilege shall be granted to national vessels, which shall not be equally granted to vessels of the other country; the intention of the High Contracting Parties being that in this respect also the respective vessels shall be treated on the footing of perfect equality.

ARTICLE X.

The coasting trade of both the High Contracting

ARTICLE XI.

Any ship of war or merchant-vessel of either of the High Contracting Parties which may be compelled by stress of weather, or by reason of any other distress, to take shelter in a port of the other, shall be at liberty to refit therein, to procure all necessary supplies and to put to sea again, without paying any dues other than such as would be payable by national vessels. In case, however, the master of a merchant-vessel should be under the necessity of disposing of a part of his cargo in order to defray the expenses, he shall be bound to conform to the Regulations and Tariffs of the place to which he may have come.

If any ship of war or merchant-vessel of one of the Contracting Parties should run aground or be wrecked upon the coasts of the other, the local authorities shall inform the Consul-General, Consul, Vice-Consul or Consular Agent of the district of the occurrence, or if there be no such Consular officer, Consul or Consular Agent of the nearest district.

All proceeding relative to the salvage of Japanese vessels wrecked or cast on shore in the territorial

waters of His Majesty the Emperor of All the Russias shall take place in accordance with the Laws, Ordinances and Regulations of Russia, and reciprocally, all measures of salvage relative to Russian vessels wrecked or cast on shore in the territorial waters of His Majesty the Emperor of Japan shall take place in accordance with the Laws, Ordinances and Regulations of Japan.

Such stranded or wrecked ship or vessel, and all parts thereof, and all furnitures and appurtenances belonging thereto, and all goods and merchandise saved therefrom including those which may have been cast into the sea, or the proceeds thereof, if sold, as well as all papers found on board such stranded or wrecked ship or vessel, shall be given up to the owners or their agents, when claimed by them. If such owners or agents are not on the spot, the same shall be delivered to the respective Consul-General, Consuls, Vice-Consuls or Consular Agents upon being claimed by them within the period fixed by the laws of the country and such Consular officers, owners or agents shall pay only the expenses incurred in preservation of the property, together with the salvage or other expenses which would

have been payable in the case of a wreck of a national vessel.

The goods and merchandise saved from the wreck shall be exempt from all the duties of the Customs, unless cleared for consumption, in which case they shall pay the ordinary duties.

When a ship or vessel belonging to the subjects of one of the Contracting Parties is stranded or wrecked in the territories of the other, the respective Consuls-General, Consuls, Vice-Consuls and Consular Agents shall, if the owner or master or other agent of the owner is not present or is present and requires it, be authorized to interpose in order to afford the necessary assistance to their fellow-countrymen.

ARTICLE XII.

All vessels which, according to Japanese law, are to be deemed Japanese vessels, and all vessels which, according to Russian law, are to be deemed Russian vessels, shall, for the purposes of this Treaty, be deemed Japanese and Russian vessels, respectively.

Japanese certificates of tonnage measurement made in accordance with the existing law of Japan and

that concerns commerce, navigation, industry and metier, any privilege, favour or immunity which either Contracting Party has actually granted, or may hereafter grant, to the Government, ships, subjects or citizens of any other State, shall be extended immediately and unconditionally to the Government, ships or subjects of the other Contracting Party, it being their intention that the trade, navigation and industry of each country shall be placed in all respects by the other on the footing of the most favoured nation.

ARTICLE XV.

Each of the High Contracting Parties may appoint Consuls-General, Consuls, Vice-Consuls, Pro-Consuls and Consular Agents in all the ports, cities and places of the other, except in those where it may not be convenient to admit such Consular officers.

This exception, however, shall not be made in regard to one of the Contracting Parties without being made likewise in regard to every other Power.

The Consuls-General, Consuls, Vice-Consuls, Pro-Consuls and Consular Agents, on the condition of

Russian certificates of tonnage measurement made in accordance with the existing law of Russia shall in the ports of Russia and Japan respectively be recognized without the operation of remeasurement.

ARTICLE XIII.

If any seaman should desert from any vessel-of-war or merchant-ship belonging to either of the High Contracting Parties within the territories of the other, the local authorities shall be bound to give every assistance in their power for the apprehension and handing over of such deserter, on application to that effect being made to them by the Consul of the country to which the vessel or ship of the deserter may belong, or by the deputy or representative of the Consul.

It is understood that this stipulation shall not apply to the subjects of the country where the desertion takes place.

ARTICLE XIV.

The High Contracting Parties agree that, in all

reciprocity, may exercise all functions and enjoy all privileges, exemptions and immunities, as well as the powers, which are, or may hereafter be granted to Consular officers of the most favoured nation.

Concerning the censorship in Russia, the Diplomatic Representative organs and Consulates de carrière sent from the Japanese Government to Russia and all the officers belonging to them, shall enjoy full and complete franchise irrespective of newspapers, periodicals and works of sciences, arts and literature.

ARTICLE XVI.

The subjects of each of the High Contracting Parties shall enjoy in the territories of the other the same protection as native subjects in regard to patents, trade-marks and designs, upon fulfilment of the formalities prescribed by law.

ARTICLE XVII.

The present Treaty shall take effect ten days after the exchange of ratifications and shall continue in force until terminated in the manner herein provided. Either High Contracting Party shall have the right,

at any time after the seventeenth day of the seventh month of the forty-third year of Meiji, corresponding to the forth (seventeenth) of July, one thousand nine hundred and ten to give notice to the other of its intention to terminate the present Treaty, and at the expiration of twelve months after such notice is given this Treaty shall wholly cease and determine.

ARTICLE XVIII.

The present Treaty shall be ratified and the ratifications shall be exchanged at Tokio as soon as possible and in any case not later than four months after its signature.

In witness whereof, the respective Plenipotentiaries have signed the present Treaty and affixed thereto the seal of their arms.

Done at.....

DRAFT PROTOCOL.

The Government of His Majesty the Emperor of Japan and the Government of His Majesty the Emperor of All the Russias, deeming it advisable in

that imposed on goods and merchandize imported into Russian territories by Siberian ports.

3. The present Protocol shall be considered as ratified with the ratification of the Treaty of Commerce and Navigation signed this day; and it shall terminate at the same time the said Treaty ceases to be binding.

In witness whereof, the respective Plenipotentiaries have signed the present Protocol and affixed thereto the seal of their arms.

Done at Saint Petersbourg,

(Draft Diplomatic Note)

Monsieur le Ministre,

tions of my Government, to request the Imperial Russian Government to give, so far as they are concerned, their consent to extend hereafter the right of the said navigation to Japanese vessels.

I avail etc. etc.

The Minister of Japan to the Minister for Foreign Affairs of Russia.

(Draft Diplomatic Note)

Monsieur le Ministre,

The Treaty concluded on the 16th May 1858 between Russia and China stipulates that the navigation of the River Sungari is exclusively reserved to the vessels of the two Contracting Parties. However, having in view the considerable development of the commerce and industry in Manchuria in these late years, I have the honour, in pursuance of the instruc-

the interests of both countries to regulate certain special matters of mutual concern, apart from the Treaty of Commerce and Navigation signed this day, have, through their respective Plenipotentiaries, agreed upon the following stipulations:—

1. The duration of the validity of the vise given by Russian authorities on Japanese passports shall be six months. The fee or charge under whatever denomination, collected by Russian authorities upon the delivery of passports for leaving Russia, to Japanese subjects, or upon the entry in the Japanese passports of the permit to leave Russia shall not exceed fifty kopecks.

The fee for vise and any other fee or charge collected in respect of passports of Japanese subjects travelling to or residing in Asiatic Russia, and for their residence permits, shall not exceed one half of the amount collected in respect of passports and residence permits in European Russia.

2. The Imperial Russian Government agree that the rate of import duties imposed on Japanese goods and merchandize, imported into Russian territories over the frontiers of Manchuria, shall, in no case, exceed

the Imperial Japanese Government have, in their Note of this day, expressed the desire that the right of the said navigation should hereafter be extended to Japanese vessels.

In reply to that Note, the Imperial Russian Government have the honour to inform the Imperial Japanese Government that the agree entirely, so far as they

are concerned, to extend the right of the said navigation to Japanese vessels.

I avail etc. etc.

The Minister for Foreign Affairs of Russia to the Minister of Japan.

(Draft Diplomatic Note)

Monsieur le Ministre,

The commercial and fishing relations between Japan and Asiatic Russia having considerably developed and it being evident that those relations will become more and more important in future, the Imperial Government desire to create at this time Imperial Japanese Consulates at Vladivostock and Nicolaievsk and a branch Consular office at Petropavlovsk.

I therefore have the honour, in pursuance of the instructions of my Government, to request the Imperial Russian Government to agree to the creation of their Consulates and Consular branch office at the several ports as above mentioned.

I avail etc. etc.

The Minister of Japan to the Minister for Foreign Affairs of Russia.

(Draft Diplomatic Note)

Monsieur le Ministre,

The commercial and fishing relations between Asiatic Russia and Japan having considerably developed and it being evident that those relations will become more and more important in future, the Imperial Japanese Government in their Note of this date have manifested their desire to create at this time Imperial Japanese Consulates at Vladivostock and Nicolaievsk and a branch office of Japanese Consulate at Petropavlovsk.

In answer to the said Note, the Imperial Government have the honour to inform the Imperial Japanese Government that they agree entirely to the creation of Japanese Consulates and branch Consular office at the several ports as above mentioned.

I avail &c.

The Minister for Foreign Affairs of Russia to the Minister of Japan.

(附記1)

右の契約説明

別紙通商航海條約第四條末項第九條第十一條及漁業協約ノ
説明ハ兩條約ヲ締結スヘキ金權御委任状御下付奏請ノ際御
下問ニ対シ奉呈シタルモノトベ

(明治三十九年五月十日頃)

野・村

第四條末項

難破船ノ救助ニ關スル一切ノ手続ハ難破地ノ法律勅令及規

第九條

此ノ第四條末項ヲ新タリ提出シタル所以ナリ

船舶ノ繫留、貨物ノ船積船卸等ニ關スル一切ノ事項ニ就テ
ハ内外船舶取扱上全然同一トナスラ以テ各國普通ノ常例ト
為ス本條ニ於テ他國ノ船舶ニ許サムル特典ヲ單リ内國船舶
ニ与ケザルベシト明記セルベ此常例ニ依リタルニ外ナラズ

第十條

難破船ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ難破地ノ法律勅令及規
則ニ從ツテ之ヲ為スベシトハ各國條約普通ノ規定ニシテ現
ニ帝国ト各外國トノ通商航海條約ニ皆同一ノ條文アリ戰爭
ノ為メニ廢棄ニ帰シタル日露條約ニモ亦此規定アリシ而シ
テ露國ニ於テモ尊リ日本ノミナラス各外國トノ條約ニ同一
ノ條文ヲ設ケアリテ而モ露國法律勅令等ニ於テ外國難破船
ニ対シ過酷ナル手続アルヲ聞カヌ縦シ今後斯ル場合アリト
スルモ夫ハ露國政府ト交渉シテ完全ナル救濟ヲ施サンムル
ヲ得ベシト思考ス

漁業條約

我漁業協約案ハ日本漁業者ノ利益トナルヘキ事項ヲ網羅セ
リ如上ノ對償請求アルモ之ヲ肯諾シテ毫モ差支ナキ而已ナ
ラス却テ我方針一貫スル証ナレバ一舉同得ト謂フベキノウ

ル漁業権ノ如キ即チ然リトス此レ露國ト談判ヲ遂ルニハ頗

ル掛引ノ必要アルヲ以テ故ラニ然カセルナリ我全權委員ヲ

シテ提案ヲ基礎ト為シ出来得ル限り多分ノ利權ヲ獲得スル

ニ全力ヲ尽サシムルハ勿論ナレトモ前述ノ理由ニ因リ提出

スル我要求事項中一部ハ不成立ニ終ルモ已ラ得サルベシト

思考ス

(附記二)

右決済

内閣批第九号

明治三十九年四月十四日機密送第一九号

日露通商航海條約案ノ件請議ノ通

明治三十九年五月十七日

明治三十九年五月廿三日発達

内閣總理大臣侯爵 西園寺公望(印)

明治三十九年五月 日

外務大臣子爵 林 葦

(附屬書二) 上奏案

全權委任状下附之奏請ノ件

附屬書一 上奏案

二 御委任状案

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝(御名)

此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治三十八年九月五日帝国ト露西亞國トノ間ニ締結セシ

紙御委任状案相添此段謹テ上奏ス

明治三十八年九月五日「ボーツマス」ニ於テ締結相成タル

日露講和條約第十二條ニ依リ露西亞國政府ノ全權委員ト会

同商議シテ新ニ通商航海條約ヲ締結シ其約書ニ記名調印ス

ルノ全權ヲ特命全權公使本野一郎ニ御委任相成候様仕度別

機密送第四二号

西園寺内閣總理大臣

林外務大臣

二五

講和條約第十二條ノ規定ニ基キ通商航海條約ヲ締結スルコトヲ欲シ露西亞國駐劄帝國特命全權公使從四位勲三等法学

博士本野一郎ニ付与スルニ露西亞國全權委員ト合同商議シテ鈴セシム

條約ヲ締結シ之ニ記名調印スルノ全權ヲ以テス而シテ其ノ

議定スル各條項ハ朕親シク閲覽ヲ加ヘ其ノ妥善ナルヲ認メタル後之ヲ批准スヘシ神武天皇即位紀元二千五百六十六年

明治三十九年 月 日 東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ署シ鑑

御名國璽

外務大臣子爵 林 葦

〔朱跡〕 御委狀日付ハ五月廿六日ナリ

野村

機密送第二二号

林外務大臣

在露

本野公使殿

從來日露兩國間ニ存在セシ通商航海條約ハ戰爭ノ為全然其

ノ效力ヲ失シタルヲ以テ明治三十八年九月五日「ボーツマ

ス」ニ於テ締結相成タル講和條約第十二條ニ依リ新ニ通商

航海條約ヲ締結スルニ至ルマテノ間兩國通商關係ノ基礎ト

シテ相互ニ最惠國ノ地位ニ於ケル待遇ヲ与フルノ方法ヲ採

用スヘキコトニ約定相成居候処平和克復シ兩國ノ通商關係

既ニ復旧シタル今日ニ在ツテハ一日モ速ニ一ノ新通商航海

條約ヲ締結シ以テ前記關係ヲ一層円満親密ニシ且之ヲシテ

將來益々發達セシメムコトヲ謀ルヲ以テ焦眉ノ急務ナリト

認メ候又帝國政府ハ夙ニ露國ト漁業ニ關スル協約ヲ締結ス

ルノ必要ヲ感シ去ル明治二十八年以降該國政府ト屢々交渉

ヲ重ネシモ種々ノ事情ニ妨ケラレ其目的ヲ達スル能ハス茲

萬今日ニ至リ候處講和條約第十一條ノ規定ニ依リ露國ハ日

本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ノ領水ニ於ケル

漁業権ヲ我國臣民ニ許与セムカ為我邦ト協定ヲ為スヘキコ

明治三十九年六月六日附

林外務大臣時代 日露通商條約 三

トヲシタルニ付通商航海條約ノ締結ト同時若ハ之ト前後シテ一ノ協約ヲ締結シ漁業上ニ於ケル我邦臣民ノ利權ヲ確保スルノ必要ヲ認メ候仍而通商航海條約及議定書案ハ前記講和條約第十二條ノ規定ニ從ヒ旧條約ヲ基礎トシ其條項中治外法權時代ノ遺臭ヲ存スルモノハ悉ク之ヲ除去シ更ニ時勢ニ適切ナル新條項ヲ挿入スル等多少ノ改修ヲ加ヘ別冊第一号之通作成シ之ニ領事館ノ設置及松花江ノ航權ニ關スル外交文書案ヲ添付シ而シテ漁業ニ關スル協約案ハ從来ノ約案及我邦當業者等ノ意見ヲ參酌シ別冊第弐号之通り作成シ孰レモ閣議ヘ提出シ其決定ヲ經テ上奏裁可ヲ得茲ニ右談判ニ關スル全權御委任状ト共ニ閣下ヘ御送付致候間之ヲ以テ成ルヘク速ニ露國政府ト談判ヲ開始相成候様致度候。

從前ノ通商航海條約ハ戰爭ノ為全然消滅ニ帰シタルモ講和條約第十二條ノ規定ニ由リ兩國ノ通商關係ハ依然トシテ旧時ノ狀態ニ特殊ノ変更ヲ來タスノ處ナキヲ以テ實際上急速新條約ヲ締結セサルモ差向キ差シタル不利ヲ感セサルモ漁業ニ關スル協約ハ之ニ反シ其ノ締結ニシテ一日淹滯スレハ國家ノ為一日丈ノ損失ヲ招キ折角講和條約ニ依リ獲得シタル我利權モ之力為空シク喪失セサルヲ得サル義ニ付帝國政府ノ都合上ヨリ云ヘハ寧ロ漁業ニ關スル協約案ヲ最初ニ提

供スル方望マシク候得其條約其ノ物ノ性質上ヨリ論スレハ一般ニ通商關係ヲ規定スル條約ヲ後ニシ漁業ノ如キ一局部ニ涉ル事項ニ關スル協約ヲ先ニスルハ多少妥当ヲ缺クノ嫌ナキ能ハサルニ因リ帝國政府ハ兩約案ノ成功ヲ迅速ナラシムル為ニハ孰レヲ先ニシ孰レヲ後ニスルモ何等差支無之候ニ付兩約案提出ノ順序ハ閣下ノ御裁量ニ一任シ露國政府ト談判ノ都合上便宜之ヲ先後セラレ度候。

通商航海條約案中旧條約ヲ訂正シ若ハ新設シタル條項及漁業ニ關スル協約案ノ各條項ニ對シテハ一々説明ヲ加ヘ之カ参考材料ヲモ添付シ置候ニ付茲ニ殊更精細ナル説明ヲ為スノ必要無之候得共兩約案ノ作成上左記之件々特ニ閣下之御参考迄ニ申進候。

一、通商航海條約

(イ) 樺太島境上貿易及輸入禁制品ニ關スル規定ヲ設ケサル理由

樺太島ニ於ケル兩國境上ノ貿易及輸入禁制品ニ關シ両國間ノ條約中ニ早晚之カ規定ヲ設クルノ必要アルハ論ヲ俟タサル義ニ有之候然レトモ前記國境上ノ情態ハ今後精細ナル踏査ヲ遂グルニ非サレハ未タ之ヲ確言スル能ハスト雖諸種ノ事情ヲ綜合スルニ陸上貿易ハ目下

(ア) 旧條約第十條第三項ノ削除

我邦ノ沿岸航海ニ關スル規定ハ他國トノ條約ニシテ存在スル限り露國船舶ハ最惠國條款ニ依リ當然該航權ヲ有スル証ナレハ談判ノ際實質上存在ノ必要ナキ此條項ヲ削除スルコトニ關シ露國政府ノ同意ヲ得ルコトハ決シテ困難之義ニ有之間數候而シテ本項ノ削除ハ本條約ノ体面上緊要ナルモノト認メ候。

(乙) 文書ノ檢閱ニ關スル規定(第十五條)

本條約案ノ説明中ニ詳述シタル通本件ニ關シ既ニ獨露及仮露條約中ニ規定シアルガ故ニ我駐露外務官吏ハ最惠國條款ノ作用ニ依リ當然文書檢閱上ノ自由ヲ享受シ得ヘキヲ以テ露國政府ハ此新條項ヲ設クルノ必要ナキコトヲ主張スルヤモ計リ難シト雖トモ御承知ノ如ク最惠均霑ナルモノハ他國ト露國トノ條約ノ廢止又ハ麥更ニ因テ條チ影響ヲ被ルヲ免レス帝國政府ハ此ノ如キ不希望スル次第ニ有之候。

(ホ) 旧條約第十七條及第十八條ノ削除

旧條約第十七條ハ今日最早存在ノ理由ナシ而シテ永代借地ニ關スル露國ノ利益ハ今般家屋稅問題仲裁々判々

帝国政府ハ海路遼東租借地へ輸入スル外國品ニ對シ当分ノ内何等ノ稅金ヲ賦課セサル考ニ有之候尤本項ノ談判ニ際シ露國政府ヲシテ如此キ我意思ヲ知ランムルハ本項ノ成立上不得策ナルヘキニ付右ハ閣下限リノ御舍迄ニ申添置候。

決ノ執行ニ由テ充分保障セラル、ヲ以テ之ニ闕シ本條約ニ何等ノ規定ヲ設クル必要無之又同條末項ノ場合ハ露國人ニ闕シ現存スルモノ一モ之ナキヲ以テ同項モ亦之ヲ復活セシムルノ必要無之候

旧條約第十八條ヲ復活セシムルノ要ナキハ自明ノ理ニ有之候

(イ) 協定税目ヲ設ケサル理由

本條約案ノ作成ニ際シ協定税目ヲ設クルノ可否ニ闕シ諸種ノ材料ニ就キ篤之力利害得失ヲ討究セシ結果現時ノ両国通商關係上到底相互ニ有利ナル税目案ヲ作成スルノ基礎ヲ發見スル能ハサリシニ因リ我提案中ニハ本件ニ關スル規定ヲ設ケサルコトニ決定致候然ルニ旧條約議定書第二項ニ於テ両国政府ハ關稅ニ關シ最惠國主義ヲ適用スルニ當リ實驗上満足ト認ムルコト能ハサル場合ニハ協定税目ヲ設クルコトニ同意スヘシト規定シアリタルニ依リ本條約ニ關スル談判ニ際シ露國政府ハ之ヲ約定セシコトヲ提議スルヤモ計リ難ン此場合ニハ先方提案ノ如何ニ因テハ一応再調査ヲ遂クルノ必要アルヘシト雖トモ我ヨリ進ンテ之カ提議ヲ為サヘルヲ以テ得策ト認メ候

行シ若ハ届留スル我邦臣民ノ旅券ニ対スル査證料及其ノ他ノ公課金ヲ歐露ニ於ケル場合ノ半額ト規定シタルハ該地方へ往来スル我邦臣民ノ交通ヲ輕易頗繁ナラシメ以テ両国通商及漁業上ノ關係ヲ發展セシメムトスルノ目的ニ外ナラス候然レトモ若シ萬一露國政府カ此提議ニ闕シ何等ノ考量ヲ加フルノ意思ナク強テ之ヲ歐露ト均一ニセムコトヲ主張スル場合ニハ歐亞ノ區別ヲ立ツルノ提議ヲ撤回候テモ差支無候之ニ反シ若シ同政府ニシテ本項全体ニ闕シテハ獨露新條約中ニ規定シアルヲ以テ我邦ハ最惠國條款ニ依リ之ニ均霑シ得ヘシトノ理由ノ下ニ本項ヲ撤回セムコトヲ主張スルコトアルモ前記均霽作用ノ結果ニ満足スヘキモノニ非サルニ由リ之ヲ峻拒シ特ニ本條約中ニ明文ヲ掲クル様致度候

(ロ) 領事館ノ設置 (外交)

浦港ニ於ケル我貿易事務館ヲ領事館ニ改ムルコトニ付外交文書案ノ説明中ニ詳述セシ通リナルヲ以テ帝国政府ハ開戦前ニ闕シ露國政府ト屢々交渉往復スルトヨロアリンモ遂ニ協議纏ラス茲再今日ニ至リ候處開戦前後ニ於ケル事情ハ帝國政府ヲシテ殊ニ一層貿易事務官ニ代ユルニ領事ヲ以テスルノ必要ヲ感セシメ候又在コ

(ハ) 旧條約ニ付屬スル別約ノ削除

旧條約中別約カ議定書以外ニ存在シタルハ道理上両者ヲ各別ニ存在セシムル必要アリタルニ非ラス單ニ去ル明治二十二年大限改正條約案以来ノ沿革上之ヲ繼承シタルモノナリ而シテ該別約中ノ條項ハ殆ント皆露國ノ利益ノミヲ保障シタルモノニシテ我邦ニ取リテハ独リ專売權ニ闕スル規定アルノミナルヲ以テ其ノ形式上頗ル片務的タルヲ免カレス且專賣權ニ闕シテハ我邦ノ如キ既ニ烟草及鹽ノ專賣ヲ實行シタルモ是レ素ヨリ國家當然ノ権利ニ屬シ他ノ諸國トノ條約中之ニ闕スル規定ナシト雖トモ現ニ今日迄何等ノ紛議ヲ醸シタルコトナシ而シテ旧條約中ノ條項ハ前述ノ通概ネ露國ノ希望ニ係ルモノナレハ我提案中ニ必スシモ之ヲ掲記スルノ必要ナキヲ以テ全然削除シタル次第ニ有之候若シ露國政府ガ談判ノ際強テ之ヲ存置セムコトヲ主張スル場合ニハ帝國政府ハ閣下ヨリ其理由ニ闕シ詳細ナル報告ヲ接受シタル上記別約中ノ條項ニ多少ノ訂正ヲ加ヘ之ヲ本條約議定書ニ挿入スルニ対シ異議無之候

(イ) 旅券ニ關スル規定 (議定書第一)

議定書案本項ニ対スル説明中ニ述ヘタル通り並露ニ旅

ルサコフ領事館ノ撤廃及漁業條約ノ結果トシテ「ニコラエフスク」港及「ベトロバウロウスク」港ニ領事館及其分館ヲ設置シ黒龍江以北ノ沿海州及北部撣太島ニ居留スル臣民ヲ保護シ及該方面ニ於ケル漁業上ノ監督ヲ為スノ必要アルコトハ論ヲ俟タサル義ニ有之候ニ付是非露國政府ヲシテ之ヲ承諾セシムル様特ニ閣下ノ御尽力ヲ煩ハシ度候

浦潮港ニ於ケル貿易事務館ヲ領事館ニ改ムルコトニ付閣下ノ尽力ニモ係ハラス露國政府ニ於テ同意ヲ表セサルトキハ其結果トシテ漁業協約第二條中「日本國領事」トアルヲ「日本國貿易事務官」ニ改ムルヲ要スル次第ニ候

(カ) 松花江ノ航權 (外交)

本件ハ滿洲ニ闕スル日清交渉會議錄中ニ記載シアル通リ露國ニ於テ異議ナキトキハ清國ニ於テモ之ヲ商議シタル上承諾ヲ与フヘキコトヲ約シタルニ由リ形式上露國ノ承諾ヲ得置クノ必要有之候「ボーツマス」ニ於ケル「ウイツチ」伯ノ声明ニ顧ルモ露國政府ハ本案ニ闕シ何等故障ヲ申立ツルノ余地ヲ有サヘルヘシト雖トモ若シ萬一同政府カ不同意ヲ唱フル場合モ有之候半々約

案中ニ説明シタル理由ニ基キ断然我主張ヲ實カル、様致度候

二 漢書之闕不入揚雄

高一卷上紀文之二

第一條　諸電シタル各方面ニ於ケル漁業権ヲ獲得スルコトハ本協約案中唯一ノ必要條件タルハ論フ俟タサレ

トモ其ノ河川及入江ニシテ 土民ノ為ニ留保セ
アシキチヨリス

國民均等ノ体遇（第十一條）

本案不成立ノ場合ニハ漁業上半

場所ハ總テ我邦臣民ニモ之ヲ許ストノ規定モ亦緊要ナル事ニ屬シ之カ得喪ハ我漁業者ニ取り其ノ鬨スルトコロ決シテ鮮少ナラサルカ故ニ此際露國政府ヲシテ之ニ同意ヲ表セシムルコト最モ必要ニ有之候然レトモ若シ本條中土民留保以外總テノ部分云々不成立ノ場合モ到来候半々已ムヲ得ス本協約案ノ紙末ニ添付スル條項即漁区以外ノ地域ニ於ケル製魚ノ権利ニ關スル規定ヲ第八條ヘシテ插入ハシメロ、ヲ三長目或度矣

(四) 魚類及水產物ノ輸出税（第五條）

露國政府カ本協約案第五條ノ規定ニ同意ヲ表シ同國ヨリ輸出スル魚類及水產物ノ免稅ヲ約スルトキハ之カ報酬トシテ我邦ニ輸入スル塩魚及鮮魚ノ免稅ヲ要求スル

閣下ノ御尽力ヲ煩ハシ度候

シ両国講和全権委員間ノ協議ヲ締トシ河川ノ禁漁問題ニ關シ強硬ノ態度ヲ執ルトキハ黒龍江ノ下流タケニ於テ我邦臣民ヲシテ露國臣民ト均シク漁業ニ從事スルノ権利ヲ得セシムルコトニ協定相成候様致度候又露國政

府ニシテ入江ナル文字ヘ其ノ定義明確ナラサルヲ奇貨
トシ 驚鰐海峡ノ一部ヲ 組成スル アムールスキーリヤン
(Liman of Amour) ヲ以テ入江ト見做シ我邦臣民ニ

易ナラサル義ニ付談判ノ際該政府ヲシテ適當ノ手段ヲ
以テ前記海湾ハ入江ニ非ラサルコトヲ声明セシムル様
御談判相成度候

三、條約ノ用語

兩條約ノ締結上実用ヲ主トシ煩勞ヲ省カム力為單ニ
語ヲ以テ其ノ用語トスルコトニ決定致候

両約案ノ成否ハ我邦ニ於ケル戰後ノ經營上ニ至大ノ影響ヲ及ボスヘキハ論ヲ俟クサル儀ニ付此際帝国政府ハ一ニ閣下ノ材幹ニ信頼シ成ルヘク我提案ニ多大ノ変更ヲ加フルコトナク一日モ速ニ之力成功ヲ期待致居リ殊ニ漁業ニ関スル協約ノ如キハ國民ノ輿望ヲ繋クトコロノモノニ有之候間特ニ

林外務大臣時代 目露通商條約 三

第一條

両締約国ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國ノ法律ニ遵由シ何レノ所ニ到リ旅行シ或ハ居住スルモ全ク随意タルヘク而シテ其ノ身体及財産ニ対シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

該臣民ハ其ノ権利ヲ伸張シ及防護セムカ為自由ニ且容易ニ

裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其権利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民ト同様ニ代言人弁護人及代人ヲ選択シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法取扱ニ関スル各般ノ事項ニ付『相互ノ條件ヲ以テ』内國臣民ノ享有スル總テノ権利及特典ヲ享有スヘシ

(説明) 本項中「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ挿入シタルハ出訴ノ自由及司法上ノ権利特權ハ他ノ一方ノ臣民ニ対シ内國臣民ノ享有スルモノヲ總括的ニ享有セシムルニ非ラスシテ其ノ自由若ハ権利特權ノ一種毎ニ各別的ニ交換許与セシムルノ意味ヲ明示スルノ目的即チ締約国ノ一方ハ他ノ一方ノ臣民ニ対シ相互的ニ許与スルコトヲ得サル特權若クハ権利等ハ自國臣民ノ為メニ請求スルヲ得サルノ趣意ニ出テタルモノナリ

住居権旅行権及各種動産ノ所有遺囑又ハ其ノ他ノ方法ニ因

(参考) 本項ニ關シ露國內務大臣ヨリ黒龍總督ニ宛テタル書東訳文及之ニ關スル貿易事務館ヘノ通知書訳文(参考書第一号)

『農業及不動産ノ所有権ニ關スル各般ノ事項ニ關シテハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス』

(説明) 本項ハ全然日仏條約第四條ノ末項ヲ踏襲シ唯タ

其ノ文字ヲ改修シタルモノトス

何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民ヲシテ内國『臣民』若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ納ムル所若ハ将来納ムヘキ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若ハ租税ヲ納メシムルヲ得ス

両締約國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ居住スル者ハ陸軍海軍護國軍民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ

且其ノ服役ノ代リトシテ取立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又

一切ノ強募公債及軍事上ノ賦歛或ハ捐資ヲ免カルヘシ

『前記ノ免除ハ不動産ノ所有ニ付着スル所ノ賦課金及一般

ノ内國臣民カ土地所有者農業者又ハ土地若ハ建物ノ占有者

トシテ負担スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵發ヲ包含セ

サルモノトス』

ル所ノ動産ノ相続並合法ニ得ル所ノ各種財産ヲ如何ニ处分スルコトニ關シ兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内國『臣民』若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特典自由及権利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國『臣民』若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ税金若ハ賦課金ヲ徵收セラルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由及法律勅令及規則ニ從テ公私ノ礼拝ヲ行フノ権利並其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬『若ハ火葬』ノ為設置保存セラル所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬『若ハ火葬』スルノ権利ヲ享有スヘシ

(説明) 露國ニハ其宗教上火葬ノ慣習ナキヲ以テ彼國ニ居留スル我國臣民ノ遺骸ヲ火葬ニ附スル場合ニ於テ地方官憲等ハ之ニ対シ故障ヲ唱フルコトヲ保セス現ニ先年浦潮港ニ於ケル我居留民カ共同火葬場ヲ設置セムコトヲ露國官憲ニ向テ請願シタル際火葬ヲ許可スルヤ否ニ關シ一疑問ヲ惹起シ該官憲ハ黒龍江總督ヲ經テ中央主管省ニ伺出テ其認可ヲ得タル後始テ我居留民ノ願意ヲ聞屈ケタルコトアリ故ニ本項ニ「埋葬又ハ火葬」ト明記シ置クノ必要ヲ認メタルモノナリ

(説明) 本項ハ日澳條約第三條第二項ニ多少ノ訂正ヲ加ヘ旧條約ニ補遺シタルモノナリ

第二條

両締約國ノ間ニハ相互ニ通商航海ノ自由アルヘシ

両締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ總テ『工業又ハ手工業ニ從事シ』正業ニ屬スル各種ノ生産物製造品及貨物ノ卸売若ハ小売當業ニ從事スルヲ得ヘン右當業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ為シ或ハ代理人ヲ以テシ文ハ一人ニテ之ヲ為シ或ハ外国人若ハ内國臣民ト組合ヲ結ヒテ之ヲ為スモ随意タルヘク又家屋倉庫ヲ所有シ或ハ之ヲ借受ケ又ハ使用シ住居及『營業』ノ為ニ土地ヲ借受クルコトヲ得但内國臣民ト同様其ノ國ノ法律警察規則及税關規則ヲ遵守スルヲ要ス

(説明) 旧條約ハ通商航海ノ自由ヲ保障スト雖トモ工業ニ關シテハ何等記載スルトコロナキニ由リ日仏條約第四條ニ倣ヒ本項中ニ「工業又ハ手工業ニ從事シ」ノ十一字ヲ挿入シ次ニ『商業』トアルヲ同シク日仏條約第四條ニ遵ヒ『營業』ニ改ム

(注意) 露國ハ地方ニヨリ外國人ニ対シ土地所有権ヲ許与シ又ハ之ヲ禁止スルトコロアリト雖トモ外國ト接壤シ

若ハ海路之ト近接スル州県ニ於テハ重ニ外国人ニ土地所

有權ヲ与ヘス譬へハ独塊兩國ニ隣接スル波蘭諸州若ハ沿

海州及黑龍州(千八百九十二年以來禁止)ノ如キ其ノ一例ナリトス故ニ将来我国カ外國人ニ土地所有權ヲ許与スル場合ニハ露

國ニ對シテ特殊ノ條件ヲ付スルノ必要アルヘシ此ノ事ハ

本條約案作成ニ關係ナキモノナレトモ序ヲ以テ茲ニ附記ス

該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地諸港及諸河ニシテ外國通商ノ為開カレ又ハ開カルヘキ場所ヘ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得且通商及航海ニ關シテハ政府官吏公吏一私人或

ハ會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ為ニ課セラル所ノ稅金或ハ取立金ハ其性質若ハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民ノ払フ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノモ

ノヲ払フコトナク内國臣民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

『然レトモ本條及前條中ニ掲タル規定ハ両國ノ一方ニ於テ現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ商業警察公安及衛生ニ關スル特別ノ法律勅令及規則ニシテ外國人一般ニ適用スヘキモノハ何等ノ影響ヲ及ホササルモノトス』

(説明) 旧條約ノ本項ニ多少ノ改修ヲ加ヘ商業警察及公造ニ係ル物品ニシテ満洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入スルモノハ孰レモ輸入稅ヲ免セラルヘシ』

『遼東租借地ノ生產若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路満洲國境ヲ經テ露西亞國ヘ輸入スルモノ及露西亞國ノ生產若ハ製造ニ係ル物品ニシテ満洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入スルモノハカラサルモノトス』

『關東州ニ於ケル日本臣民ノ產業ヲ發達セシメ且南滿州鐵道ノ繁榮ヲ謀ル為ニ本項ハ特ニ重要ナルモノナリ』

(参考)

千八百八十八年露韓陸路貿易條約第五條第一項 第二号 第三号 第四号 第五号 第六号 第七号 第八号

千八百八十九年露清陸路通商章程第一條及

千八百六十年北京條約第四條

千八百三十八年露國ト瑞諾國間ノ通商條約

千八百八十一露清條約第十八條

千九百年六月勅令(國議院決裁)第三條

亞露貿易ニ對スル關稅撤回ニ關スル勅令

第五條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ輸出スル一切ノ物品ヘハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ若ハ賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅金又ハ

安ノ外更ニ衛生ナル事項ヲ加ヘタルモノナリ

第三條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居商業『若ハ工業』ノ為ニ供スル家宅倉庫店舗及之ニ屬スル構造物ハ侵スヘカラズ

右家宅及構造物ヘハ猥ニ侵入搜索スヘカラズ又帳簿書類或ハ簿記帳ヲ検査照閱スヘカラズ但内國臣民ニ對シ法律勅令及規則ヲ以テ制定セル條件及定式ニ拠ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版圖内ヘ輸入シ又日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生產或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ版圖内ヘ別國ノ生產或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ノ生產或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入セラルモノ之ヲ禁止スルコトナカルヘシ此ノ規定ハ人畜或ハ農業ニ有用ナ

雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

(説明) 本條ハ單ニ旧條約ノ文字ヲ改修シタルモノナリ

第六條

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦露西亞國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ稅金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ稅金雜費等ヲ課セサルヘシ又露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ露西亞國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦日本國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ヘ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ露西亞國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ稅金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テス

ルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金、雜費等ヲ課セサルヘシ右相

互対等ノ取扱ハ右物品ノ直ニ原產地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施スモノトス

輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ締約国ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ

物品ハ其ノ輸出ノ日本船舶ニ依ルト露西亞船舶ニ依ルトニ拘ハラス又其ノ仕向先ノ締約国ノ一港タル第三國ノ一港

タルトヲ問ハス締約国ノ版圖内ニ於テハ之ヲ課スルニ同一ノ輸出税ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ獎励金並税金払戻ノコトヲ以テスヘシ

第八條 政府、官吏、公吏、一私人、会社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ為ニ課セラルル所ノ噸税、港税、水先案内料、燈台税、檢疫費其ノ他之ト同種ノ税金ハ其ノ性質並名義ノ如何ニ拘ハラス同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶一般ニ課スルモノニ非サレハ兩締約国ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ両國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第八條

政府、官吏、公吏、一私人、会社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ為ニ課セラルル所ノ噸税、港税、水先案内料、燈台税、檢疫費其ノ他之ト同種ノ税金ハ其ノ性質並名義ノ如何ニ拘ハラス同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶一般ニ課スルモノニ非サレハ兩締約国ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ両國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第九條

(説明) 旧條約本條中「内國船舶ニ許与セサル特典ハ均シク他ノ一方ノ締盟國ノ船舶ニモ許与セサルヘシ」ノ意義明晰ヲ缺キ歐文ト一致セサル点アルヲ以テ本文ノ如ク

訂正ヲ加ヘタリ

第十條

兩締約国ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス各其ノ法律勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル露西亞國臣民又ハ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル日本國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各右法律、勅令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許与シ若ハ許与セラルヘキ諸権利ヲ享有スルモノトス

第十條

金露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港へ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下

ノ版圖内ノ二箇以上ノ港へ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル露西亞國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剰余ヲ陸揚スル為他ノ一港若ハ數港へ進航スルコトヲ得ヘシ但常ニ両國ノ法律及税關規則ニ從フヘキモノトス

第十一條

但若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セサルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ通知スヘシ
金露西亞國皇帝陛下ノ『領水』ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル日本國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手続ハ露西亞國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ為スヘク又相互ノ主義ニ基キ日本國皇帝陛下ノ『領水』ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル露西亞國船舶ニ關スル一切ノ救助ノ处分ハ日本國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ為スヘシ

右難破若ハ乗上ケタル船舶並其ノ器具及其ノ他一切ノ附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物並商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ売却シタルトキハ其收得金並該遭難船内ニ発見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人現場ニ在ラサルトキハ内西法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ代辦領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ内國船舶難破ノ場合ニ於テ払フヘキ所ノ物品保存費並難破救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ払フヘキモノトス
難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ為ニ通関手續ヲ為スモノニ非サレハ一切ノ關稅ヲ免除スヘシ但消費ノ為ニ

領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ

両締約国ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀨ニ乘上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ

壳捌ク場合ニハ普通ノ閥稅ヲ納ムルヲ要スルモノトス

両締約國ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ淺瀬ニ乗上ク或ハ難破シタルトキ『其ノ持主、船長若ハ他ノ持主代理人カ不在ノ場合若ハ現場ニ在リテ請求スル場合ニハ當該總領事、領事、副領事若ハ代辦領事ハ其ノ自國民ニ必要ナル補助ヲ与フル為干与スルコトヲ許サルヘキモノトス』

(説明) 旧條約ノ本項ニ多少ノ修正ヲ加ヘタルモノナリ

第十二條

本條約ニ於テハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト看認メ又露西亞國ノ國法ニ從ヒ露西亞國船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ露西亞國船舶ヘ看認ムヘシ

『日本國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亞國ノ船舶積量測度証書及露西亞國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亞國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亞國ノ船舶積量測度証書ハ日本國及露西亞國ノ諸港ニ於テ更ニ測度ヲ為スコトナクシテ承認セラルヘキモノトス』

(説明) 船舶積量互認ノ件ニ關シ我邦ハ既ニ獨國(十三)

三年) 並瑞典、諾威國(三十五) ト取極ヲ為シ其ノ他ノ諸國トモ追々之ニ閑スル條規ヲ取極ムルノ必要ヲ認ムル場合ニ付本項ノ規定ヲ通商航海條約中ニ設ケ他日露國ト特ニ前記ノ如キ取極ヲ為スノ煩ヲ省キタルモノナリ而シテ日露兩國間ニ現存スル通商航海ノ關係上此ノ規定ヲ設クルトキハ我カ享有スヘキ利便ハ彼ニ比シ一層大ナルモノアルヘキヤ疑ラ容レサルナリ

第十三條

若締約國ノ一方ニ屬スル軍艦或ハ商船ノ海員ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ脱船スル者アルニ際シ右船舶所屬國ノ領事又ハ其ノ代理官ヨリ其ノ『逮捕』引渡ノコトヲ地方官ニ依頼スルトキハ該地方官ハ其ノ權力ノ及フ限該脱船人ヲ『逮捕』シ且之ヲ引渡ス為助力ヲ為スヲ要スルモノトス但海員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脱船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第十四條

両締約國ハ其ノ一方ノ通商航海『及工業』ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商航海『工業及手工業』ニ關スル一切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、『船舶』、臣民或ハ人民ニ現ニ許与シ或ハ将来

チ締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ領事官ニ対シ相互的ニ許与

スルコトヲ兩締約國ニ於テ約ス

(説明) 本條約案第二條第二項ト閥聯シテ通商及航海ノ外更ニ工業及手工業ヲ加ヘ又日英條約第十五條ニ從ヒ政府及臣民ノ外船舶ヲ加フルノ必要アリトス

第十五條

両締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都府及其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事ヲ置クコトヲ得ヘシ但領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラス

然レトモ右ノ制限ハ他ノ一方ノ外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締約國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事ハ『相互ノ條件ヲ以テ』一切ノ職務ヲ執行シ且其ノ在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ既ニ許与シ或ハ将来許与セラルヘキ一切ノ特典、特權、免除及『職權』ヲ享有スルコトヲ得ヘシ

(説明) 本項中「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ハ両締約國カ相互ニ他ノ一方ノ領事ニ最惠國領事ノ諸特權及諸職權ヲ總括的ニ許与スルニ非ラスシテ該領事ノ一特權或ハ一職權每ニ各別的ニ交換賦与スルノ意義ヲ示スノ目的即

職權ハ千八百七十四年露獨領事職務條約(露國條約簽纂第一卷第一頁以下) 千八百七十六年露西領事職務條約(同上第十頁以下) 千八百七十五年露伊領事職務條約(同上第十九頁以下) 千八百五十九年露英通商航海條約(同

上第百十四頁以下) 及之ニ付屬スル相統取扱條約(同上第六十二頁以下) 等ニ依テ規定セラレ實際上日本ニ於ケル最惠國領事ノ職權ト異ナラス依テ該修正案ノ如ク「職權」ナル文字ヲ挿入スルノ結果ハ毫モ我邦ニ取りテ不利ナル点ナク却テ帝國臣民ノ将来露國ニ赴クモノ益々增加スヘキヲ以テ其ノ利益鮮少ナラサルヘシ

(参考) 日仏通商航海條約第十九條

『露西亞國ニ於ケル文書檢閱ニ對シテハ日本國ヨリ露西亞國ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館並之ニ附屬スル諸官吏ハ新聞雜誌並學術技芸及文學ノ著作ニ關シ完全ナル自由ヲ享有スヘシ』

(説明) 露國ニ於ケル文書ノ檢閱ハ頗ル嚴重ニシテ常ニ渡滯シ易ク殊ニ新聞雜誌ノ如キ苟モ露國ノ政略ニ反対ナル記事アレハ悉ク抹殺セラレ且檢閱事務淹滯ノ為適時ニ之ヲ受領スルヲ得サルヲ以テ往々不便ヲ感スルコトアリ今後日露ノ關係益々親密ヲ加ヘ露國內各處ニ我領事館ヲ設置スル場合ニ於テ各領事カ本項規定ノ特權ヲ享受スルコトヲ得ハ其ノ利益決シテ鮮少ナラス故ニ千九百四年締結露獨通商航海追加條約ノ規定ニ鑑ミ本案ヲ特載シタルナリ

第十八條

リ本條約ハ批准セラルヘシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ其ノ調印後四箇月以内ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ

『右證拠トシテ双方ノ全權委員ハ本條約ニ記名調印スルモノナリ』

明治三十九年 月 日即千九百六年 月 日
(月 日) 二於テ之ヲ作ル

(附屬書二)

議定書案説明書

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ本日調印セシ通商航海條約ノ外双方ニ關スル特別ノ事項ヲ規定スルヲ以テ兩國ノ利益ト為シ双方ノ全權委員ハ左ノ約定ニ同意セリ

第一『日本國臣民ノ携帶スル自國旅券ニ對スル露西亞國官憲ノ查證ノ有効期限ヲ六箇月トス露西亞國官憲カ日本國

臣民ニ外國行旅券ヲ交付シ若ハ其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手數料若ハ取立金ハ何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス五拾哥ヲ超過セサルヘシ

(参考)

千九百四年露獨通商航海追加條約中千八百九十四年締結通商航海條約付屬議定書第一條ニ增補ノ條項 第九号 千八百七十四年締結露獨領事職務條約第四條 第十号 第十六條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ法律ニ定期方法ニ依リ終了スル迄効力ヲ持続スヘシ

兩締約國ノ一方ハ明治四十三年七月十七日即千九百十年七月四日(十七日)以後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ他ノ一方へ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ為シタル後十二箇月ヲ経過シタルキハ本條約ハ全然消滅ニ帰スヘキモノトス』

(説明) 本項ニ於テ四十三年七月十七日ト定メタルハ日露新通商條約ノ終了期ト自余諸現行條約ノ終了期トヲ同一ニシ以テ現行條約改正事業ニ累ガ及ホササラムカ為ナ

亞細亞露西亞ニ旅行シ若ハ居留スル日本國臣民ノ旅券或ハ居住券ニ對シ徵收スル査證料及手數料若ハ取立金ハ歐羅巴露西亞ニ對スル旅券或ハ居住券ニ關シ徵收スル金額ノ二分ノ一ヲ超過セサルヘシ』

(説明) 前段ハ露國ニ居留スル日本國臣民カ同國ヲ出発スルニ際シ彼等ヲシテ開戰前ニ於ケルカ如ク露國赤十字社ノ經費ニ充ツル旅券特稅(五留)ノ如キ附加稅ヲ負担セシメサル目的ヲ以テ千九百四年露獨通商航海追加條約第六條第二項ノ規定ニ進シ之ヲ特定シタルモノナリ而シテ末段ハ我邦ト亞露殊ニ黑龍江沿道地方トノ通商及漁業上ノ關係著シテ發達シ且今後益々錯綜ヲ加フヘキハ明瞭ナルニ由リ我國臣民ノ交通來往ヲ輕易ナラシムルノ必要ヲ認メタルニ由ルモノニシテ若此ノ末段ヲ成立セシムルトキハ我漁業者ノ如キ毎年短時期間露國ニ往復スル者ニ取り利便ヲ享クルコト決シテ鮮少ナラサルヘシ

(注意) 露國官憲ハ其ノ領土内ニ居住スル外國臣民ノ國境外ニ出發スルニ際シ外國行旅券ヲ發給セスシテ單ニ各自所持ノ旅券ヘ出發差支ナキ旨ヲ記入スル場合少ナカラス右手続ハ露國旅券規則中前記旅券ヲ交付スル

ト同一ノ効力ヲ有スルコトヲ規定シアルヲ以テ此ノ場合ニ於テモ露國官憲ハ均シク規定ノ料金ヲ徵スヘシ

(参考)

千九百四年露獨通商航海追加條約

第六條第二項
露國旅券規則第三百一條第二百五十二條及
第二百五十三條

第十一号

露國外國行旅券ニ對スル臨時特稅ノ賦課
ニ關スル本省及在外公館往復書類

第十二号

露西亞帝國政府ハ満洲國境ヲ經テ露西亞領土ニ輸入スル日本國ノ貨物及商品ニ對シ賦課スル輸入稅率ヲシテ

如何ナル場合ニ於テモ西伯利諸港ヲ經テ露西亞領土ニ輸入スル貨物及商品ニ對シテ賦課スルモノヲ超過セシメ

サルコトニ同意ス』

(説明) 日露戰爭前満洲ニ於ケル鐵道ハ全然露國ノ經營ニ係リシモ講和條約ノ結果トシテ露國ハ其ノ一部ヲ我邦ニ讓与スルニ至レリ若露國ニシテ将来我鐵道ニ由リ露國領土ヘ輸入セラルヘキ貨物ニ對シ不當ノ稅金ヲ課スル如キコトアラハ我邦ノ不利之ヨリ大ナルナシ故ニ豫メ本項ノ如キ規定ヲ設ケ置キ以テ我鐵道ヲ通過スル貨物ニ對シ其商路ノ安全ヲ保障セントスルモノナリ

愛璉條約第一條ニ於テ黒龍江、松花江及烏蘇里河ノ航權ハ露清兩國ノ船舶ニ限り其ノ他ノ外國船舶ニ對シ一切之ヲ許ササルコトヲ約定シタルニ由リ露清兩國ハ我邦ノ如キ直接之ト接壤セサル邦國ニ對シ國內ノ河川ニ於ケル航權ノ讓与ヲ認諾スルヤ否ヤ頗ル疑ハシ然トモ前記三河ノ内松花江ハ露國ト直接ノ關係ナク満洲ノ中央ヲ貫通シ其肥沃ナル農產地方ニ取り唯一ノ交通路ナルノ故ヲ以テ特ニ満洲貿易ト密接ノ關係ヲ有スル我邦ニ對シ露清兩國ヲシテ該河ノ航權ヲ讓与スルコトニ同意セシムルハ最モ必要ノ條件ナリトス

茲ニ注意スヘキ一事ハ「ボーツマス」講和條約會議錄第三号所掲ノ如ク露國全權ハ満洲ニ於テ露國カ機会均等主義ニ反スル特權ヲ有スルコトナシ若アリトセハ必ス之ヲ放棄スヘシト声明シタルニ在リ故ニ松花江ノ航權ヲ露清兩國ニ專有セシムルハ明カニ前記主義ト背馳スルモノナルヲ以テ此際該特權ヲ全然放棄セシムルニ相當ノ理由アルモノトス

(参考)

千八百五十八年愛璉條約第一條 第十四号

第三二本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約ノ批准ト共ニ批准セラレタルモノト看做サルヘシ又本議定書ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同時ニ終了スヘキモノトス』

右證拠トシテ双方ノ全權委員ハ本議定書ニ記名調印スルモノナリ

明治三十九年 月 日 即千九百六年 月 日
(月 日)ニ於テ之ヲ作ル

(附屬書三)

交換外交文書案説明書

在露日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ到ル

外交文書案

拜啓陳者從來松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許与セサルコトニ規定相成居候處其後ニ於ケル満洲内地ノ商業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ミ貴國政府ハ貴國ニ關スル限り該航權ヲ今後日本帝國ノ船舶ニ及ホスコトニ御同意相成候様致度帝國政府ノ訓令ニ依リ此段得貴意候敬具

(説明) 本條約ノ締結ニ際シ露清兩國ノ境上ニ在ル黒龍江及烏蘇里河ノ航權ヲモ併セテ獲得シ得ヘキカ如ク見ユレトモ是等諸川ノ航權ニ關シ露清兩國ハ千八百五十八年

露國外務大臣ヨリ在露日本國公使ニ到ル

外交文書案

拜啓陳者從來松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許与セサルコトニ規定相成居候處其ノ後ニ於ケル満洲内地ノ商業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ミ該航權ヲ今後日本帝國ノ船舶ニ及ホスコトニ關スル日本國皇帝陛下ノ政府ノ本付公文ニ對シ帝國政府ハ帝國ノ關スル限り全然之ニ同意ヲ表シ候此段得貴意候敬具

在露日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ至ル

外交文書案

拜啓陳者日本國ト西露トノ通商及漁業上ノ關係著シク發達シ且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付此際帝國政府ハ浦潮港及「ニコラエフスク」港ニ帝國領事館「ペトロパウロフスク」港ニ領事館分館ヲ設置致度候間貴國政府ニ於テ之ニ御同意相成候様致度帝國政府ノ訓令ニ依リ此段得貴意候敬具

露國外務大臣ヨリ在露日本國公使ニ至ル

外交文書案

且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付浦潮港及「ニコラエフスク」港ニ日本国領事館「ペトロパウロフスク」港ニ領事館分館ヲ設置スルコトニ全然同意ヲ表シ候此段得貴意候敬具

(説明) 今ヲ距ル約三十年前我政府カ露国政府ト交渉ノ末浦潮港ニ貿易事務館ヲ構設セシ時代ニ在テハ該港ハ全ク純然タル陸海軍根拠地ニシテ洲庁及税關ノ設ナク市制ハ実施セラレス商港ハ築造セラレス該港ノ行政事務ハ細大挙ケテ軍務官憲ノ手ニ一任シアリ且我居留民ノ數僅力ニ二三十人ニ過キサリシモ今日ハ全然其ノ趣ヲ異ニシ前日ノ諸施設ハ殆ント整頓シ殊ニ欧亜貫通鐵道ノ完成ト共ニ該港ハ宇内公道ノ衝路ニ当リ争ナキ通商港ト變シ日露開戦前事實上旧浦潮駐在貿易事務官ノ管轄ニ屬セシ西伯利及北滿洲ノ各地ニ居留セシ我國臣民ノ數ハ殆ント七千ノ多キニ達シ日露両國間ニ存在スル政治及經濟上ノ關係ハ年ヲ逐フテ益々錯綜複雜ヲ極メ來リ種々ノ關係上從前ノ如ク公然タル官吏ノ資格ナキ貿易事務官ランテ此ノ如キ広瀬ナル地域ニ存在スル夥多ノ臣民及其ノ利權ヲ完全

事務官ニ対シ暗号電信ノ使用ヲ禁止シ又ハ同官ヲシテ或ル場合ニ於テ我カ国旗ヲ撤去シ之ニ代ユルニ露国旗ヲ以テスヘキ命令ニ服從セシメタルコトアリ將來其他ノ事項ニ關シテモ亦我カ貿易事務官ノ既得權利ヲ減縮セシメラル虞ナシトセス幸ニ我カ貿易事務官ハ平素露國官憲ノ好遇ヲ受ケ他ノ同僚ニ許与セラレサレ権利及特權ヲ享有セシニ拘ラス該官憲ハ其ノ利害大ナラサル事件ニ關シテハ我ニ対シ成ルヘク好意ヲ表示スルモ事苟モ露國ニ取り不利益ナル場合ニハ貿易事務官ハ此ノ如キ事件ヲ取扱フ職權ナシ或ハ同官ノ容喙スヘキ事柄ニ非ラス或ハ同官ノ公文ノミニテハ不充分ナリ抑ト種々辭柄ヲ設クルコト往々ニシテ同官カ我政府ノ代表者トシテ其ノ地盤ノ脆弱ナル殆ント云フニ忍ヒサルモノアリ

我政府ニ於テハ夙ニ領事官ヲ該方面ニ簡派スルノ必要ヲ認メ先ツ其ノ第一着手トシテ在浦潮貿易事務館ヲ領事館ニ改ムルノ議ヲ起シ去ル明治三十四年来露国政府ト教度ノ交渉ヲ重ネシモ之ニ関スル協議纏ラサルニ先チ不幸ニシテ西國ハ干戈ヲ交ユルノ止ムヲ得サルニ至レリ而シテ兩國開戦前後ニ於ケル事情ハ我政府ヲシテ殊ニ一層貿易事務官ニ代ユルニ領事官ヲ以テスルノ必要ヲ感セシメタ

ニ保護セシムルノ不可能ナルハ最早掩フヘカラサルノ事

実ナリトス

抑モ最初我政府カ貿易事務官ヲ派遣スルニ際シ露国政府ハ我國領事ノ駐在ヲ許スニ於テ何等差支ナキモ若他国モ亦此ノ例ニ倣ヒ各其ノ領事ヲ派駐セムトスル場合ニ之ヲ避クルノ途ナキニ由リ我政府ヲシテ貿易事務官ノ名稱ヲ以テ官吏ヲ駐留セシメ實際上領事ノ職務ヲ執行セシムヘシトノ内談ヲ受クタル位ナレハ爾來我貿易事務官ハ領事官訓令ノ範囲内ニ於テ為シ得ル丈ケノ職權ヲ執行シ我カ臣民ノ利益ヲ保護シ来リ且該事務官ハ浦潮港ニ於ケル唯ノ外國官吏タリシヲ以テ之ニ対スル露國官憲ノ待遇自然特殊ニシテ鄭重ナラサルハナク殆ント何等領事ト異ナルノ点ナカリシカ八九年前ニ至リ清米両國モ前後相踵テ各其ノ貿易事務官ヲ任命駐留セシメタリ露國官憲ハ此等新任者ニ対シ貿易事務官ナルモノハ公然タル官吏ノ性質ヲ具備セルモノナリトノ理由ニ基キ暗号電信ノ使用及旅券ノ發給ハ勿論地方官ヘ公文ヲ發送スルコトサヘモ許与セサリシ為彼等ハ我カ貿易事務官ニ対スル待遇ヲ引證シ同官ノ享有スル権利待遇ニ均霑セント試ミタル結果自然延テ同官ノ職權ニ侵害ヲ加ヘ曩ニ露國官憲ハ我カ貿易

リ(本件ニ関スル始末ハ在浦潮貿易事務館ヲ領事館ニ改ムルノ件ニ關スル書中ニ詳カナリ)

然ルニ日露交戦ノ結果露國ハ遂ニ旅大ノ租借權ヲ喪失シ浦潮港ハ該國ニ取り東洋方面ニ於ケル重要ナル軍港及要塞タルト同時ニ唯一ノ通商港タルノ地位ヲ占ムルニ至リ加フルニ該港ハ欧亜ヲ貫通スル大鐵道ノ最終点ニ位シ西伯利及北滿洲内部ノ發達ト共ニ頗ル多望ナル前途ヲ有シ愈々該方面ニ於ケル通商關係ノ全然恢復セラルニ至ラハ日露貿易ノ情勢ハ從前ニ比シ一層ノ發展ヲ見ルヘキノミナラス我國臣民ノ亞露方面ニ移住スルモノノ旧時ニ倍蓰シ今後両三年ヲ出テ斯シテ西伯利及北滿洲ヲ通シ一万人人ノ多キニ達スルハ殆ント疑ヲ容レサルナリ

前述ノ理由ニ基キ本條約ヲ締結スルニ際シ是非トモ露國政府ヲシテ浦潮港ニ我領事官ヲ駐在セシムルコトニ同意セシムルノ必要アルモノトス

「若シ万一露国政府カ我カ請求ニ対シ無條件ニ同意ヲ表示スルコトヲ欲セサル場合ニハ已ムヲ得ス左記二方法中ノ一ヲ執ルノ外ナシ」

在ヲ許スコトヲ條件トシテ浦潮港ニ我領事ヲ駐在セシムルコト

二、露政府ヲシテ黒龍總督ノ駐在地ニ我領事官ヲ駐在セシムルコトニ同意セシメ而シテ浦潮港ニハ從前ノ通リ貿易事務官ヲ存置シ同官ノ職權外ニ涉ル事項ハ

総テ前記領事官ヲシテ之ヲ處理セシムルコト」

而シテ浦潮港ニ於ケル貿易事務館ヲ領事館ニ改ムルコトハ素ヨリ焦眉ノ急務タリト雖トモ之ト同時ニ黒龍江口ニ在ル「ニコラエフスク」港ニ領事館ヲ新設シ（旧「コルサ館ニ代ユ）該河以北沿海洲及北部樺太島ニ居留スル臣民ヲ保護シ兼テ該方面ノ漁業上ニ有力ナル監督ヲ加フルコト最モ必要ナリ且今後漁業條約ノ締約ト共ニ東察加方面ニ於ケル彼我漁業關係ハ署シク錯綜スヘキハ明瞭ナルニ由リ我邦ハ此際「ペトロバウロフスク」港ニ在「ニコラエフスク」港帝國領事館ノ分館ヲ設置スルノ權利ヲ留保シ置キ何時クリトモ必要ノ場合ニハ少クトモ漁季中位ハ我漁業者監督ノ為該地ヘ領事館員ヲ派遣シ分館ヲ開設シ得ルノ準備ナカルヘカラサルナリ

（注意）哈爾賓ニ領事館ヲ新設シ北滿洲全体ヲ管轄セシ

八月五日 前一〇、露都着

本野公使

第一〇四号

九月十七日接受

本年第一八二号

九月十七日接受

本年八月十八日露都発刊「ノーヴォエ・ウレーミヤ」紙上「日本トノ通商條約ニ關シ」ト題シ大要別紙訳文ノ如キ論說掲載有之候間御参考迄同訳文茲ニ差進候敬具

明治三十九年九月九日

在浦潮

貿易事務官 川上俊彦（印）

外務大臣侯爵 西園寺公望殿

（附屬書）

八月十八日付「ノーヴォエ・ウレーミヤ」紙論說

（訳文）

ニ於テ露國委員ハ右提出案ニ關スル回答書ヲ送リ其上ニテ逐條審議ニ移ルヘシ次回ノ會見ハ關係官庁ヨリノ意見ヲ求ムルノ必要アルニ付約四週間にニ於テ開キタシトノコトナリシ故之ヲ諾シ散会セリ

五 明治三十九年九月九日 浦潮在勤川上貿易事務官ヨリ
日露通商條約ニ關スル新聞記事訳送ノ件

林外務大臣時代 日露通商條約 五

メ同方面ニ居留スヘキ多數臣民ノ利益ヲ保護セシムルコト從來ノ事迹ニ微シ頗ル肝要ナリ其ノ他西伯利及北滿洲（露國ノ勢力範囲ニ屬スル部分）中ノ都市ニシテ領事館若ハ分館ヲ設クルノ必要アル場所ナキニアラスト雖トモ此等ハ漸次實行スルコトトシ先ツ哈爾賓ニハ必ス領事館ヲ設ケサルヘカラス從前ノ如ク西伯利及北滿洲全体ヲ挙ケ在浦潮領事館ニ一任スルカ如キハ決シテ得策ニ非ラサルナリ故ニ本條約ノ締結ニ際シ浦潮港及「ニコラエフスク」港ニ於ケル領事館設置問題ト共ニ露國政府ノ同意ヲ受ケ置クコト緊要ナリ尤モ哈爾賓ハ清國ノ領土ナルカ故ニ之ニ關シテハ露國政府ニ關スル限り其ノ承諾ヲ得ルノ外ナシトス（参考）

在浦潮貿易事務館ヲ領事館ニ改ムルノ件ニ關スル往復書類

四 明治三十九年八月四日 本野（駐露公使ヨリ）
外務大臣宛（電報） 第十三号

第一回會議ノ模様報告ノ件

（附屬書）

八月十八日付「ノーヴォエ・ウレーミヤ」紙論說

「ボーヴィマス」條約ノ締結後吾人ハ曾テ海ヲ隔テ、隣セル日本ト陸上ニ於テ相接觸スルニ至レリ、此事情ハ自然我ニ於テ豫メ相互的關係ヲ有スル諸問題ヲ明確ニ決定シ置カサルヘカラスコトナレリ、去レハ現時我外務省ニ於テハ日本政府ノ代表者ト共ニ通商條約ノ改正ニ關シ商議ヲ遂ケツツアリ

一方ニハ戦争ノ結果形勢一変シ黒龍江沿道及滿洲ノ租借地

一方ニハ戦争ノ結果形勢一変シ黒龍江沿道及滿洲ノ租借地

帶ニ於ケル特殊ノ情勢ト、他方ニハ満洲及韓國ニ於ケル日本ノ規模宏大ナル商略ニ鑑ミテ、吾人ハ新通商條約カ将来吾人ニ対シ重大ナル關係ヲ有スルモノナルコトヲ思ハスンハアラズ

此問題ヲ研究スルニ當リ吾人ハ先ツ「ポーツマス」條約ノ特殊ナル性質ニ就キ想到セサルヘカラス、當時日本ノ全權ハ日本ノ利權獲得ノ為ニ必要ナル總テノ村料ヲ提ケテ「ボーツマス」ニ於ケル談判場裏ニ現レタリ、而シテ日本全權ハ薩哈哩ニ於ケル豊富ナル漁場カ其有ニ帰セルニ拘ラス、尙ホ我領海ニ於ケル漁業權ヲ獲得シ、又南満洲ニ於テハ遙カニ我占領陣地ノ後方ニ當ル寛城子停車場ニ至ル地帶ヲ其手中ニ收メタリ、抑々寛城子ノ地タル、南北満洲ノ門戸ニシテ又吉林蒙古街道ノ交叉点ニ當ルヲ以テ、啻ニ戰略上ノ要地タルノミナラス、通商上最モ重要ナル地点ニシテ、東清鐵道ノ如キモ其取扱フ穀物ノ三分ノ二ハ實ニ此地ヨリ出荷スルヲ常トス、日本全權カ「ボーツマス」條約ニヨリ我ヲシテ此地ノ讓与ヲ確認セシメシハ智ト云ハサルヘカラス吾人ノ聞ク所ニ拠レハ、日本ハ今回モ亦タ微妙ナル外交的手段ヲ以テ我ト通商條約ノ改訂談判ニ着手セリト、而シテ吾人ハ日本カ今次ノ談判ニ提出セル各種ノ希望的項目ヲ

ル事ヲ明言セサルヲ得ス、何トナレハ日本汽船賃ノ低率ナルト又商業上老熟ナル手腕トハ、我當業者ニ取り競爭上頗ル困難ヲ感スル所ナレハナリ夫ノ黒龍江汽船業ノ基礎脆弱ナル、東清鐵道ノ開通以来著シク其業務ニ衰退ヲ來シ、吾人カ千九百三年第四回「ハーロフスク」総会ニ際シ同業者ヨリ既ニ破産ノ悲境ニ頻セリトノ報告ヲ耳ニスルニ徵シテモ明ナリトス去レハ若シ日本カ今回強請スル所ニシテ成功センカ、北満洲ニ於ケル河川ヤ黒龍江ヤ將々沿海洲ノ諸水ヤ日本汽船業者ノ圧迫スル所トナリ、我辺疆全土ヲ擧ケテ日本商品ノ横溢ニ委シ去ランコト蓋シ必然ノ結果ナルヘシ、換言セハ彼日本人ハ鋒鏑ノ間ニ鉄嶺寶城子間ノ地区ヲ得タルヨリ尙ホ一層広大ニシテ平和的ナル勝利ヲ企図シ、彼処ニ在テハ吾豊富ナル天然ノ倉庫ヲ奪ヒ且ツ通商ノ血管タル鐵道及水路ヲ把握シ、此處ニ在テハ又特ニ我地方ノ自然的發達力ヲ制シ之ニ依リテ全然經濟的恐慌ヲ我ニ与ヘンコトヲ期スルモノト云フヘシ

今回ノ談判ニ當リ我大藏陸軍内務各省委員カ參加スルヤ否吾人之ヲ知ラスト雖モ然カモ吾人ハ東清鐵道ノ經營ニ對シ巨萬ノ資金ヲ投シテ顧ミサリシ我大藏省カ、露國ノ為ニ尽

外ニシテ、別ニ北満洲ニ於テ松花江及嫩江又或ハ黒龍江ヲシテ之ヲ外國交通ノ為ニ、即チ重ニ日本ノ為ニ、開放スヘキ希望ヲ有スルヲ見ルナリ

抑々松花江ノ交通ハ千九百四年ノ露清條約ニヨリ專ラ之ヲ西國ノ間ニ限り、又黒龍江ニアリテハ外國商船カ交通ノ権利ヲ有セサル事明カナル所ナリ、然ルニ日本ハ外國貿易ノ為ニ満洲ヲ開放スルニ口実ヲ得、今ヤ吾人ヲシテ既得ノ権利ヲ放棄シ我租借地ノ背部ニ於ケル河川ノミナラス尙ホ又黒龍江ニ於テモ等シク交通ノ権利ヲ讓与セシムヘキ要求ヲ提出スルニ至レリ、之ニ就キ吾人力カ特ニ注意スヘキハ、日本カ斯ク我勢力範囲内ノ自由開放ヲ要求シツツアル一方ニ於テ、其手中ニアル外部港湾ノ大部ヲ歐人ニ對シテ閉鎖スルコト、例セハ旅順大連ノ如キ歐洲船ノ寄港ヲ許サザルコト是ナリ

斯ノ如キ日本ノ要求ニ対シ、我外務省カ如何ナル措置ニ出テントスルカ吾人之ヲ知ラス、又談判ニ参与スル商務省委員カ如何ニシテ吾辺疆ニ於ケル商業的利益ヲ保障セントスルカ吾人又之ヲ知ラスト雖モ、今日ノ場合日本ニ對スル吾讓与ハ露國ノ汽船業及商業ヲ土崩瓦解ニ帰セシムルモノナ

六 明治三九年五月二十四日 本野駐露公使

林外務大臣宛(電報)

第二回會議ノ模様報告ノ件(一)(二)(三)

(一)

十月二十四日 後一〇、一〇 露都發

前一二、一三 本省着

本野公使

林外務大臣

第一六七号

十月二十三日通商條約ニ關スル第二回ノ會議ヲ開キ第一號

会逐條審議トシテ双方意見ヲ交換シクリ其結果左ノ如シ第一條第一項確定。第二項、露國委員ハ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文句ヲ其儘保存スルトキハ司法取扱ニ關スル双

方臣民ノ有スル権利及特典ハ全ク均一ナラサルヲ得ス又一方ノ裁判所ニ於テ裁判事件ノ起ル毎ニ他方ニ於テ果シニハ斯ル制限ヲ附シタルモノナシ依テ之ヲ削除セサルヲ得サルニ付実行上頗ル困難ナルヲ以テ露國ト諸外国トノ條約ヲ主張セリ本件ニ付テハ次回ノ會議ニ於テ確答スヘキ旨約シ置タレトモ本官ノ所見ニテモ露國委員ノ主張スル如ク實行上双方ノ為メ甚タ困難ナルヘシト信ス就テハ民事訴訟法第八十八條ノ規定モアルニ付「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ代リニ「其國ノ法律ニ遵由シ」ト改メタシ。第三項第四項（火葬ノコトモ挿入シテ）確定。第五項、露國政府委員ハ動産所有權ノコトニ付テハ本條ノ書キ方ニテハ實際露國ハ日本人ニ土地所有權ヲ与ヘ露國人ハ日本ニ於テ土地所有權ヲ有セサルニ付不公平ナリトノ論拠ヲ以テ露國人ニモ土地所有權ヲ与フル様規定シタンノ意見ヲ述ヘタルニヨリ本官ハ其誤解ナルコトヲ説明シ且日本ニテハ未タ孰レノ外国人ニモ土地所有權ヲ許ルサヘルヲ以テ到底此場合斯ル約束ヲ為スコト能ハス且露國ニ於テモ現ニ或ル地方殊ニ沿海州ノ如キ日本人ニ最關係アル地方ニ於テ外国人ニ土地所有權ヲ禁シ居レルニ付

事實上ニ於テモ不公平ニ非ラスト述ヘ露國委員ノ再考ヲ求メタルニ尙講究ノ上ニ非サレハ確答スルコト能ハスト付結局後廻ト為シ置キタリ。第六項、第七項確定。第八項、露獨條約ノ例ニ倣ヒ「一般ノ内國臣民」ナル「一般」ノ文句ヲ削除シ且土地若ハ建物ノ占有者（occupier of land or buildings）ナル文句ヲ「locataires of immovables」ト改ムルコトヲ條件トシテ承諾スヘキ。露國委員述ヘタルニ付本官ハ一應考へ置キ次回ニ於テ確答セント述置キタリ本項ニ付テハ露國委員ノ修正案ニ同意シ差支ナシト信ス。

第一條第一項確定。第二項、露國委員ハ冒頭「the subjects of each of the contracting parties」ノ次ニ「conforming themselves to the laws, regulations and ordinances of the country」ナル文句ヲ挿入シテ本項ヲ承諾スヘキ此（「手工業」ヲ加ヘ且「商業」ヲ「營業」ト改メテ）述ベタルニ付本官ハ右ノ條件ハ同項末文ニアルヲ以テ足レリトスルニ非ラスヤト推測シタルニ露國委員ハ原案ノ書キ方ニテハ此條件ガ同項後半段ニノミ係ルモノ、如ク見ユルニ付更ニ冒頭ニ挿入シテ一層意義ヲ明カニ為シ置キ

タシト答ヘクリ本官ハ別ニ異議ナキ様考フルモ一應熟考

ノ上回答スヘシト答ヘ置タリ。第三項確定。第四項、露國委員ハ「with regard to trade」ノ次ニ「industry, metier, profession」ナル三語ヲ挿入セシムコトヲ提議セリ

大体ニ於テ同意フ表シ置ケリ

第三條第一項（工業ナル語ヲ入レテ）第一項確定

第四條第一項第二項ニ付露國委員ハ主義ニ於テ異議ナキモ書キ方ヲ改メテ露獨條約第六條露仏條約第十四條露澳條約第二條ト同様ニナサンコトヲ提議セリ本官ハ講究ノ上回答スヘシト答ヘ置タレトモ修正案ニ付テハ露國委員ハ必ス固執スヘシト信スルニ付御熟考ノ上可成速ニ御回訓ヲ乞フ。第三項ニ付テハ露國委員ハ關係官庁ニ於テ未タ調査ノ尽サヘル廉アルヲ以テ後廻トナサンコトヲ請求セリ

第五條、六條、七條、八條、九條確定

（続ク）

十月二十五日、后五、二五、露都發
十六日、后一、五五、本省着

本野公使

（11）

記載アルヲ以テ旁々右ノ復活ヲ要求スル権利アリト述ヘタルニ付本官ハ次回ノ會議ニ於テ其承諾シ能ハサル理由ヲ尙充分ニ説明スヘキ筈ナリ

林外務大臣

林外務大臣時代 日露通商條約 六

第十一條確定

第十二條第一項確定。第一項「閔シ露國委員ハ本案ノ主意タル双方ノ利益ナルヲ認ムルモ日露両國ノ船舶積量測定方法ハ各特異ノ点アルヘキヲ以テ之ヲ調和シテ後互ヒ承認スルコトニ致シタシ露國ノ採用セルベ Moorsood system ハシトヤ」 English rule ハ適用シタルモノナリ然レトモ露國ノ純積量測定ハ特別ノ方法ニ依レルヲ以テ他ノ外國トハ特別ノ取極ヲ為シ居レル次第ナリ故ニ本條約ハ左ノ如ク定メ置キタシト提議セリ certificates of tonnage delivered by one of the contracting parties shall be recognized by the other, in accordance with special arrangements to be agreed upon between the two contracting parties.

(露國「バー・リヤ」間條約十一條露國條約十六條)

第十三條確定

第十四條露國委員我原案ヲ承諾ス但 metier ハ復數ト為サ

ハシトヤ提議シ本官承諾セリ

第十五條第一項、露國委員ヨリ「アロコノヤル」ナル語ハ

不必要ナリトノ意見出クリ本官モ別ニ強ヒテ必要ナリト認メサントヤ一応調べ置ク旨答ヘ置タリ其他確定。第十一項確定。第三項、露國委員承諾シテ確定ス。第四項、露

スヤトノ間ヲ起シ日本ハ於テ露國ガ本件ハ闇シ日本臣民ハ守フル同程度ノ保護ヲ露國臣民ハ守フルコトヲ確メサル以上ハ左ノ如ク修正シタシト由出タリ

The two Contracting parties engage to enter, as soon as possible, in negotiations, with the object of concluding a special convention, on the basis of reciprocity regarding respective protection of industrial and commercial property,

本官ハ日本ハ完全ナル特許其他ノ法令完全ヤルヲ以テ露國委員ノ蒙フル如キ結果ヲ生ブルコトナシト答ヘ置タリ次ニ露國委員ハ旧條約第十七條ノ永代借地券確認及借地料以外ノ課稅免除ノ規定ヲ復旧センコトヲ主張セリ本官ハ本件ハ最惠國條款ノ適用ヲ以テ取扱フノ外新タリ旧條約ノ規定ヲ復興スルコトヘ承諾スルコト能ヘサル且ワ述ヘタルモ露國委員ハ更ニ講究シ置カレタキ旨ト述ヘテ後日再ヒ交渉セントスル模様ナリ本官ハ飽迄之ヲ拒絶スル積ナレトモ談判ノ進行如何ニ依リテハ更ニ請訓スルコトアルベシ。

第十七條、露國委員ハ批准交換後十日トアルヘ露國ノ如ク面積広ク領土遠方ハ在ル国ハ取リテハ不足ナリトテ之ヲ通商條約ノ談判ニ於テ名目上實際上其自國ヨリ日本ハ對等

國委員ハ之ハ「粗互ノ條件ヲ以テ」ナル文句ヲ挿入シテ左ノ如ク為サン・ト

Diplomatic officers and consuls de carriere, sent by one of the High Contracting Parties in the territory of the other shall enjoy full and complete franchise in respect of newspapers, periodicals and works of sciences, arts and literatures

本官ハ日本ハ露國ノ如キ出版物檢閱ノ制無キカ故ニ相互通ベルコトハ不必要ナルズキ且論シタルガ結局後廻トナシ置タレトモ強ヒテ拒絕スルノ必要ナシト信ベ

(続ク)

(三)

十月一十五日 月 | | | , 1910 露都發
十六日 月 | | | , 1910 本省着

本野公使

林外務大臣

第一六九号 (続キ)

第十六條、露國委員ハ原案ニ於テ一八九五年ノ旧條約附帶スル議定書第四項ヲ削除シツツ單リ本條ヲ以テ特許等ノ相互保護ヲ求ムルハ實際上片務的讓与ヲ求ムルニ在ラ

「一ヶ月リ修正シ且全体ノ書キ方ヲ改メ左ノ如ク為サンコトヲ提議セリ

The present treaty shall take effect two months after the exchange of ratifications and shall continue in force until July 4th (July 17th) 1911, corresponding July 17th 44th year of Meiji. In case neither of the contracting parties shall have notified, twelve months the before the expiration of that term, its intention to terminate this treaty, this treaty will continue to be obligatory until expiration of one year from the day on which one or the other of the contracting parties will have denounced it.

而シテ右ハ露獨條約ノ例ニ依リタルモノナリトハリ實質上差支無キカ如クナレトモ本官ハ一応考ヘ置クシト答ヘ置キタリ

第十八條確定

余見ハ之レリテ終リ議定書案及外交文書案ニ闇シテハ先方ヨリ未タ何等意見ヲ示サヌ本官ハ今日迄ノ経過及其他種々ノ方面ヨリ洩レ聞ク處ヲ參酌シテ觀察スルリ露國ハ今回ノ通商條約ノ談判ニ於テ名目上實際上其自國ヨリ日本ハ對等

以上ノ讓歩ヲナス事ヲ聊カタリトモ避ケントスルノ態度ヲ
取リ居レルニ付今後ノ談判モ此主義ヲ固執セント努ムルナ
ルヘシト考フ次回ノ談判ニ先チ本電報ノ各事項ニ対スル帝
國政府ノ御方針承知シタキニ付至急電訓ヲ乞フ

七 明治十九年十一月十日 林外務大臣ヨリ
本時駐露公使宛 (電報)

第一回會議ニ關シ回訓ノ件(一)(1)

(1)

十一月十日後二時五十分発

林 大 臣

本野 公 使

第一一七号

貴電第一六七号ニ關シ

第一條第二項 司法取扱ニ關シ他方ニ於テ与フル権利特典ヲ豫メ調査シ置クコト左程困難ナラサルニ付「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ保存シ以テ将来我國ノ蒙ムルコトアルヘキ不利益ヲ豫防シ置キタシ然レトモ露國委員ニ於テ飽迄之ヲ削除スルコトヲ主張セハ之ニ応シ以テ旧條約ノ儘ニ為

四條、露墳條約第二條ヲ參照スルモ其文言モ各々異ナリ一

トシテ我原案ニ勝ルモノアルヲ見ス殊ニ露墳條約第三條ノ如キハ全ク穀物ノ輸入ニノミ關ス依テ露國委員ノ我原案ヲ不滿足ナリトスル理由並ニ彼レノ対案ノ文言ヲ承知シタル後ニ非ザレハ回訓シ難シ

第十條第二項ノ終リニ追加セントスル文言ノ意義不明ナルニ付 duty of supervision ノ性質及右文言ヲ必要トスル理

由詳報アリタシ又旧條約第十條第三項ノ復活ハ全ク無用ナルノ理由ヲ詳説セラレ断シテ之ヲ拒絶セラヘルシ

第十二條第二項ハ露國修正案ヲ承諾シテ差支ナシ

第十五條第一項 「プロコンサル」ナル語ハ削除シテ差支ナシ

第四項ニ關シ本邦ニ於テハ文書檢閱ノ制ナキノミナラス

我提案ハ一昨年締結ノ露獨通商條約第二條ト全く同文ナ

レハ露國ニ於テ之ヲ承諾スルヲ得サル筈ナキニ付我原案ヲ維持セラルヘシ

第十六條 本邦ニ於テハ特許商標及意匠等ニ關シ完全ナル法令アルカ故ニ本條ヲ存スルモ露國委員ノ憂フルカ如キ結果ヲ生セサルコト貴見ノ如クナルニ付原案ヲ維持セラルヘシ但シ該條第一項トシテ露國修正案ノ文言ヲ承諾ス

スモ別段差支ナシ貴案「其國ノ法律ニ遵由シ」ノ文字ハ其ノ實行上兩國民均等待遇主義ヲ全ク破ルニ至ルノ虞アルニ由リ該文字ヲ採用スルヨリハ寧ロ旧條約ノ儘ニ為シ置キタシ

第五項 固ク原案ヲ維持スヘシ但シ露國委員ニ於テ旧條約第十七條ノ復活ヲ固執セハ本項中 (the right of ownership of immovables) ノ前ニアル and ヲ削リ其後ニ (and the holding of land under any other title) ナル文字ヲ加ヘ以テ日本ニ於ケル露国人ノ永代借地權ノ確認ヲ一層明白ニスルモ差支ナシ然レトモ前記第十七條ノ復活ハ斷然拒絕スルヲ要ス

第八項 「一般」ノ文字ハ削除シテ 差支ナシ又軍事上ノ賦役等ニ關スル文言ハ此等賦役ハ元來不動產ノ負担ニ屬スルノ觀念ニ基クモノナルカ故ニ不動產ニ最モ關係深キ者即チ occupiers ニ之ヲ課スルヲ至當トスレトモ露案ヲ斟酌シ locataires or occupiers immovables ト改ムルモ差支ナシ

第二條第二項及第四項 露國委員ノ提案ヲ承諾シテ差支ナシ

第四條第一項第二項ニ關シ露墳條約第六條、露仏條約第十

ルモ差支ナシ

第十七條 批准交換後「十日」トアルヲ「二ヶ月」ト改ムルハ差支ナキモ該條ノ原案ハ旧條約ニ基キタルモノニシテ本邦ト各国トノ條約ニモ均シク用ヒアルモノナレハ今

日露國ニ對シテノミ之ヲ改ムルノ謂ハレナキノミナラス其ノ書方モ至テ明白ナリ依テ露國委員ノ修正ニ同意シ難シ

御承知ノ通り新條約ノ骨子ハ重ニ議定書並ニ外交文書ナルカ故ニ貴官ハ今後ノ談判ニ際シ一層力ヲ尽シ充分ニ我目的ヲ達セラレムコトヲ望ム

(1)

十一月十日後三時四十五分発

本野 公 使

第一一八号

往電第一一七号ニ關シ第一條第二項中相互條件ヲ以テ外國人ノ享有スル特典及權利ハ本邦法制ニ依レハ訴訟上ノ保證及救助ノミナリ又歐米諸國ノ法制ニ於テモ大抵此二者ニ止マルモノ、如シ依テ此事ニ關スル事項ヲ豫メ取調ヘ置クコト左程困難ナラスト思考シタルナリ

八 明治三十九年十一月十日 本野駐露公使ヨリ
及十二月一日 林外務大臣宛(電報)

第三回會議ノ結果報告ノ件(一)(二)(三)

(一)

十一月十一日 後一〇、一五 露都發 本省着

林外務大臣

本野公使

第一七八号

十一月八日通商條約談判會見ノ結果要領左ノ通露國全權ハ原案第四條第三項ニ付

(一) 講和條約第十二條ニヨリ千八百九十五年ノ條約ヲ基礎トナサルヘカラス然ルニ千八百九十五年ノ條約ハ兩國ノ通商關係ヲ單ニ最惠國待遇ニ止メ關稅ニ關シ特別ノ約束ヲナサル精神ナルコト

(二) 目下黒龍江地方ニ輸入スル外國產物ノ無稅ナルハ露國任意ノ处置ニシテ國際的羈絆ニアラス且ツ目下關稅ヲ免除シ外國品ノ自由輸入ヲ許スハ沿黒龍省ノミニ限ル然ルニ日本ノ提議ノ如キハ露國全体ニモ及サントシ其關係頗ル大ニシテ之ニ相當スル代價ナシ租借地ノ無稅輸入ノ如キハ決シテ對當國ノ讓歩ニアラストノ理由ニテ該項ヲ拒

第一七八号(続キ)

次ニ我原案ノ議定書ニ移リ露國全權ハ第一條第一項ニ付大體同意ヲ表シ旅券及出發許可記入ニ關スル取立金ヲ五〇「コヘツク」内トスルコトハ之ニ「國家ノ收入トナル」トノ文句ヲ挿入シテ承諾スベシト云ヘリ其理由ハ赤十字資金トシテ從來取立居ル五「ルーピル」ノ臨時稅ハ各國臣民ニ對シテモ取立居ルニ付日本人ニ限り之ヲ免除スルコトヲ得ズト云フニアリ本件ニ關シ當地ノ獨乙佐官ニ就キ調查シタルニ同國臣民モ新條約ノ規定アルニ拘ラズ同稅ヲ免除セラレズ右ノ次第ニ付キ此点ハ露獨條約ト同様ニスルヨリ外致シ方ナカルベシト信ズ尤モ露國全權ノ言ニ依レバ現在ノ旅券規則ハ之ヲ改正スル筈ニテ改正案ハ次期ノ議會へ提出スルコトニナリ居ル由ナリ

第一條、第二項ニ關シ露國全權ハ日本ノ求ムル半額超過ハ旅券ノ如何ナル種類ニ關スルモノナリヤ日本ニ於ケル露國領事ノ查證手數料ノコトカ露國ヨリ出發スル時發行スル旅券手數料カ將地方官ヨリ外國人ニ發給スル露國滯在旅券ニ關スル手數料ナルカトノ間ヲ設ケ此疑問ヲ解キタル後ニ非ザレバ如何トモ答フルコト能ハズト述ベタリ此点ニ付川上貿易事務官ニ對シ直接問合セ置キタル次第モアレ共尙至急

此ノ問題ニ關シテハ我原案ノ儘ニテハ通過ノ見込ナキヲ以テ露國全体トアルヲ沿黒龍省ト改メテ更ニ協議ヲ試ムヘシ次ニ露國全權ハ我原案ニ於テ旧條約附屬別約ヲ削除セル理由ヲ解スル能ハス是等諸事項ハ露國ノ為メ甚々重要ナレハ條約中ノ一條トシテ規定シ置キタク且ツ其文言ハ千八百九十四年露獨條約第十一條ノ例ニ倣ヒ別電第一七九号ノ如ク致シ度シト申出テタリ此事ニ關シテハ左記ノ事項御詮議ノ上至急御回訓乞フ

リ

絶セリ本官ハ一応ノ答弁ヲナシ確答ハ次会迄延シ置キタ

テ露國全体トアルヲ沿黒龍省ト改メテ更ニ協議ヲ試ムヘシ(兩?)

次ニ露國全權ハ我原案ニ於テ旧條約附屬別約ヲ削除セル理由ヲ解スル能ハス是等諸事項ハ露國ノ為メ甚々重要ナレハ條約中ノ一條トシテ規定シ置キタク且ツ其文言ハ千八百九十四年露獨條約第十一條ノ例ニ倣ヒ別電第一七九号ノ如ク致シ度シト申出テタリ此事ニ關シテハ左記ノ事項御詮議ノ上至急御回訓乞フ

リ

此ノ問題ニ關シテハ我原案ノ儘ニテハ通過ノ見込ナキヲ以

テ露國全体トアルヲ沿黒龍省ト改メテ更ニ協議ヲ試ムヘシ

次ニ露國全權ハ我原案ニ於テ旧條約附屬別約ヲ削除セル理由ヲ解スル能ハス是等諸事項ハ露國ノ為メ甚々重要ナレハ條約中ノ一條トシテ規定シ置キタク且ツ其文言ハ千八百九

十四年露獨條約第十一條ノ例ニ倣ヒ別電第一七九号ノ如ク致シ度シト申出テタリ此事ニ關シテハ左記ノ事項御詮議ノ上至急御回訓乞フ

(一) 該提案第一号第一號及第四號ト我原案第四條第三項及議定書第一項トノ關係

(二) 第一号第四號ト我樟太新領地トノ關係

(三) 第七號ハ相互的ニスルコト

(四) 第五、第六號ニ付テハ我ヨリ要求スヘキコト

(二)

十一月十一日 前九、一〇 露都發 本省着

林大臣

本野公使

(続ク)

詳細ノ御訓令ヲ乞フ

議定書案第二條ニ關シ露國全權ハ前ニ述べタル原案第四條第三項ヲ拒絶スル理由ノ第一トシテ述ベタルト同理由ニ依リ本條モ亦承諾スルコト能ハズ且西比利亜ニ於テ黒龍江以北ノ港ハ常ニ自由港ニシテ又北水洋沿岸ノ港ハ特別ノ取扱ヲ受ケ「エニセイ」河口ノ如キ或ル輸入品ハ無稅ナルヲ以テ日本ノ提案ノ如クスルハ滿州境上貿易ヲ全然無稅トナサンストスルモノナリ又清國產物ニ對シテ無稅トナセルハ陸路通商ニ伴フ特別ノ取扱ヒニシテ露國ハ各國トノ條約ニ於テ常ニ此取扱ヲ相互條件ノ除外例トナシ居ケル次第ナリト述之ヲ拒絶セリ本件ハ第四條第三項ト同様ニ西比利亜港トアルヲ沿黒龍洲ノ港ト修正シテ今一應協議ヲ試ムル考ナリ尙ホ露國全權ハ外交文書ニ關スル協議ハ尙ホ攻究専サム所アレバ次会ニ讓リタク此点ニ付テハ露國ヨリモ提案スル所アルベシト云ヒ而シテ次会ハ十日程隔テ、開会シタシ其間ニ於テ初メニ戻リテ條約各條ノ第二讒会ヲ開クコトヲ得タラヒキ(ルヨウイ?)タシト述ベタリ本官ハ追テ回答スルコトハシテ散会セリ尙本官ガ窃ニ聞ク所ニ依レバ松花江問題ニ付テハ事変前ノ既得權ナリトノ理由ヲ以テ拒絶スベキ考ナル由ナリ

(III)

十一月十一日 十二日 前前「〇、一五 露都發
十二月三日 前〇、一五 本省着

林外務大臣 本野公使

第一八一號

往電第一七八号ノ初メ「議定書」移リ露國全權ハ」ハ次ニ

第一條第一項ニ付

ヲ脱セリ

~~~~~

九 明治廿九年十一月十日 本野駐露公使ニニ  
林外務大臣宛(電報)

修正文案通知ノ件

Petersburg, November 10th 1906. 10.12  
R'D. Tokio, November 11th 1.30 p.m.Hayashi,  
Tokio.

No. 179.

The following is not considered as derogatory to provisions of the present treaty and cannot be invoked in any case in support of any change whatever of

7. Monopoly on any article whatever which Russian Govt. may reserve to themselves.

Motono.

~~~~~

10 明治廿九年十一月十二日 本野駐露公使ニニ
及十三日 林外務大臣宛(電報)

非正式會議ノ模様報告ノ件 (1) (ii) (iii)

(1)

十一月十七日 前二、四七 露都發

十一月十七日 後10、110 本省着

林外務大臣

本野公使

第一八六號

貴電第一一七号ニ闕シ十一月十五日本官ハ露國全權ト非正式余見ヲ行ヒ是迄懸案トナレル各條項ニ付意見ヲ交換セリ

其ノ結果左ノ如シ
第一條第二項ハ本官原案維持ヲ主張シタルモ結局旧條約ノ通リニナスコト。第五項貴訓ノ通り修正シ旧條約第十七條ハ削除ヘバ但露國委員ハ其代リ第1條第四項ハ「with regard to trade, police, industry, metier, profession」ノ次「property」ナル文字ヲ挿入セントラ主張ス本官

the relations of commerce and navigation established by the present treaty between the two High Contracting Parties:—

1. Favours actually accorded to bordering States for facilitating local traffic of a frontier zone extending to fifty versts in width;

2. Favours actually accorded or which may hereafter be accorded, in regard to importation or exportation, to the inhabitants of the Government of Archangel as well as for the northern (and eastern) coasts of Asiatic Russia (Siberia);

3. Special stipulations contained in treaty between Russia and Sweden and Norway of the 8th May 1838;

4. Provisions which relate to commerce of Russia with the bordering countries of Asia;

5. Franchise enjoyed by ships built in Russia and belonging to Russian subjects; which ships are during the first three years exempted from duties of navigation.

6. Immunities accorded in Russia to different companies of pleasure, called yacht clubs.

く別ニ義支無カルマハル考フル既答く置キタリ。第一條第八項「一般」ハ文字ヲ削除、「アキヨバイヤ」ナル語ニ闕シ露國全權ハ仏語ノ「アキヨバイヤ」ハ法律語ニ非バトヘ故ヲ以テ我案ニ反対シ結局主文ハ「locataires or holders (deteneurs) of immovables」ト改ムルコトニヤリ

第四條第一項第一項ニ付テハ我原案通り据置ク様協議シタルリ先方ハ即答シ兼ネタントモ多分通過スシト信セラル。第三項ニ付テハ閣下ヨリノ訓令ヲ俟チ更ニ協議ベシ第十条、露國全權ハ其提出セル追加案ヲ撤回シ第三項ハ貴訓ノ通り削除ノコトニ決定セリ

第十二條第一項、露國修正案ノ通り
第十五條第一項「プロロハナル」削除。第四項露國全權ハ一昨年ノ露獨條約商議ノ際露國ハ之ヲ相互的トナサンコトヲ主張シタルカ結局獨乙ニ於テ條約施行中ハ文書檢閱ノ制ヲ設ケサル旨明言シタルリヨリ條約面ニハ露國ノミノ約束トナリ繰リタルモノニ付日本全權ニ於テモ同様ノ明言ヲナスニ及テハ原案ヲ承諾スグシト云々本官ハ獨乙ト同様ニナスコトナラハ差支ナカルヘシト答ヘ置キタリ

第十六條、貴訓ノ通り原案ヲ維持シテ露國案ヲ第一項トシテ挿入ベ

第十七條、貴訓ノ通り批准交換後二ヶ月ト改ムルノ外原案ノ備議定書未タ其儘

外交文書ニ闕シ露国全權ノ意見ヲ質シタルニ同全權ハ未タ確タル意見ヲ發表スルノ時機ニ至ラサレトモ松花江航行権ノコトハ通商條約ノ談判ニ屬スヘキ性質ノモノニアラスシテ同全權ノ権限外ノコトナリ又此事ニ闕シテハ内部ニ反対論者多クシテ容易ニ經ルノ見込ナキヲ以テ強ヒテ條約談判ト共ニ此事ヲ商議セントセハ談判非常ニ長引クヘシ依テ此事ハ條約トハ區別シテ交渉セラレンコトヲ希望ストテ極メテ内密ニ協議ヲ求メタリ（内部ノ異論ト云フハ松花江航行権ハ「ボーツマス」ニ於テ談判ニ上リタルコトナク露国ノ滿洲占領中得タル特權ニモアラス久シキ以前ヨリ公ケノ條約ニ依リ得タル権利ナルヲ以テ講和條約第三條ノ範囲外ナリト云フニ在リ）本官ハ之ニ対シ熟考ヲ要スヘキ旨答へ置タレドモ本問題ハ可成此際結了シ置ク方得策ナリト信スルニ付尙外務大臣ト直接談判ヲ試ムヘキ積ナリ然レトモ成功セサルヤモ難計ニ付其時ハ如何可取計ヤヲ考へ置キ相成タシ浦鹽斯徳其他ニ領事館設置ノ件ハ浦鹽丈ヶハ承諾スヘキ意向ナルモ「ニコラエフスク」ト「ベトロバウフスク」ハ

第一八八号

十一月十九日通商條約談判ノ会見ヲナシ第一回ノ第一読会ニ於テ纏マラサリシ諸点ヲ略ホ往電第一八六号ノ趣意ニ基キ確定シタリ唯第四條第一項、二項ニ闕シ露国全權ハ専問委員ト協議ノ上多少意見ヲ麥更シタルモノト見ヘ更ニ本官ノ再考ヲ求メタリ同全權ニ於テ其対案（千九百〇四年七月二十八日締結ノ露獨通商條約追加協約第一條第二ヲ以テ改正シタル通商條約第六條ノ條文ニシテ唯其内独逸トアルヲ日本ト改メタルモノ）ヲ主張スルハ唯書方ノ上ノミナラス露國ニ取り實際上重大ノ理由アルコトヲ説明セリ即チ原案ト略ホ同様ノ最惠國條款露米條約ニモアルニ依リ米國カ千九百九十九年ニ布陸ヨリ輸入ノ砂糖ニ減税ヲナシタルトキ露國政府ハ之ニ均霑センコトヲ申込ミタルニ米國ハ之ニ條

件付均霑主議ノ解釈ヲ与ヘ露國ノ請求ヲ拒絕シ數年間ノ紛議トナリ且露國政府カ其後砂糖保護ノ為メ執リタル手段ニ關シ兩國政府ノ見解益々反対シタルヲ以テ双方譲諭益々錯雜トナリ終ニ其後「ブリュクセル」ノ砂糖會議モ露國政府ノ見解ニ反スルノ意見ヲ執リタル方為メ其結果數多ノ國ニ於テ露國砂糖、輸入ニ對シテ増税ヲ附加スルニ至リタリ露國政府ハ斯ル場合ヲ豫防セシ為メ対案ノ如ク改メシコトヲ

林外務大臣時代 日露通商條約

一〇

外務商務両大臣并ニ全權ノ同意アルニモ係ハラス内部ニ強硬ノ反対論者多クシテ容易ニ繼マリ難シ又浦鹽ヲ承諾スルニ對シ敦賀又ハ附近ノ一地方ニ露國領事館ノ設立ヲ要求スル積リナリト云ヘリ右ノ外尙露國全權ハ通商條約ヲ遼東租借地ニ適用スルノ件ヲ提議シ又旧條約締結ニ伴ヒ明治二十一年六月八日付ヲ以テ西公使ヨリ「ロバノフ」大臣ニ宛テ發送シタル機密外交文書ニ依リ日本政府ニ於テ石油ノ輸入稅賦課方法ヲ麥更セザル旨保障シタルコトヲ挙ケ此際略有同様ノ文書ヲ作リ置カソコトヲ要求スル積ナリトテ其草案ヲ示シタリ（別電第一八七号）一應講究シ置クヘキ旨答置キタリ帝国政府ニ於テ若シ其様ノ文書ヲ送置クモ實際ニ不都合ナシトノ御考ナレハ右文書ノ文句ヲ可然修正シ本條約第四條第三項及議定書第二ノ規定ト交換問題トシテ提議シテハ如何本件ハ本議事ニ提出スル前ニ協議スヘキ性質至急何分ノ訓令ヲ乞フ

(二)

十一月二十一日 後六、四二 聖都着
十一月二十一日 後二、二十五 本省着
十一月二十一日 後二、二五 本野公使

林外務大臣

切望スルモノナリト主張シタルニ付本官ハ之ニ答ヘテ本條ト第十四條トヲ綜合スレハ日露間ノ最惠國條款ハ無條件主義ナルヲ以テ露米間ニ生シタル如キ紛議ヲ生スルノ恐レナシト考フルモ一應政究シ置クヘシト述ヘ置キタリ特別ノ增稅權ヲ明カニ放擲シ置クト否トハ将来我関稅政策ニ重大ノ關係アリト考ルニ付更ニ御詮議ノ上至急何分ノ御訓令アリタシ露國政府カ最モ希望スル処ハ別電第一八九号ノ趣意ヲ最惠國條款中ニ記入セントスルニ在リ（統ク）

(三)

十一月二十一日 后六、四三 聖都着
十一月二十一日 后四、二七 本省着

林外務大臣

第一八八号（続キ）

第十條、露國全權ハ第二項ニ對スル追加案ヲ撤回シタレトモ露國新關稅法（千九百〇四年）第二十一号ニ依レハ元來露國ノ港ニ入り来タル船舶ニシテ積荷ノ一部分ノミテ陸揚ケシタル場合ニハ其殘レル荷物ニ對シテハ關稅ヲ徵收セサルモ其碇泊中不法輸入ノ行ハル、コトヲ取締ランカ為メ該船舶ヲ監督スル必要アリ依テ其手數料トシテ監督稅 duty

林外務大臣時代 日露通商條約 一一

六二

of supervision ナルモノヲ徵収スルノ規定アルニ依リ此事
ハ會議録ニ於テ留保シ置キタシト述ヘタルニ付本官ハ別ニ
差支ナシト答ヘ置キタリ

第十五條、第四項ニ閔シ露国全權ハ日本ニハ露國ノ如キ検
閱制度ナキモ行政处分ニ依リ外國出版物ノ輸入販布ヲ禁ス
ルコトアルヘキヲ以テ本項ヲ兩國對當ト致シタシ独逸ニ対
シ一方的讓歩ヲ為シタルハ露國ノ誤リニシテ其理由ハ明カ
ナラサルモ露獨間ニハ領事職務條約アルコト其理由ノ一ナ
ラント云ヘリ本官ハ御訓令ノ趣意其他ノ理由ニ依リ之ヲ駁
シ独逸ト同様ノ規定ヲ設ケンコトヲ飽迄主張シタレトモ同
意セス要スルニ先方ハ一方的讓歩ノ感アル規定ヲ設クルヲ
避ケントスル体面上ノ考ヘヨリ我要求ヲ拒ムモノナレハ原
案ノ儘ニテ單ニ修正案ノ文字ヲ記入スルハ不都合ナレトモ
若シ全体ノ文章ヲ双互ニ改ムレハ強テ之ヲ拒絕スルノ理由
ナカルヘシト思考ス露國委員ハ旧第十條第三項ハ復活ヲ熱
心ニ主張シ更ニ日本政府ノ再考ヲ求メ度旨申出テタルニ依
リ本官ハ一應請訓スルコトハ敢テ辞セサレトモ到底日本政
府ノ同意ヲ得ルノ見込ナシト答ヘ置キタリ

此外懸案ノ問題ハ凡テ兩全權非正式會見ニ於テ一應協議ス

ルヲ得策ト信スルニ付往電第一八六号ニ就テハ可成至急御
電訓ヲ乞フ

明治三十九年十一月二十日 本野駐露公使宛(電報)
最惠國條款ニ閔シ露國文案通報ノ件

Words 43.

Petersburg, 20/11, '06, 6:44 a.m.
Received 21/,, 10: a.m.

Hayashi,
Tokyo.

No. 189.

In no case and under no motive they shall be sub-
jected to duties, taxes, imposts, or contributions.....
higher.....(?).....or other nor shall be laid
on them any surtaxes or prohibitions, which shall
not affect similar products of any other country.

Motono.

一一 明治三十九年十一月二十日 本野駐露公使(電報)

最惠國條款ノ字句ニ閔シ照会ノ件

十一月二十日後五時三十分発
林 大 臣
本 野 公 使

第一九二号

貴電第一七九号露案第一末段 for the northern and east-
ern coasts of Asiatic Russia トアルモ右ハ何人ガ何事

リ閔シラ受クヘキ favours ナルヤ不明ナルニ付取調べ電
報アリタシ
十月十八日往電第一〇五号露国赤十字社旅券補足税廢止ノ
件ハ誤解ニ出テタル旨川上事務官ヨリ電報アリタリ

一四 明治三十九年十一月二十六日 本野駐露公使(電報)
條約適用区域ニ閔シ請訓ノ件

最惠國條款ノ字句ニ閔シ回答ノ件
十一月二十三日 后一、五五 露都發
十一月二十四日 前一、三〇 本省着

林外務大臣時代 日露通商條約 一一 一三 一四

六三

第一九五号

往電第一八六号ノ末ニ述ヘタル條約ヲ租借地ニ適用スル件
ニ關シ今回露國全權ハ往電第一九六号ノ如キ宣言書案ヲ提出
シ來レリ尙先方ト打合セノ都合アル付前記往電リ閱ス
ル訓令ハ何日頃御發送ノ御見込ナリヤ電報アリタシ

Motono.

一五 明治三十九年十一月二十六日 本野駐露公使 本野駐露公使宛 (電報)
條約適用区域ニ關スル宣言書案通報ノ件

Petersburg, Nov. 26, 1906, 0:50 p.m.
Received, Nov. 27, 1906, 2:35 p.m.

Hayash,

Tokio.

No. 196.

"The Imperial Russian Government, having, by virtue of Article V of the Treaty of Portsmouth, ceded to the Imperial Japanese Government, with the consent of China, the lease of the Liao-tung peninsula, the undersigned declare in the name of their respective Governments that the stipulations of the Treaty of Commerce and Navigation, concluded on (date between

諸セラレテ差支ナシ

第四條第一項第二項ニ關シ露國委員カ非正式會見ニ於テ一旦我原案ノ文言ヲ主義上承諾シタレトモ正式會見ニ於テハ該二項ヲ廢シ其代リニ千九百四年七月二十八日締結ノ露獨通商條約追加協約第一條第一ヲ以テ改正シタル通商條約第六条ノ文言ヲ其儘採用セムトスルノ理由ハ本大臣ノ善ク了解スル所ナレトモ該二項ハ日露旧條約ニアリタルモノヲ其儘復活セシメタルモノニ過キス且ツ同一ノ條項ヲ包含スル現行諸條約モ遠カラスシテ一併ニ消滅スベキニ因リ帝国政府ハ其際各國ニ對シ執ルベキ一般關稅政策ニ關シ目下慎重ニ調査中ナルカ故ニ今日露國ニ對シテノミ新方針ヲ執ルコトハ何分決行シ兼ヌル所ナルカ故ニ貴官ハ善ク此旨ヲ体シ我原案ヲ飽迄維持セラルヘシ

第四条第三項及議定書第二條ハ貴見ノ通り露西亞國トアルヲ何レモ沿黒龍省(ブリアムールスキイ、クライ)ト改メテ之ヲ成立セシムルコトニ充分尽力アリタン且第四條第三項ハ之ヲ議定書第二條第二項トナスモ妨ナシ又本條約施行中本邦石油輸入稅賦課方法ヲ变更セサル旨ヲ貴官ニ於テ内密ニ宣言セラルルノ件ニ關シテハ一両日中ニ回訓スベシ第十條ニ關シ監督稅ナルモノヲ徵收シテ差支ナキ旨ヲ會議

Russia and Japan, are extended to that territory and shall be applied there during the term of the Treaty of this day so long as the said lease remain in force. This declaration shall from an integral part of the present Treaty".

一六 明治三十九年十一月二十六日 本野駐露公使 本野駐露公使宛 (電報)
露國政府修正案ニ對シ回訓ノ件

十一月二十九日後七時発

在露 本野公使

林大臣

第137号

貴電第一七八号第一七九号第一八一號第一八八及第一九五号ニ關シ

我原案第一條第八項ハ貴見ノ如ク改メテ差支ナシ

第一条第四項ノ(profession)次ニ (property) ナル文字ヲ挿入スルコトベ第一條第五項中最惠國待遇ノ保証アル以 上ハ不必要ノコトナレトモ露國委員強ク之ヲ主張セハ承

錄ニ書留メ置タコトハ差支ナシ但シ最惠國待遇ノ保證ヲ明文ニテ取り置カルヘシ

旧條約第十條第三項ニ規定シタル事項ハ新條約案第十四條ノ最惠國條款ニ依リテ十分保證セラレアルコト故此ノ如キ

旧時代ノ遺臭アル條項ハ飽迄排除セラレタシ

第十五条第四項ニ關シ露國委員ハ非正式會見ニ於テ一旦原案ヲ承諾シ唯タ本條約施行中本邦ニ於テ文書檢閱ノ制ヲ設ケサル旨ヲ明言スルコトヲ貴官ニ求メクリシノミナルニ拘ハラス正式會見ニ於テハ体面上ノ考ヘヨリ其意思ヲ翻ヘシ該項ノ文言ヲ相互的ニ為サムコトヲ飽迄主張シタル由ナレトモ此事ニ關シ帝国政府ニ於テ露國カ一昨年獨國ニ与ヘタルモノト同様ナルモノヲ露國ヨリ得ムトスルハ決シテ不当ナル管ナキニ付貴官ハ此際獨國ノ為シタルト同様ノ明言ヲ為スモ差支ナキニ由リ尙一層尽力シテ我原案ヲ成立セシメラレムコトヲ望ム然レトモ萬已ムヲ得サル場合ニハ該項ノ文言中 (shall) ム (enjoy) トノ間ニ (on the condition of reciprocity) ナル文字ヲ挿入シ以テ本邦ニ於ケル露國官吏ノ権利ヲ確保セラルモ差支ナシ

議定書案第一條第一項ニ關シ「國家ノ收入トナル」トノ文句ヲ挿入スルモ差支ナシ但シ最惠國待遇ノ保證ヲ明文ニテ

取り置カルヘシ又同條第二項ニ闕シテハ川上事務官ヨリ貴官ニ具報シタル如ク諸種ノ印紙料及手數料等ヲ残ラス包括スルノ趣意ナルニ付其ノ御令ヲ以テ交渉アリタシ露國委員ニ於テ我領事館ヲ浦塙ニ設置スルコトヲ承諾シ乍ラ之ヲ「ニコラエフスク」及「ペトロバブロウスク」ニ設置スルコトヲ承諾セサルハ甚タ了解ニ苦シム所ナリ前記二個所ニ我カ領事館ヲ設置スルハ帝國臣民ノ漁業ヲ保護セムカ為ニハ必要缺クヘカラサルモノタルニ付貴官ハ極力原案ヲ維持セラルベシ又露國領事ヲ敦賀ニ駐在セシムルコトハ承諾スルモ差支ナシ

松花江航行権ニ關シテハ本大臣別ニ考フル所アルニ付貴官ノ尽力ニ拘ハラス露國全權委員ニ於テ公然之ヲ拒絶シタル場合ニ於テハ貴官ハ之ニ對シ何等ノ措置ヲ執ルコトナク其儘ニ捨置キ以テ専ラ本條約ノ成立ニ尽力アリタシ

新日露通商條約ヲ遼東租借地ニ適用スルノ件ニ關シ同地ニハ帝國憲法モ各國トノ條約モ行ハレス且ツ其ノ情形モ定マラサルノ今日該條約ヲ同地ニ適用スルコトハ帝國政府ノ同意スル能ハサル所ナリ

旧條約附屬別約ハ露國ノ希望ヲ容レ大体之ヲ復活セシムルモ差支ナシ但シ其文言ハ別電第一三八号ノ如ク修正スルヲ

対シ先例ト為スヘカラサルハ固ヨリ論ヲ俟タサル所ナルニ由リ貴官ハ我修正案ノ成立ニ十分尽力アリタシ

一七 明治三九年十一月三十日 本野駐露公使宛（電報）

輸入石油ノ課税標準ニ關シ回訓一件

十一月三十日後五、三〇發

林 大 臣

在露 本野 公使

第一三九號

往電第一三七号ニ闕シ

條約案第四條第三項及議定書案第二條（其内露西亞國トア

ルヲ沿黒龍省ト改メ）ヲ成立セシムル為メ必要ナル場合ニ

ハ本條約施行中本邦石油輸入税賦課方法ヲ変更セサル旨ヲ

貴官ニ於テ内密ニ宣言セラルモ差支ナシ但シ明治二十八

年條約改正ノ際ニハ露國政府ヨリ西公使ノ該件ニ關スル内

密ノ宣言ヲ洩シタルモノト見ヘ米国石油業者ノ苦情ヲ惹起シタル結果遂ニ同國政府ヨリ航議ヲ本邦政府ニ提出シ來リ

渺カラス迷惑シタルコトアルニ付今回貴官ノ宣言ハ決シテ

要ス別電ニ於テ附屬別約ノ前文ニ修正ヲ加ヘタルハ該別約ノ例外的性質ヲ一層明白ニシタルモノナリ又 on the part of Japan ナル一項ヲ設ケタルハ旧條約附屬別約ニモ同様ノ一項アリタルト露國側ノ利益ニ屬スル数多ノ規定ニ對シ我ヨリ之ニ匹敵スヘキ規定ヲ設ケサレハ雙方間ノ權衡ヲ得サルトニ因ル次ニ該項第一ニ日韓兩國ノ特殊關係ヲ掲タルハルハ兩國ノ關係ハ全ク例外的ノ性質ヲ有シ本條約ノ原則ヲ以テ之ヲ類推スヘキモノニ非サル旨ヲ明示シタルモノニシテ同第二ニ日本國ト東亞諸隣國トノ通商關係ヲ掲ケタルハ露案第四ニ對當スルモノナリ同第三ニ露案第七ニ對当シ但條約附屬別約ニアリタルモノヲ復活セシメタルモノニ過キス又露案第二ノ終リニ於テ “end eastern” の二字ヲ削リタルハ西比利亜ノ東海岸ニハ總テ本條約ヲ適用セムトスルノ趣意ナリ

右雙方ノ特殊事項ヲ比較スレハ其実價殆ント互ニ相匹敵シ我力求ノ穩當ナルヲ知ルヘシ露國委員ハ九十四年ノ露獨條約等ヲ援用シ日本側ノ特殊事項ノ記載ヲ拒絶スルヤモ計リ難ケレトモ露獨條約ニ於テモ其第十一條第二ニ獨國側ノ特殊事項ノ記較アルノミナラス東亞ニ利害關係少キ歐米諸國國カ露ト結ヒタル諸約定ヲ以テ東西ニ國ヲ建ツル本邦ニ

之ヲ他ニ洩サハル旨ヲ固ク露國政府ニ約束セシムルヲ要ス

尙ホ右宣言ノ文句ハ露案ヲ然ルヘク修正ノ上請訓アリタシ

一八 明治三九年十二月八日 西駐露臨時代理公使（電報）

日露條約談判ニ關スル新聞論調報告ノ件

十二月八日後三、四五 本省着

西臨時代理公使

第七八號

通商條約交渉ニ關シ露都通信トテ当地新聞ニ左ノ記事ヲ掲

ク
日本ハ漁業權、通過貿易、鐵道及黑龍江航行等ニ關シ過分ノ要求ヲ為シ為メニ商議困難中止セラルコトナシトセス尤政府内ニ於テハ今後尙一層ノコンプリケーションハ避ケ得ヘキ望ヲ有セリ右ハ特ニ露国外務省ヨリ公クニセシモノト聞込ミタルニ付御参考迄

一九 明治三十九年三月三日 西駐露臨時代理公使ヨリ

通商條約ニ関スル露國側意向情報ノ件 林外務大臣宛(電報)

十二月十四日 后四、四〇 維也納發 前七、本省着

西臨時代理公使

外務大臣

第八三号

当国外務省側ヨリ内密ニ聞込ミタル處ニ依レハ露國政府ハ
英國政府ヲシテ日本政府ノ主張ヲ和ラカシメントセシモ英
國政府ハ之ニ応セサリシヨリ露國政府ハ稍感情ヲ害シ延ヒ
テ英露協通問題マテ中止セントスルノ情態ニ在リト

一一〇 明治三十九年三月十四日 林外務大臣ヨリ 小村駐英大使宛(電報)
日露條約交渉ノ模様在外各大公使ニ通知方
訓令ノ件

十二月十四日後二時五十分發

林

在英 小村大使

右本大臣ノ訓令トシテ在米仏独澳伊各大使公使ニ転電セラ
レタン

一一一 明治三十九年三月十六日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)
非正式会議ノ結果報告並ニ請訓ノ件

十二月十六日 前一、〇〇 東京着

本野公使

第三〇七号

林外務大臣

通商條約ニ關シ露國全權ト數回内相談ノ結果左ノ通り、第
四條一二項ハ本官ヨリ我條約ノ最惠國條款ハ無條件主義ナ
リトノ宣言ニ對シ満足ヲ表シ原案ヲ維持スルコトニ決定セ
リ、同條約第三項ハ双方論爭シタルニ拘ラス双方ノ讓与甚
タ權衡ヲ得ストノ理由ヲ以テ絶対的ニ反対シ到底承諾セシ
ムルノ見込ナシ就テハ本項ハ放棄スルノ外ナシト信ス御訓
令ヲ待ツ、第十條ハ御訓令通り決定セリ第十五條第四項ハ
御訓令通り決定但シ Censor ノ形容詞ナル Russian ノ文

第一四六号

近頃露國新聞又ハ露國通信ハ日本ガ日露通商條約及漁業條
約ニ關スル交渉ニ於テ露國ニ対シ過大ナル要求ヲ提出シツ
ツアル趣ヲ伝ヘ甚タシキニ至リテハ日本ガ黑龍江ノ自由航
行又ハ日本商品ノ「バルチツク」海マテノ無税通關等ヲ請
求セル旨ヲ記載セルモノアル趣ナリ然ルニ右ハ全然無根ノ
虛説ニ屬シ帝國政府ハ曾ニ前記ノ如キ要求ヲ提出シタル事
ナキノミナラス通商條約ニ於テハ均等相互ノ主義ヲ採リ漁
業條約ニ於テハボーツマス條約ノ規定ニ遵拠シ其提案ハ何
レモ溫和妥當ニシテ何等異常ノ要求ヲ包含セサル次第ナリ
加フルニ帝國政府ハ此際露國トノ親交ヲ復旧増進セムコト
ヲ熱望シ其全權委員ヲシテ常ニ和協ノ精神ヲ以テ交渉ノ任
ニ膺ラシメ兩國間ノ商議ハ円滑ニ進行シツアリ目下尙商
議ノ結了ヲ見ルニ至ラサル數問題ノ如キモ兩國政府ニ於テ
虛心坦懐其意見ヲ交換スルトキハ其解決ノ決シテ困難ナラ
サルコトハ帝國政府ノ確信スル所ナリ就テハ右ノ趣御含ノ
上貴官ニ於テ必要ト認メラルニ於テハ適當ノ方法ヲ以テ
間接ニ前記ノ次第ヲ發表シ露國報導ノ誤謬ヲ訂正セラレ併
セテ任國輿論ヲシテ我要求ノ過當ナラサルヲ認メシムル様
御取計相成リタシ

ニ付テハ至急何等ノ御訓令ヲ乞フ、露案第二ノ Eastern
ノ字ハ文之ヲ削除スルコトニ直チニ同意セリ

~~~~~

111 明治三十九年三月三十日 西駐墺臨時代理公使ヨリ  
林外務大臣宛

日露條約交渉ニ閑スル種々ノ風説打消ノ件

機密第二二号

明治四十年一月卅一日接受

本月初旬当地フライプレス、ツアイト、ボリチセベ、コレ  
スボンダンツ、等ノ諸新聞ニ或ハ聖都通信又ハ發電トシテ  
目下同地ニ於テ談判中ニ係ル日露通商及漁業條約ニ閑シ帝  
国政府ハ種々過分ノ要求ヲ為セシユヘ露国政府ハ已ヲ得ス  
此ヲ拒絶セシニモ拘ラス再應帝国政府委員ヨリ強テ此要求  
ヲ提出セシモ右ハ全然露國ノ名譽ト相容ザルガユヘ外相ハ  
再ヒ此ヲ峻拒シタリ又在聖都外交社会ニ於テモ事態不容易  
者ト觀察シ英米両國ノ調停ヲ以テ時局之解決ヲ計ラント希  
望シ甚シキニ至テハ將ニ両國ノ關係ヲモ絶ント帝国使臣ハ  
露都ヲ引上げントスルノ狀態ニ在リ云々

以上ノ通信ハ悉ク露國官憲側ヨリ間接ニ發表セシ者ト看做

明治三十九年十一月二十一日

在墺臨時代理公使 西源四郎（印）

外務大臣子爵 林 豊 殿

111 明治三十九年三月三十一日 本野駐露公使宛（電報）  
林外務大臣ヨリ  
非正式會議ノ結果ニ閑シ回訓ノ件

別電條約適用ノ範囲ニ閑スル修正案訓示ノ件

十二月二十五日後五時三十分發

林 大 臣

在露 本野 公使

第一五三号

貴電第三〇七号ニ閑シ

第四條第三項ハ所詮放棄スルノ外ナシトノ御見込ニ付キ帝  
国政府ハ其代リトシテ別電第一五四号所載ノ條項ヲ提出シ  
貴官ノ尽力ニ依リ其ノ成立ヲ望ム該案ノ形式ニ於テモ實質  
ニ於テモ全然相互對等的ナルカ故ニ露國ノ承諾ヲ得ルコト  
左程困難ナラサルベシ

第十五條第四項中 Russian ナル文字ヲ削除スルハ差支ナ

シ一時當地新聞社界之注意ヲ引キシユヘ不取敢其要領ハ電  
信七八、七九及八二号ヲ以テ報告ニ及置候次第ニ有之候且  
又右ニ閑シ當国外務省側ヨリ間接ニ聞込ミタル處ニ拠ルモ  
右之報道ハ多少根拠アル者ノ如ク見做居ルニ付其要領ハ往  
電第八一及八三号ヲ以テ是亦及報告置候

本月十五日在英小村大使經由貴電一四六号ヲ以テ右報道ニ  
對スル誤謬訂正方訓示相成候ニ付本月十七日ボリチセエ、  
コレスボンダンツヲシテ間接ニ電訓之要旨ヲ發表セシメ置  
候處当地有力之新聞ハ悉ク此ヲ転載シ依テ當地新聞社界ニ  
於テハ始メテ本件ニ閑スル帝國政府側之所見明瞭トナリ隨  
テ露都報道ハ總テ事實ノ真像ヲ不得事ヲ了知セント見ヘ其  
後ニ至テハ僅カニ一回「フライプレス」ニ聖都發電トシテ  
英國ハ日露間之爭議調停ノ任ヲ承諾シ又 Russe 新聞ハ陸  
海軍大藏外務ノ各大臣ハ目下日露間之爭議ニ閑シ會議ヲ開  
キ當日新聞ハ独逸ハ日本ヲ使嗾シテ露國ニ反対セシムル坏  
ト云フ虛報ヲ転載セシニ過ギス  
露國軍人派及官中硬派ハ昨今益々勢力ヲ逞シ首相及外相ニ  
對シ盛ニイントリグ、ヲ行ヒ居ル趣ニ付過般來同地ヨリノ  
報道ハ或ハ彼等之画策ニ出シ者カト推測可為候別紙新聞転  
載ノ正誤記事御送附義此段申進候敷具

シ但シ（on the condition of reciprocity）ナル文字ヲ押  
入シタルヤ否ヤ電報アリタシ  
議定書第一第二項ハ放棄シテ差支ナシ

我附屬約別案中第一号日韓兩國ノ特殊關係ヲ露國ニ於テ承  
諾スルモ決シテ列國ヨリ劣等ナル地位ニ立ツノ虞ナシ該別  
約前文ニ明記シアル如ク右ハ單ニ日韓兩國間ノ關係ノミニ  
適用セラル、場合ヲ指スモノニシテ第三國カ本邦若クハ韓  
國ニ対シ有シ若クハ有スヘキ権利ハ露國モ亦一切之ヲ享  
有スルヲ得ルノ理ナレバ要スルニ右ハ日露講和條約第一條  
第三項ト實質上全ク同一ナルモノナリ又同案第二号中東亞  
諸隣國トアルハマラツカ海峡以東ノ諸國ヲ指スモノナリ而  
シテ日本ト此等諸國ノ關係ニ於テモ露國ハ決シテ諸列國ヨ  
リ省等ノ地位ニ立ツノ虞ナキハ第一号ノ場合ト全ク同一ナ  
リ依テ貴官ハ善ク此趣意ヲ説明シテ同案ヲ成立セシメラレ  
ンコトヲ望ム  
(別 電)

條約適用ノ範囲ニ閑スル修正案訓示ノ件

十二月二十五日午後五時四十分發

No. 154

leased territory of Liaotung, shall, in all that relates to customs duties and facilities, be assimilated by the Governments of Russia and Japan respectively, to the commerce and trade between Russia and Manchuria on the one hand, and between Manchuria and the leased territory of Liaotung on the other.

~~~~~

一一四 明治三十九年十二月三十六日 本野駐露公使（ヨリ）
林外務大臣宛（電報） 正式會議ノ結果報告ノ件（一）

十一月一十六日 後四、五五 露都發
十一月一十七日 前九、二五 本省着

本野公使

林外務大臣

第一一五号

十一月二十五日正式會見ヲ開キ條約各條中未決ノ諸点ニ付
第四條第二項丈ヶハ尙懸案トナシ置キ其他凡テ非公式會見
ニ於テ認メタル通り確如セリ十五條四項ハ露西亞ナル形容
詞ヲ削リ（相互ノ條件ニ於テ）ナル文字ヲ挿入シタリ右御
承認アリタシ議定書以下ハ未タ討議セス、附屬別約案、日

一一五 明治三十九年十二月三十六日 本野駐露公使（ヨリ）
林外務大臣宛（電報） 別條約ニ關シ回答ノ件

十一月二十八日後三時二十五分發

本野公使

第一一五号

別約案韓國及東亞隣國トノ關係ニ關スル條項ハ露國ノ要求
事項ニ對シ相互對等ノ体面ヲ維持スルノ趣意ニ外ナラスシ
テ現実ノ利益問題アルニ非ス而シテ第三國ニ与フルコトア
ルヘキ利益ハ露國ニモ与フルノ精神ナルコトハ貴官ニ於テ
声明セラレテ可ナリ

往電第一三九号ニ關シ石油輸入稅賦課方法不變更ノ旨既ニ
露國政府へ明言セラレタルヤ
又往電第一四一號ノ地図ハ何日何便ニテ発送セラレタルヤ

電報アリタシ

韓兩國間及日本ト東亞諸隣國トノ特種關係ニ付露國全權力
憂フル處ハ日本ト他ノ歐米諸國トノ間ニ於ケル現行條約ニ
同様ノ議定ナクシテ獨リ日露條約ニノミ此除外規定ヲ設ク
ルトキハ日本カ韓國及東亞規隣國ニ対シ与フルコトアルヘ
キ利益ニ歐米諸國ハ現行條約ノ規定ニ依リ直チニ均霑スル
コトヲ得ルモ露國ハ此除外規定ノ結果独リ均霑スルコト能
ハサルコトナリ則チ他國ヨリモ劣等ノ地位ニ置ルヘシトノ
点ニアリ右ハ理由アル疑念ニシテ貴電第一五三号後段ノ御
説明ニテハ此疑念ヲ解クニ十分ナラスト考フ就テハ歐米諸
國ト現行條約ノ存在スル間日本ハ韓國等ニ対シ特別ノ利益
ヲ台ヘナカラ他國ヲシテ均霑セシメサルヲ得ル方法アリヤ
又斯ル場合ニ他國ヲシテ均霑セシムル次第ナラハ露國ヲモ
同シク均霑セシムルノ御趣意ナルヤ此点ニシテ明白トナル
ニ非サレハ本案ヲ承諾セシムルコト到底不可能ナラン又若
シ此特別ノ利益ニハ他國ト同シク露國モ均霑セシムル御趣
意ナラハ實際上何等ノ効果ナクシテ体裁上独リ露國ノミ制
限ヲ蒙ムルコト、ナルヲ以テ又故障ヲ唱フルコトナルヘシ
此点ニ關シ御趣意ノアル処至急御電訓ヲ乞フ
本官ハ廿九日當地出發ス

一一六 明治三十九年十二月三十六日 本野駐露公使（ヨリ）
林外務大臣宛（電報） 石油輸入稅ニ關シ商議ノ件

十一月二十九日 後七、五五 露都發

本野公使

林外務大臣

第一一五号

貴電第一五七号ニ關シ石油輸入稅率ノコトハ議定書第二條
陸車輸入品稅率ノ件ト交換的ニ商議シツ、アリ又貴電第一
四一号ノ地図ハ其府先方ノ除外センコトヲ提議スル入江ノ
數非常ニ夥シク且隨分不当ノモノアルコトヲ公然トナク知
リ得タルヲ以テ先方ヨリ公然ノ提議トシテ申出ツル前帝國
政府及本官ヲ臺モ拘束セサル範圍内ニ於テ右ノ數ヲ減少セ
シムルノ手段ヲ執リ來リ尙尽力中ナルニ付愈々先方ノ提議
トシテ受附ケ閣下ニ送附スルハ來月十日頃トナルベキ見込
ナリ

117 明治三十九年十一月三十日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)
石油稅商議經過公表ノ関シ露國政府申出ノ件

別 電 右公表文案電報ノ件

十一月三十日 前一、三三、四〇 本省着

本野公使

林外務大臣

第1110号

Hayashi,
Tokio.

No. 221.

通商漁業兩條約談判ニ關シ近頃内外ノ新聞種々ノ報道ヲ伝
ヘ間々不穏ナル風説ヲ流布スルモノアリテ露国内リテ政府
ヲ攻撃スルモノ鮮ナカラサルヲ以テ右両件ニ關スル大体ノ
位置ヲ明カニシ人心ノ疑惑ヲ解キタシテ露國全權ヨリ右
二件ニ關スル新聞掲載案ヲ作リ本官ノ同意ヲ求メタルニミ
リ本官ハ其詳細ニ過クル点及故意ニ自家ヲノミ弁護セバト
スルノ口吻アル点ヲ指摘シテ修正刪除ヲ求メタルカ結局先
方ハ概要摺電第二一一号ノ如ク發表シタント申出テ本官ハ
尙詳細ニ過クル旨々注意シタルキ之ニ丈ケハ公ケリシタキ
並強ヒテ言張レルヲ以テ本官ハ調判ノ前途ニ対シ義支ナシ
ト考ヘテ同意ヲ与ヘ置キタリ尙露國全權ハ新聞紙ノ報スル
處ニ依レハ日本政府ハ本件ニ關シ直蒙ニ都合好キ説明ヲ公

ケリシタルモノハ如シテ語レリ右へ事実ナシハ如何ナル事
ハ公ケリヤハシタルヤ本官心得ノ為メ巴里宛電報アリタ
シ

(別 電)

石油稅商議經過公表文案電報ノ件

Petersburg, Dec. 30 1906 2-30 a. m.
Recd., Dec. 30 1906 9-10 a. m.

Exaggerated rumours were lately current upon the
two negotiations. It was argued that negotiations
we suspended and good offices of third Power or
arbitration were inevitable or that discrepancy was
due to demands of Japan who, it is reported, has
claimed right of navigation on Amur, free transit
from Vladivostock to Baltic Sea, right of acquiring
immovable in Siberia and equal fishery rights for
subjects of both parties in Russian waters in Far
East. In fact the question stands as follows:—
Russia and Japan agreed to take old treaty of
commerce and navigation as the basis or new treaty

and therefore Russia proposed no new demand but
Japan holds to introduce concessions lately accorded
by Russia to foreign Powers and also presented some
new demands arising from circumstances recently
created in Far East. Russia finds no obstacle to
accord, on the condition of reciprocity, to Japan favors
which generally are accorded to other Powers. Actua-
lly the two parties came to accord to revive reciprocal
concessions stated in old treaty, mutually assuring
application of most favored nation clause. New
demands of Japan involve right of navigation of
Sungari, creation of Japanese Consulates in Amur
province, facilities of passport in Siberia and special
regime of customs tariff on Manchurian frontier.
Conference has not yet touched all these questions
which relate to Russia's commercial interests and
political situation in Far East. Their solution will be
subjected to just interpretation of Treaty and Protocol
of Portsmouth. As to fishery question, Russian Go-
vernment, being alive to capital importance of the
question for economic development of littoral and
future Russian colonization, could not accept Japan's
original proposal which, they believe, implied much

more extensive rights than those intended by Treaty
of Peace and Protocols. Principal difficulties rested
upon definition of words "anse" and "river", equality
of rights between Russian and Japanese fishermen
and nature of object of fishing. Special mixed
commission was composed to determine exact sense of
words "anse" and "inlets". Accord is not yet reached
on several questions above mentioned but negotiation
follows course which may be qualified as entirely
normal.

Motono.

118 明治三十九年十一月三十日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)
條約交渉ノ総括發表ニ關スル件

十一月三十日後五時十分終

在仮 豊野大使(中継)

第七〇中

本野公使

通商漁業兩條約談判ニ關シ露國新聞ヨリ種々ノ誤報伝ハリ

タルニ付世上ノ疑惑ヲ解カムカ為メ當方ニ於テ右談判経過ノ極メテ大要ヲ間接ノ方法ヲ以テ發表シタル事アリシモ特ニ日本ニ都合好キ説明ヲ公ニシタル事ナシ

(附屬書)
「ル・タン」社説日露談判

二九 明治四十年一月七日 駐仮栗野大使ヨリ

日露間ノ談判ニ關スル「ル・タン」社説報告ノ件

附屬書 「ル・タン」社説

公第六号 二月二十三日接受

過般來露都ニ於テ日露兩國全權委員間ニ商議中ノ日露通商航海條約及ヒ漁業條約縮結談判ニ關シ新聞紙上種々ノ臆説ヲ流布スルモノアリシカ去月廿八日發行ノ「ル・タン」紙上ニ於ケル日露談判ト題スル一篇ノ論説ハ其論旨比較的ニ穩當公平ナリト認メラレ候ニ付為御参考其原文並ニ要領翻訳御送付ニ及候條御查閱相成度此段申進候敬具

明治四十年一月七日

特命全權大使 栗野 執一郎 (印)

外務大臣子爵 林 董 殿

通過スヘキ吉林鐵道ノ接合点トナルヘシ如此第六條ヨリ生シタル解釈ノ相違ハ樺太ニ於ケル日露國境限定ニ關スル第九條ノ解釈上更ニ一層ノ紛議ヲ生スルニ至ルヘキヲ豫見スルニ難カラサルモノアルカ如シ

又「ボーツマス」條約第十一條及第十二條ニ定ムル日露協定ノ談判上ヨリ生シタル意見ノ相違ハ前者ニ讓ラス重大ノ性質ヲ有ス其第十一條ニハ「露西垂國ハ日本海「オコツク」

海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西垂領地ノ沿岸ニ於ケル漁業權ヲ日本國臣民ニ許セムカ為日本國ト協定ヲナス

ヘキコトヲ約ストノ規定アルモ其文意精密ヲ缺ケル為不幸ニモ協定ヲ調フルコト至難ナルノ結果ヲ來セリ抑モ樺太島南部割譲ノ一事ハ既ニ該地方ニ位スル露國漁民ノ非常ナル損失ヲ負ハシメタルニ今又「オコツク」海及「ベーリング」海ヨリ生スル豊富ナル海獸ハ暫ク之ヲ別トシ戰爭前露國漁業者ノ手ニ在リタル此部日本海ヲ日本人ノ掌中ニ委スルノミニテモ露國ニ取リテハ毎年三百五十萬留ノ償金ヲ支払フニ等シ加之漁業ヨリ生スル利益ハ即チ是迄沿海州沿岸地方ニ露國殖民ヲ誘導スル主因タルモノナリシモ一朝之ニ對シ日本漁業者ノ手ヨリシテ激烈ナル競爭ヲ受クルトキハ該地方ノ殖民事業ハ為メニ頓挫シテ經濟上軍事上由々シ

キ影響ヲ及ホスヘキコト之ヲ豫見スルニ難カラス

通商條約縮結ニ關スル第十二條ハ該條約縮結ニ至ルマテノ

間兩國通商關係ノ基礎トシテ相互ニ最惠國ノ地位ニ於ケル待遇ヲ与フルノ方法ヲ採用スヘキコトヲ約シ居レルカ之ト
關聯シテ新ニ東部西比利亜全体ノ商業制度ニ關スル問題即チ浦塙斯德ヲ以テ保護港ノ昔ニ還ラシムルヤ將タ今後猶ホ引続キ自由港トナスヤノ問題ヲ惹起シタリ

之ニ關シテハ浦塙斯德住民ハ其自由港タルニ對シ敢テ苦情ヲ唱ヘサルニ拘ハラス「モスコ」商民ハ反抗ノ態度ヲ取リ遂ニ先月ヲ以テ大臣「フヒロソフオフ」氏ニ向ヒ勢心ナル建白ヲ為シ同大臣ハ追テ同港ヲ再ヒ保護港ト為スノ内意ヲ漏シタリトノ事ナルカ右ハ固ヨリ日本人ノ利益ニ反スルヲ以テ此点ニ關スル商議ハ未タ終結ヲ告クルニ至ラス

最後ニ日本人ハ「ボーツマス」條約第三條第二項ニ「露西

亞帝國政府ハ清國ノ主權ヲ害シ又ハ機會均等主義ト相容レサル何等ノ領土上利益又ハ優先的若クハ專屬的讓与ヲ満洲ニ於テ有セサルコトヲ声明ス」トアルヲ誓トシテ露國人カ「スンガリー」航行上ニ有スル特權ノ拋棄ヲ要求スル所アリ然レトモ實際「ボーツマス」議定書ニ拠レハ本條約討議ノ際問題トナリシハ満洲ニ於ケル露國居留地ニ關スル事項

ニ止マリ「スンガリー」トハ何等ノ關係ナシ加之日本人力此河ニヨリ極東ニ於ケル露國領土ノ中心ニ侵入セントスルノ熱望ヲ表スルハ偶マ露國人ヲシテ益々其既得權ヲ固持セシムルノ結果ヲ生ス実ニ露國人ハ一八五八年ノ愛璣條約ニヨリ「アムール」「スンガリー」「ウスリ」と三江ハ露清両国人ノ所有ニ係ル船舶ニ限り航行ヲ許セルモノナリトテ日本人ニ反対シ又一九〇五年十月ノ平和條約ハ其以前露國ト第三者トノ間ニ締結シタル約定ヲ破棄スルコト能ハサルニモ拘ハラス日本政府ハ「スンガリー」江上ニ於ケル自國船舶ノ自由航行權ヲ得ント主張ス

之ヲ要スルニ日露談判ヨリ生シタル意見ノ相違ハ事態固ヨリ容易ナラストスルモ之カ為メ其破裂ヲ見ルカ如シ露國人

カ最初日本人ヨリ提出シタル提案ヲ斥ケテ自國ノ対案ヲ作製シ之ニ基キテ開始シタル討議ハ既ニ四ヶ月ノ久しきキニ及

ヒタルモ結局双方一致ノ協定ヲ見ルニ至ルヘキモノト思ハル蓋シ該談判ハ未タ曾テ一度モ中止セラレタルコトナク刻下或二三ノ露國新聞論調ヨリ見レハ露國モ自國ノ対案ニ幾分ノ讓歩ヲ為スモノ、如ク認メラル兎モ角露國談判委員カ去年夏和平條約ヲ一層精密ニ作成セサリシ失策ハ之ヲ蓋フニ由ナシ又此ノ如キ重大ナル利益關係アル商議ヲ後日ニ賄

三〇 明治四十年一月八日 在浦鹽川上貿易事務官ヨリ

日露間ノ談判ニ關スル露國新聞論調報告ノ件
附屬書「ハルピン」日報記事

一月十四日接受
公第七号

近來露國新聞ハ總テ日露談判ニ關スル誇張的記事ヲ掲載シ

日本ノ要求ハ過大ナリトテ人心頗ル激動シタル傾向相見ヘ候处癸年十二月三十一日発刊哈爾賓日報附錄記載同月三十日露京發電ハ前記諸報道ヲ打消シ日露通商漁業兩條約ニ関スル談判ノ模様ヲ詳述シ其真相ヲ穿チ得タルノ感有之候間御参考迄別紙切抜及御送付候右電報ハ如何ナル故ニヤ当地新聞ニハ掲載セラレス全ク露國政府若ハ政府側ヨリ出タルモノ、如ク被考候右申進候教具

明治四十年一月八日

在浦鹽

貿易事務官 川上俊彦

(附屬書)

明治三十九年十二月三十一日発刊「ハルピン」日報
記事

(訳文)

千九百六年十二月三十一日発刊哈爾賓日報掲載

同 月三十日発彼得堡電報

近來日露通商條約並ニ漁業協約談判ニ關シ誇張的ノ風説流布一二ニシテ足ラス今其ヲ示セハ該談判ハ目下中止トナリ第三國ノ居中調停ヲ待チツアリ或ハ云フ仲裁々判ヲ煩

シタルハ政略ノ宣シキヲ得タルモノニアラス抑モ日本人ノ活動力及其企業的精神ノ旺盛ナルコト其侵略手段ノ秩序アリ且ツ巧妙ナルコトハ明白ノ事實ニシテ此点ニ付テ日本人ハ露國殖民ノ不活潑ナルニ對シ遠ク一頭地ヲ抜クモノナルヲ以テ露國タルモノ豫テヨリ日本人ノ此長所ニ充分留意シ一朝談判開始ノ曉ニハ之ニ處スル為豫メ用意スル所ナカラサルヘカラサリンニ露國カ此点ニ關シ先見ノ明ヲ缺キタルハ幾分力當時露西亞ノ内情多事多難ナリシニ帰スルヲ得ヘキモ世人ハ斯ル露國ノ不用意ハ今日猶ホ極東ニ於テ戰敗ヨリ先シタル露國勢力ノ成行ニ對シ更ニ一層惡結果ヲ加ヘントシツハアルヲ認メサルヘカラサルモノアルヲ如何ゼン

シタルハ政略ノ宣シキヲ得タルモノニアラス抑モ日本人ノ活動力及其企業的精神ノ旺盛ナルコト其侵略手段ノ秩序アリ且ツ巧妙ナルコトハ明白ノ事實ニシテ此点ニ付テ日本人ハ露國殖民ノ不活潑ナルニ對シ遠ク一頭地ヲ抜クモノナルヲ以テ露國タルモノ豫テヨリ日本人ノ此長所ニ充分留意シ一朝談判開始ノ曉ニハ之ニ處スル為豫メ用意スル所ナカラサルヘカラサリンニ露國カ此点ニ關シ先見ノ明ヲ缺キタルハ幾分力當時露西亞ノ内情多事多難ナリシニ帰スルヲ得ヘキモ世人ハ斯ル露國ノ不用意ハ今日猶ホ極東ニ於テ戰敗ヨリ先シタル露國勢力ノ成行ニ對シ更ニ一層惡結果ヲ加ヘントシツハアルヲ認メサルヘカラサルモノアルヲ如何ゼン

スニ至ルベシト抑モ日露兩國間ニ意見ノ一致ヲ見サル理由トシテ新聞紙ノ報道スル所ニ拠レハ日本ノ要求ハ愛璣條約ヲ廢シ黒龍江ニ日本國船舶ノ航権ヲ認ムルコト、浦潮斯德ヨリ波羅的海ニ至ル無稅通過ノ貿易ヲ開始スルコト悉比利ニ於ケル土地所有權ヲ許与シ並ニ極東ノ我領水ニ於テ我臣民ト均等ノ權利ヲ日本人ニ得セシムルコト是ナリト然ルニ事実ハ左ノ如シ露西亞及日本ハ「ボーツマス」講和條約(第十二條)ニ基キ新條約ノ基礎ヲ旧日露條約ニ採ランコトヲ約セリ其理由トスル所ハ千八百九十五年ノ旧條約ハ戰爭ナカランニハ尙ホ五ヶ年即チ千九百十一年マテ効力ヲ有シタルモノナリキ而シテ新通商條約ノ効力ハ日本政府ノ希望ニ依リ千九百十一年日本カ諸外國ト締結セル條約ノ期限終了ヲ以テ消滅セントスルカ故ニ露西亞ハ前記「ボーツマス」講和條約ノ第十二條ニ依リ日本ニ對シ何等ノ新要求ヲ為サス唯戰爭前ノ通商條約ニ我利益トシテ明記セル其特權ヲ留保センコトヲ主張セルノミ

翻テ日本ハ千八百九十五年ノ旧條約ニ明文ナクシテ我国カ外國ト締結セル新通商協約(千九百四年及千九百五年)ニ於テ外國人ニ許与シタル條項ヲ新條約ニ挿入セントスルノミナラス尙ホ近時極東ニ於ケル時局ノ變化機宜ニ適應セル

若干ノ新要求ヲ提出セリ「ボーツマス」ニ於テ両国ノ一致セル新條約締結ノ意見ニシテ千八百九十五年旧條約ノ如ク最惠國條款ノ主義ヲ基礎トセハ全然相互協約ノ下ニ露西亞カ他ノ國ニ許与スル一般ノ特典ヲ日本ニ与ヘルニ於テ何等支障ナカルヘキコト明白ナリ全權委員ハ該通商條約ヲ締結センカ為メ會議ニ最近三ヶ月ヲ費セリ
目下両国ハ千八百九十五年ニ相互讓与セル特典ヲ復旧シ尙ホ通商航海並ニ一般外國人ニ許与セル地方ニ於ケル不動産ノ所有及購買且ツ地方ノ法律ニ遵由シ各種ノ工業並ニ營業ニ向テ最惠國ノ權利ヲ兩國民ニ適用スルコトニ一致セリ然レトモ茲ニ尙ホ日本ノ新要求アリ此詮議カ一ノ懸案ト為シリ即チ松花江ノ航權（日本カ黒龍江ノ航權ニ関シ要求スル所アリントハ無根ナリ）我極東ニ領事館ノ新設、亞露ニ於ケル日本人ノ旅券ニ対シ簡易ノ取扱ヲ為シ手數料ヲ輕減スルコト又滿洲國境税關ヲ通過スル日露ノ商品ニ対シ税率上ノ特典ヲ設定スルコト是ナリ右問題ハ啻ニ經濟上ニ關係スルヲ以テ會議ハ全權委員間ニ豫行ノ意思交換アリタルノミ此問題ノ解決ハ一ニ「ボーツマス」講和會議ノ條約ト覺書ノ公平ナル解釈ニ依ルモノトス

三一 明治四一年一月三十六日 本野駐露公使（ヨリ

林外務大臣宛（電報）

非正式會議ノ結果報告ノ件（一）（二）

（一）

一月二十六日 前二〇、三五 露都着

本野 公使

第六号

林外務大臣

通商條約打合ノ為メ露國全權一月二十五日來訪内談ノ要領左ノ如シ

一、議定書第（三）條ニ付テ數回会談原案維持ニ尽力セシモ到底協議ノ見込立タサリシニヨリ往電第二一七号ヲ以テ具申セシ如ク石油ニ關スル秘密文書ト交換的ニ交渉シクトモ何分奏効ノ見込立クス原案ニ対スル先方ノ異議ハ露國政府ニテハ目下浦塙自由港廢止問題研究中ニテ右廢止案ヲ議会ニ提出セル運ニナリ居ルニ付此際日本ノ提議タル無税通關ノ制度ヲ維持スルコトハ之ヲ承諾スル能ハストノ理由ナリシヲ以テ本官ハ本條ノ趣意ハ海陸ヨリ露領ニ輸入ノ日本貨物ニ対シ無税ニスルコトハ其主タル目的ニアラス全ク陸路輸入税率ヲ海路輸入税率ヨリモ高キコトナカラシム

漁業問題ニ關シテハ「ボーツマス」條約第十一條ニ基キ露西亞ハ日本海、「オホック」海及白令海ニ於ケル露國領海ノ沿岸ニ漁業権ヲ日本臣民ニ許与スル協約ヲ締結スルコトヲ約セリ露西亞政府ハ該問題タル太平洋沿岸ニ於ケル經濟上ノ發展並ニ同地方ニ於ケル露國殖民ノ将来ニ關シ孰レモ重大ナリト認ムルニ依リ談判開始ノ當初日本ヨリ提起セル要求ハ「ボーツマス」講和條約並ニ同會議ニ於テ約セルヨリモ遙ニ広義ノ權利主張タリシヲ以テ之ヲ承諾スベキニアラズト思料セリ茲ニ重要且ツ困難ナル事項ハ前記覺書ニ明文アリテ日本漁業者ニ露國漁業者ト均等ノ權利ヲ許与スル為メ漁業協約ニ除外スルコト又營業ノ種類ヲ定ムルニ在リ（魚類、無脊椎、海藻、哺乳動物）「ボーツマス」會議ノ覺書ニ使用セル英仏語中「アンス」及「フラーイグ」ナル語ヲ如何ニ解釈スルカ相互ノ一致ヲ以テ之ヲ決定スル為メ日露ノ専門委員会開始セラレタリ未タ前記問題ニ關シ意見ノ一致ヲ見ル能ハサレトモ談判ノ経過ハ全ク普通ナリトス

意セサルモ差シテ不都合ナカルヘシト思ハル（続ク）

(二)

一月二十六日 前一、三〇 聖都發

本野公使

林外務大臣

第六号（続キ）

然レトモ若シ強テ本件ニ関シ幾分ナリトモ我提案ノ主意ヲ保存シ置ク必要アラハ別電第七号ノ案ニ（議会ニ於テ承認ノ條件ノ下ニ）トノ文字ヲ加エタラムニハ或ハ承諾スルヤモ測リ難シト信セラルレトモ原案又ハ本官ノ修正案ノ其儘承諾セシムルコトハ先ツ断念セサルヲ得ス右ノ次第ニ付本問題ニ關スル最後ノ御訓令ヲ乞フ

二、條約第四條第三項新案ニ付テハ公然ノ意見ヲ表示スル前ニ左ノ三点ニ付テ説明ヲ求メ来レリ

(一) 日本政府ハ本案ヲ提出スルニ当リ現在露國滿洲間ニ行ハレ居ル無稅通關ニ關スル露國關稅法第九三九條ノ規定ヲ眼中ニ置カレタルヤ本官ハ其通りナリト本官一己ノ意見トシテ述へ置キタリ

(二) 本案ノ目的ハ露領滿洲間ニ於ケル關稅制度ト遼東半

ルヘケレハ尙一應右ノ通ニテ差支ナキヤ至急確タル御訓令ヲ乞フ

第一四号

林外務大臣

本野公使

露國通商全權二月一日我提案別約第一第二ニ付打合セノタメ來訪セリ露國ハ日本ニ對シ調和の精神ヲ表スルタメ我提案ニ同意スヘシ然レトモ提案第一條ニ special relations ト

アルハ漠然トシテ其範圍明瞭ナラサルヲ以テ之ヲ明確ニ致シタシ別約ニ規定ノ事項ハ主トシテ航海通商ニ關スルコトナルヲ以テ韓國ニ關シテモ其通りニ心得可然トノ質問アリシニヨリ本官ハ之ニ對シ日韓兩國特別ノ關係ハ單ニ通商航海ノミニ止マラス其他種々ノ事項ニ付特別ノ關係アルヲ以テ本條ノ如キ文字ヲ用ユルノ必要アリト述ヘタルニ然ラハ凡如何ナル程類ノ事項ヲ意味スルモノナルヤ少クトモ其大要ヲ會議錄ニ止メ置キタキ旨申出タリ就テハ本官ノ意見ニテハ本條ノ意味ハ主トシテ斯クスクノ事項ニ關スルトノコトヲ會議錄ニ記入シ本條ヲ纏メタキニ付御異存ナクハ其宣言文御電送アリタシ又右二ヶ條ニ關シテハ帝國政府ニ於テ露國ヲ他国ト異ナリタルノ又ハ他国ヨリ劣等ノ取扱ヲ与フルノ意志ハ毫モ無之旨貴電第一五七号ノ趣意ニ基キ更ニ説明シタル處右條約ノ文面ニテハ其意義現ハレサルヲ以テ

三三 明治廿一年三月三日 本野駐露公使（ヨリ）
林外務大臣宛（電報）

非正式會議ノ結果報告ノ件

二月二日 后七、二十五 露都發

三三 本省着

林外務大臣時代 日露通商條約 三一 三三

島満洲間ニ於ケル制度ト均ニスルニアリヤ又ハ其制度ハ異ナルモ互ニ最惠國ノ取扱ヲ與フルノ精神ナリヤ

此点ニ付テハ互ニ無稅ノ制度ヲ採リ居ルコト当然タレトモ追テ確メタル上確答スヘシト申シ置キタリ

是又何分ノ御訓令ヲ乞フ

(四) 領事館問題ニ付テハ浦潮ノコトハ豫テ報告シ置キタル如ク略ホ確定ノ由ニテ之ニ對シ敷賀ヲ要求スヘキ旨ナリト云ヘリ他ノ二ヶ處ニ付テハ多分明日ノ委員会々議ニ於テ決スヘシト云ヘリ全權自身ハ贊成ノ由ニ付充分ニ尽力ヲ請ヒ置キタリ

(五) 別約第一第二條ニ付テハ尙詳細ノ説明ヲ与ヘ置キタル處全權自身丈ヶハ異議ナキ旨外務大臣マテ報告シ置キタレトモ未タ確定スルヲ得スト云ヘリ

(六) 松花江問題ニ付テ通商條約ニ直接ニ關係ナキヲ以テ本問題ノ實質ニ論及スルコトナク通商條約談判トハ分立シ度旨申出タルニ付無電第一三七号御訓令ノ趣モアルニ依リ本官限りハ別ニ異存ナシト答ヘ置タリ何レ此点ハ書翰ヲ以テ申入ルヘキ旨ニ付其節回答ヲ都合モア

是亦少クトモ會議錄ニ於テ明カニ致シ置キタキ旨申出タリ此請求モ承諾シ敢テ差支ナシト信スルニヨリ御同見ナレハ別電第一五号ノ如キ保證ヲ与フベシ至急何分ノ御電訓ヲ乞フ同全權ノ内話ニ依レハ浦鹽斯德自由港廢止ニハ軍人中大ニ反対アルカタメ沿海州及ヒ黒龍州丈ハ海陸共多分無税輸入ノ制度依然継続スヘケレトモ「ザバイカル」州ニ対シテハ普通稅則ヲ行フ事トナルヘシト云ヘリ

三四 明治四年三月十四日 本野駐露公使(ヨリ)

林外務大臣宛(電報)

露國提議ノ別約ニ閱シ請訓ノ件

二月十四日 後一〇、五四 露都發
二月十五日 前一五、五四 本省着

本野公使

第三〇号

往電第一四号及第一五号ニ閱シ

露國全權ハ二月九日付書面ヲ以テ大要左ノ通申來レリ

如ク改メタシト提議シ來レリ就テハ義ニ本官ヨリ請訓電報御照合ノ上至急何分ノ電訓ヲ乞フ

三五 明治四年三月三日 林外務大臣(ヨリ)
本野駐露公使宛(電報)

露國政府提議ニ對シ回訓ノ件

三月二日後六時四十分發

林 大 臣

在露本野公使

第三一号

貴電第六号議定書第二條ニ閱シ露國全權カ閣下ニ密カニ語

レル處ニヨレバ露政府ノ浦鹽自由港制廢止案ニシテ議會ヲ

通過セザレバ海陸共ニ現狀維持ナルヘク若シ通過セハ政府ハ陸路ヨリ輸入ノ貨物ニ對シ同一ノ稅ヲ賦課スヘキ法案ヲ提出ノ積リナリト云フ果シテ然レバ露政府ハ我提案ノ精神ト全然同一ノ意向ヲ有スルモノナレハ本條ニ同意セサル理

由ヲ見ス何トナレバ我本案ノ趣意ハ閣下ノ説明セラレタル如ク無税通關ヲ主眼トスルニ非スシテ關稅ニ付キ海陸均一ヲ目的トスルモノナレバナリ因テ閣下ハ此意味ヲ敷怨シテ

(一) 一八九五年條約ノ別約ハ通商及關稅上ノ便益ニノミ
露國ハ調和ノ精神ヲ表スル為メ日本ト韓國及「マラツカ」海峽以東ノ亞細亞諸國トノ特別關係ヲ留保スルコト
ニ同意スベシト雖トモ之ヲ承諾スルニハ左記ノ條件ヲ以テスベシ

(二) 此ノ留保ヲ約スル條文ニ於テ露國ガ他國ヨリモ異リ
タル待遇ヲ受クルコトナク又此留保條項ハ諸外國ノ同意ヲ得タル曉ニ非レバ實施セラレザルコトヲ記載シ置

タルモノナルベキ事

(三) 露國ハ石油及砂糖ニ閱シ亞細亞ノ市場ニ於ケル現在ノ競爭狀態ヲ維持スルコトニ重キヲ措クヲ以テ此兩物

品ハ日本ノ提議セル留保ノ適用以外トナスコト
又別約ノ前文ニ閱シ露國全權ハ我方ノ提出セル案ト同様ノ趣意ヲ以テ起草シタル案(往電第三一号)ヲ送リ來リ此ノ
クコト

主張ヲ続ケラレタシ條約第四條第三項ニ對スル質問第一第二トモ閣下回答ノ通第三ニ對シテハ目下清國政府ト協議中ナリ租借地ヨリ滿洲内地ニ入ル貨物ニ對シテハ清國海關稅ヲ課セラル、コトハナルベシ而シテ清國海關ハ多分式ケ月中ニ大連ニ開カル、コトハナルベシ
領事館問題ニ付キ過日露公使ノ内話ニヨレバ露政府ハ浦鹽ニコラエスクノ両所ヲ承諾シ其代リニ敦賀小樽ニ露國領事館設立ノ承諾ヲ要求スルコトニ略ホ内決セリト云フ我方ニ於テ敦賀小樽執レモ異存ナケレトモ勘察加半島ニ於ケル我出漁者ノ利益保護ノ為メペトロバプロスクニ是非共分館ヲ置キタキニ付閣下ハ充分ニ我要求ヲ主張セラレタシ

松花江問題ハ別問題トシテ後廻ト為シ差支ナシ
我提案別約第一第二ハ前電ノ如ク露國提出ノ個條ト外形上ノ對等ヲ維持スルノ精神ニ出タルニ外ナラスシテ事實上露國カ之カ為メ不利益ニ陥ルコトナシ依テ貴電第一五号ノ如キ保證ヲ与ヘラレ差支ナシ

日韓特別關係ニ付テハ

The special relations of Commerce navigation and industry between Japan and, Corea resulting from the conventions concluded in 1904 and 1905.

トノ説明ヲ會議錄ニ載スルモ可ナリ

貴電第三〇号露國ノ條件(一)及(二)ハ貴電第一五号ノ保證ト前段ノ説明トニテ充分其目的ヲ達セラルヘキニ付撤回ヲ請求スペシ又石油及砂糖ニ關スル條件モ右ノ保證ノ結果露國ハ石油ニ付テハ和蘭砂糖ニ付テハ和蘭米國ト對等ニ在ルヘキニ付重不テ條件ヲ設ケ置クノ必要ナキ訣ナリ是又撤回ヲ求ムベシ必要トアレバ此次第ハ會議錄ニ望メ置クモ異議ナシ

貴電第三一号ニ異議ナシ

貴電第三〇七号第四條第一二項ニ關スル貴官宣言ノ文句電報アレ

三七 明治四年三月十四日 本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

非正式會議ノ結果報告並請訓ノ件

三月十五日 後七、三九 露都發
本省着

本野公使

林外務大臣

第六五号

貴電第三一号ニ關シ其後數回交渉ノ結果左ノ如シ

議定書第一條ノ件ハ貴電ノ趣意ヲ反覆説明シ貫徹ヲ努メタレトモ露國全權ハ立法部ヲ束縛スルコトハ飽マテ避ケント

林外務大臣

本野公使

三六 明治四年三月十日 本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

日韓特別關係ニ關シ照会ノ件

三月十一日 後四、五 彼得堡發
本省着

本野公使

林外務大臣

本野公使

決心シ居ルヲ以テ到底我要求ニ應セス只議會ノ行動ヲ束縛セサル範圍内ニ於テナラハ此約束ヲ結フヘシトテ一ノ案ヲ提議シタルニ付本官ハ斯ノ如クナラハ石油輸入稅率ニ關スル我方ノ約束モ同様ニ為サヘルヘカラサル旨ヲ述ヘ先方モ之ヲ承諾シ結局別電第六六号ノ如キ案ヲ作リタリ此以上ニ

ハ到底讓歩セシムル見込ナキヲ以テ別電案ニテ纏ムルカ左モナクハ放棄スルノ外ナシ條約第四條第三項ニ關シテハ當方説明ノ結果露國全權ハ別電第六七号ノ如キ対案ヲ送り來レリ右ハ形式上ノ相違ノミニシテ實際上同様ナリト認ムルニ付承諾シテ可ナラント思考ス「ペトロパウロスク」ニ領事館分館ヲ設クルコトニ付先方ハ各國均霑ノ結果ヲ恐ルトノ理由ニテ目下ノ處承諾セス但場合ニ依リテハ領事館ノ名稱ヲ避ケ「漁業事務官」ノ如キ名義ノ下ニ我官吏ヲ駐劄セシムルコトハ或ハ他日約束成立スヘキカモ計リ難ケレトモ此際同地ニ領事館ヲ設クルコトハ絶對的反対ニ付断念スルノ外ナシ松花江問題ハ先方ヨリ同問題ヲ通常ノ外交手続ニ依リ交渉スルコトヲ辭セサルヘキモ通商條約談判ト共ニ交渉スルトキハ進行上不利益ナリトノ理由ニ依リ本談判ト分離シタキ旨ノ書面ヲ送リ本官ハ右ノ趣意ニテ之ヲ本談判ヨリ離スコトヲ承諾スヘキ旨回答シ置キタリ我提案別約一二

貴電第三一号ノ件露國全權ニ交渉中同全權ハ日韓特別關係説明文中(一九〇四年、一九〇五年締結シタル條約)トハ如何ナルモノナリヤ其写シヲ貰ヒ受ク度旨申シ出タリ右ハ何々ヲ指スヤ昨年二月落合赴任ノ節携帶シ來リタル小冊子ニアル日韓間ノ五個ノ條約ハ皆写ラ与ヘテ可ナリヤ又右五個ニテ尽セリヤ電訓アリタシ

第六一号

貴電第三一號ノ件露國全權ニ交渉中同全權ハ日韓特別關係説明文中(一九〇四年、一九〇五年締結シタル條約)トハ如何ナルモノナリヤ其写シヲ貰ヒ受ク度旨申シ出タリ右ハ何々ヲ指スヤ昨年二月落合赴任ノ節携帶シ來リタル小冊子ニアル日韓間ノ五個ノ條約ハ皆写ラ与ヘテ可ナリヤ又右五個ニテ尽セリヤ電訓アリタシ

ニ付テハ協商ノ方ニテ規定セラルヘキヲ以テ本條約ニ於テハ露案御採用相成リ差支ナカルヘシト信ス別約第一條第
二條ノ適用ニ關シ我ヨリ与フヘキ保證ニ付テハ之ヲ別約ノ

本文ニ入ル、コト並ニ石油及砂糖ニ關スル留保ハ談判ノ結

果之ヲ撤回スヘキコトヲ承諾セリ然レトモ其代リ右ノ保証

ヲ外交文書トシテ与フヘキ旨要求シ來レリ會議錄ニ記入シ
置クモ外交文書ニテ与フルモ其効果ニ於テハ毫モ差別ナキ

ニ付我提案通り承諾スヘキ様再三協議ニ及ヒタレトモ頑ト
シテ動カス尙又右保證ノ文句ニ付テモ多少ノ修正ヲ申込來
リタレトモ此点ニ付テハ先方ト協議済ノ上追テ請訓ニ及フ

ヘシ就テハ外交文書ノ形式ニテ右ノ保證ヲ与ヘ可然哉否ヤ
至急御電訓ヲ乞フ本件ニ付テハ先方ハ千八百九十七年十月

二十日調印ノ露英議定書ノ例ヲ引キ同議定書ニハ同様ノ留
保ヲ條約ノ本文中ニ記入シアル位ナルニヨリ少クトモ外交
文書ノ形式ハ是非共用ヒタシトテ固ク之ヲ主張シ居ルニ付
其御積ニテ御訓令アランコトヲ乞フ領事館ハ浦塩斯徳及
「ニコライエウスク」ハ前電ノ通り承諾スヘケレトモ「ペ
トロパウロスク」ハ目下ノ處到底承諾セス且右二港ノ代價
トシテ敦賀及小樽ニ露國領事館ノ設置ヲ請求スヘキ模様ナ
リ尙又本件ニ關スル取極ハ普通ノ外交手続ニテ為シタント

レクシット申込ミ來レリ宣言第一項第二項ニ關スル修正ハ單

ニ意味ヲ明カニスルニ止ルヲ以テ強テ異存ヲ唱フル必要ナ

シト考フレトモ第三項ノ修正ハ其意味ニ於テ我原案ト大ニ

異ル所アルヲ以テ種々協議ノ結果終ニ原案維持ニ決シ結局

別電第八〇号ノ如ク決定シタルヲ以テ右御認可相成リ度シ

但シ右宣言ノ形式ニ就テハ露國全權ハ本件ニ關スル露國ノ

讓歩ハ極メテ重大ナルヲ以テ是非共外交文書ノ形式ニテ日

本政府ノ保障ヲ得置キ度シト申シ本官ヨリ屢々其理由ナキ

ヲ辨ジタルニ拘ラズ固ク執リテ聽カズ就テハ右ノ事情御斟

酌ノ上至急何分ノ御訓令ヲ待ツ通商漁業兩條約トモ或ハ帝

国政府ノ御希望通り充分ノ好結果ハ得ラレサリシヤモ計リ

難ケレトモ本官ノ見ル所ニ依レハ最早此上露國ヲシテ差シ

タル讓歩ヲ為サシムルコトハ何分見込立タサルヲ以テ先ツ

此辺ノ所ニテ談判ヲ經メ然ルベシト信ズ就テハ可成速カニ

兩條約ニ關スル最終ノ御訓令ヲ乞フ

四〇 明治四年四月三日

請議ノ件

林外務大臣ヨリ
西園寺總理大臣宛

「請議ノ通り 四月九日」

申込ミタルニ付此点ニ付テ帝国政府ニ於テモ別ニ依存ナカ
ルヘシト答ヘ置タリ

三九 明治四年三月二十六日

本野駐露公使
林外務大臣宛(電報)

別約ニ対シ露國政府修正提議ノ件

三月二十六日 後八、二二
露都着

本野公使

林外務大臣

第七九号

往電第七一號ニテ申上ゲタル如ク別約第一第二ニ關スル我
宣言ノ文句ニ就キ露國全權ヨリ修正ヲ求メタル要点ハ我宣
言案第一項中別約第一ノ大体ノ意味ヲ記入スルコト第三項中ニ
ノ意味明瞭ナラサルニ付キ之ヲ明確ニスルコト第三項中ニ
.....may be applied to other powers トアルヲ一
八九七年十月廿日調印特許ニ關スル日英議定書ノ規定ニ倣
ヒ各國政府ニ於テ別約第一第二ノ規定ヲ承諾シタル後ニ非
ザレバ右條項ハ露國ニ對シテモ其効ヲ生セス云々ト改メラ

明治四十年四月一日発

外務大臣

内閣總理大臣

機密送第三五号

目下日露兩國政府間ニ交渉中ナル漁業協約及通商條約締結
ニ關連シ帝國政府ヨリ提出シタル浦塩斯徳外二港ニ帝國領
事官駐在ノ件ニ關シ露國公使ノ内話ニ拠レバ帝國政府ハ浦
塩斯徳及尼古刺斯克ニ帝國領事官ノ駐在ヲ承諾シ其對償ト
シテ敦賀及小樽ニ露國領事官ノ駐在認可ヲ請求スルコトニ
決シタル由ナリ然リ而シテ敦賀及小樽ハ執レモニ開港ニ
屬シ外國領事ノ駐在ヲ不便トスルノ理由無之ノミナラス露
國領事官ニシテ右両港ニ駐在スルハ露領水ニ出漁スル我漁
業者ハ勿論一般帝國臣民ノ為メ多太ナル便宜ヲ与フル(現
状ニ在ツテハ我ガ出漁者ハ是非共函館ニ行テ露領事ノ證明
ヲ乞フノ要アリ)所以ナレバ露國ノ請求ヲ機會トシ右両港
ニ外國領事官ノ駐在ヲ認可スヘキコトニ閣議決定ヲ望ム
右閣議請求候也

(決裁)

四一 明治四年四月五日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

附屬議定書及別約等ニ關シ訓令ノ件

四月十五日前十一時五十分発

林 大 臣

本野公使

第六五号

貴電第七九号ニ關シ

第四條第三項ハ貴見ノ如ク之ヲ議定書第二條ト為シ其ノ文言ヲ貴電第六七号トシテ差支ナシ議定書第一條第二項ハ放棄ス

議定書原案第二條ハ之ヲ撤回シテ貴電第六五号ノ如ク石油輸入税賦課方法ニ關スル宣言ト共ニ之ヲ機密外交文書中ニ記載スルコト、ナシ其ノ文言ハ貴電第六六号ノ如クシテ差支ナシ

附屬別約案ハ貴官ノ是迄纏メタル通りニテ大体差支ナシ右別約中日本ニ關スル第一第一ニ付為スヘキ宣言ノ文言ハ貴電第八〇号ノ通ニテ差支ナシ但シ右ハ實質上及形式上全然片務的ノモノナレバ之ヲ外交文書トシテ發表スルヲ得ス会議錄ニ止ムルノ外ナシ若シ露政府ニシテ露國側ノ一、二、

三、四、五項ニ關シ同様ノ宣言ヲ与ヘ全体ヲ相互ノ形式ト為シ外交文書トシテ交換スル義ナレバ承諾スペシ
領事館問題ハ普通外交手続ニテ之ヲ為スモ差支ナケレトモ此際決定セムコトヲ望ム浦壌斯徳「ニコラエフスク」ハ勿論トシテ「ペトロパウロフスク」ニハ若シ到底領事館ヲ設ケ又萬已ムナキトキハ漁業事務官ヲ駐在セシメ日本臣民ノ利權ヲ保護セシムルコトヲ得ル様協定アリタシ右三ヶ所ノ代償トシテ帝国政府ハ敦賀及小樽ニ露國領事館ノ設置ヲ承諾スヘシ

右ニテ通商條約ノ談判結了スヘキニ付以上各項ニ關シ露國全権ノ承諾ヲ得タル上ハ貴官ノ是迄纏メ來リタル條約本文、議定書、附屬別約、諸宣言並ニ會議錄ノ原文謄写ノ上至急郵送アリタシ右調査ノ上記名ノ訓令ヲ發スヘシ

四二 明治四年五月三日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使(電報)

最終會議ノ結果報告ノ件

五月三日 午前一、三七 露京発

本省着

林外務大臣
本野公使
第一一七号

五月二日通商條約ニ關スル最終ノ正式會見ヲ行ヒ從來未決ノ個條ヲ貴電第六五号ニ從ヒ夫々取纏メタリ其内附屬別約ニ關スル我宣言ノ形式ニ關シテハ露國全権ハ飽迄外交文書トシテ發表スルコトヲ主張セルニ付貴電後段ニ從ヒ露國ヨリモ同様ノ宣言ヲナサシメ相互ノ形式トナスコトニ纏メタリ其文言別電第一一八号ノ通リ「ペトロパウロウスク」駐在官ノ問題ニ關シ露國全権ハ通商談判ト直接關係ナク且ツ内部ニ異論多クシテ到底差當リ纏ル見込ナキヲ以テ一先ツ討議ヲ見合セ度旨申出クリ本問題ハ此際到底彼ノ同意ヲ得ヘキ見込ナキヲ以テ他日好機會アル迄見合セ置クノ外ナシ浦塙「ニコラエウスク」ニ日本領事館設置ノ問題ニ付先方ハ前電ノ如ク通常ノ外交手續ニ依リ決定シタシ但シ兩所トモ日本ヨリノ請求ハ之ヲ承諾スト雖トモ之カ代償トシテ露國領事館ノ設置ヲ要求スベキ場所ノ撰択方未タ纏ラザル為メ猶ホ確然タル回答ヲナス能ハズ但シ當局者多數ノ意嚮ハ敦賀及び小樽ニ在ルヲ以テ不日其趣意ニテ回答スルコトヲ得ルナラムト述べタルニ付本官ハ此問題決定ノ手續ハ通常

請フ

四三 明治四年五月六日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使(電報)

最終會議ノ結果承認ノ件

五月六日後四時発

本野公使

第九〇号

貴電第一一七号ニ闕シ貴官ノ纏メタル事項ヲ承諾ス但通商漁業兩條約共決定次第仏文ヲ最近便ニテ郵送セラレタシ右一読ノ上記名ノ訓令ヲ与フベシ

六月十一日上記名ノ訓令ヲ与フベシ

四四 明治四年六月十日 本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

輸入税賦課ニ闕シ請訓ノ件

六月十一日後三、四〇 露都發
前一〇、三〇 本省着

在露 本野公使

林外務大臣

第一五三号

貴電第一一七号ノ御説明ニ依レバ我方ニ於テハ條約文ニハ
貴電六三号ノ御訓令ニ基キ Import duties (on) ト明記シ
アルニモ拘ハラズ輸入税ニ限ラズ一切ノ税ヲ課セザル御主意ノ様ニ見受ケラル、ガ若シ果シテ然ラバ必要ノ場合ニハ
Import duties (on) ヲ any duty (of) ト改メ然ルベキ
ヤ至急御回訓ヲ請フ

林外務大臣

在露 本野公使

第一五五号

領事館問題ニ闕シ露国全權ハ別電第一五六号ノ案ノ如キ議定書ヲ以テ之ヲ決定シ置カソコトヲ提議シ本案第一項即チ日本ヨリ許スベキモノ、内第一ハ之ヲ小樽ト為スベキヤ又ハ南樺太ノ或場所(コルサコフ又ハウラジミロフカ)トナスペキヤハ未タ露国政府部内ノ詮議纏ラザルニ付原案トシテ是等ノ場所ノ内一ヶ所ニ露国領事館ヲ設置シ得ルコト、為シ置キ度シト述べタリ右承諾シテ差支無カルベキヤ至急電訓アリタシ

四七 明治四年六月十一日 本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛

通商航海條約及附屬書類進達ノ件

機密 第八号

客年六月六日附機密送第一一号信ヲ以テ御訓令ノ日露通商航海條約談判ハ去ル五月二日最終ノ會議ヲ開キ取纏メタル結果同三日附往電第一一七号ヲ以テ申進候処同六日附貴電第九〇号ヲ以テ御承認相成但シ右條約及附屬書類共決定次第最近便ヲ以テ郵送可致御一読ノ上記名調印ノ訓令ヲ発セ

四五 明治四年六月十一日 本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

輸入税賦課ニ闕シ請訓ノ件

六月十一日後三時發

大臣

在露 本野公使

第一一八号

貴電第一五三号ニ闕シ往電第六三号ハ往電第八三号ニ依リ撤回シ露国案ヲ諾シタルコトユヘ昨年貴電第一二七号露国対案第五條ヲ復活シタル訳ナリ而シテ同案ニハ日本政府モ亦何等ノ税ヲ賦課セストアルヲ以テ単リ輸入税ニ限ラサル積ナリ

四六 明治四年六月十一日 本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

領事館設置問題ニ闕シ請訓ノ件

六月十一日後七、四〇 露都發
前一〇、五〇 本省着

林外務大臣

在露 本野公使

ラルベキ旨御申越ノ次第敬承右ハ早速御送付可致管ノ處最終會議錄ノ印刷手間取候為メ遲延致居候處三四日前漸ク出来候ニ付キ今回帰朝ノ靜馬工兵大尉ニ托シ同談判關係書類取纏メ別添目録ノ通り差進候

客年八月四日本條約談判第一回會見以來経過ノ詳細ハ其都度往復電信ニ依リ既ニ御承悉ノ事ニ有之茲ニ重テ續述不致候ヘ共就中我原案ニ比シ確定案ニ於テ全部追加若クヘ削除シタル條項左ニ列記致候

我原案第四條第三項陸路滿洲國境ヲ經テ遼東租借地及露國ニ輸入スル場合ニ当リ東遼租借地及露國ノ生産若クハ製造ニ係ル物品ニ対シ相互ニ輸入税ヲ免除スルノ規定ハ之ヲ議定書第一條ニ移シ遼東租借地及露領沿海洲並ニ沿黒龍洲ノ生産若クハ製造ニ係ル物品ハ相互ニ滿洲ノ生産若クハ製造ニ係ル物品ト同一ノ取扱ヲ為スコトニ改メタリ

我原案議定書第一條第二項亞細亞露西亞ニ於ケル日本臣民ノ旅券及居住權ニ対シ徵收スル查證料其他ハ歐羅巴露西亞ニ於テ徵收スル金額ニ比シ半減スルノ規定ハ之ヲ拋棄セリ我原案議定書第二條満洲國境ヲ經テ露國ニ輸入スル日本貨物ノ税率ヲシテ海路西比利諸港ヲ經テ輸入スル貨物ニ対スル稅率ヲ超過セシメサル旨ノ規定ハ之ヲ議定書ヨリ分離

シテ秘密外交文書ト為シ露國政府ノ提議ニ基キ石油ニ關スル現行關稅率ヲ變更セザル旨ヲ保證セル舊條約附屬我政府ノ宣言ヲ復活シ前記我原案議定書第二條ノ規定ト相對シ且ツ双方之力為メニ自國ノ立法權ノ行動ヲ拘束セザル條件ノ下ニ相互ノ宣言トセリ

旧條約附屬別約ヲ復活シ我方ニ於テハ日本ト朝鮮及東西諸隣國トノ間ニ於ケル特別關係ニ關スル留保ヲ加ヘ別ニ此特別關係ヲ以テ相互ニ相手国ヲシテ最惠國條款ノ取扱ヲ受クル第三國ト異ナリ若クハ劣等ノ地位ニ立タシムルモノニアラザル旨ヲ宣言セル外交文書ヲ交換スルコト、セリ

我原案第一外交文書松花江航行權ノ問題ハ全然之ヲ本條約ヨリ分離シ別ニ談判ヲ進メタリ（五月十五日附機往第七号）

我原案第二外交文書領事館問題ニ關シ「ペトロパブロフスク」ヲ除キ浦塙斯德及「ニコライフスク」ニ帝國領事館ヲ置クコトハ露國政府ニ於テ之ガ對債シテ敦賀並ニ小樽若クハ之ニ代ル地ニ露國領事館ヲ置クコトヲ求メ承諾シタレトモ之ニ關スル交渉ハ通常外交手続ニ讓ランコトヲ提議シ本使ハ通商條約締結前ニ本問題ヲ決定スベキ留保ノ下ニ之ニ同意セリ

其他多少ノ變更アルヲ免レザリシモ大体ニ於テ我原案ノ各條項ヲ維持シ茲ニ取纏メタル結果ヲ報告スルノ運ニ至リ候此段申添候
註 進達書類ハ後掲批准奏請ノ文書參看

定メタレタルモノ、如ク（尤モ我原案第四條第一項ノ仮文案ト日本支案トハ文言ノ前後顛倒セリ）且ツ旧條約其他我國ト各國間ノ諸條約ノ前例モ有之候ニ付キ今俄カニ之ヲ改ムベキ理由ヲ見ズ凡ベテ我原案仮文ノ例ニ倣ヒ文言ノ前後ヲ定メタル次第ニ有之候此段申添候

四八 明治甲午年六月十四日 前三、三〇 露都着
水產物輸出稅賦課問題ニ關シ請訓ノ件（一）（二）
(一) 本野駐露公使（ヨリ）

六月十四日 前三、三〇 露都着
林外務大臣宛（電報）
貴電第一一八号ニ「露國對案第五條ヲ復活シタル訳ナリ」云々トアルモ貴電第六三号ノ提議ハ水產物產出地ノ範圍ヲ除クノ外露國委員ニ於テ異議ナキ所ニシテ往電第一〇七号

林外務大臣

第一六〇号

就テハ別添差進候各關係書類御查閱ノ上記名調印方至急御電訓相成候様致度此段申進候敬具

明治四十年六月十一日

特命全權公使 本野 一郎（印）

在露

外務大臣子爵 林 葦 殿

追テ本條約附屬文書ノ文言確定ニ際シ露國委員ニ於テハ苟クモ條文中締結國双方「元首」ノ名稱ヲ存スルトキハ先づ之ニ依リ「元首」ノ名稱無トキハ「國」ニ基キ其文言ノ位置ヲ前後スベキモノニシテ主格ノ如何ニ關セズ隨テ例へハ第一條第五項日本側ニ保存

スベキ正文ニハ
農業不動產所有權云々ニ關シテハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民及露西亞國ニ於ケル日本國臣民ハ云々トアルベキ旨ヲ主張致候處我原案ニアリテハ常ニ當該條項ノ主眼トスル利益ヲ基礎トシテ文言ノ位置ヲ

ニヨリ伺ヒ出デタルハ右ノ範圍ニ關スル点ノミナリシヲ以テ貴電第八三号ノ之ノ点ニ關スル露案ヲ諾セラレタルモノト解シ其主意ニテ協約第一二條ヲナス事ニ協定シタルナリ而シテ右ノ如ク為シ置クコトハ貴電第六三号御申シ越ノ米國ニ對スル關係上必要ノ事ト信ズ尙ホ貴電第一一七号ノ主意ハ之レニ本件ハ議定書締結以前既ニ協定ヲ経タルモノナリトノ理由ヲ附シテ露國全權ニ対シ絶對的ニ變更不可ナリト主張シ置キタル處彼ノ全權ハ然ラハ止ムヲ得ズ第五條ニ「エキスボウト」ナル文字ヲ加ヘル事ハ断念スルモ其麥利無論差支ヘナキコトト信ズレドモ為急上申ス尙ホ前陳第

一二條ノ件ハ最早確定ノ事故右ノ通リニテ御承認アリタシ且ツ來週ノ初メニハ是非共最終ノ会見ヲ為シ度キ考ヘニツキ折リ返シ御訓令アリタシ

(11)

Petersburg, June 14th 1907. 3. 32 a. m.

Tokio, June 14th 1907. 9. 50 p. m.

Hayashi,

Tokio.

No. 161.

Plenipotentiary of Japan, taking note of definitive acceptance by Plenipotentiary of Russia of the wording of Article V by which Russian Government engage not to levy any duty, impost or tax under any denomination whatever upon the fishes and aquatic product caught or taken in the Russian waters of the Province of Littoral and Amur and destined to be exported to Japan whether such fishes or aquatic product be manufactured or not, declares that his Government, on their side, shall not levy not only import duty mentioned in Article XIth but also any other duty, impost or tax under any denomination whatever upon the fishes and aquatic product caught or taken in the Russian waters of the Province of Littoral and Amur and imported to Japan whether such fishes or aquatic product be manufactured or not.

Motono.

四九 明治四十年六月十五日 水產物輸入税免除に関する件
六月十五日午後三時十分発
林 大 臣

在露 本野 公使

第1111號

貴電第一六〇号第十一條承認ス貴電第一六一号宣言与ハテ可ナリ

ノ駐在ヲ諾シ其代價トシテ敦賀及小樽ニ露國領事官ノ駐在ヲ請求スルノ内意アル旨在露本野公使及在東京露國公使ニリ報告ニ接シタルニ付キ他日露國政府ヨリ公然右様ノ交渉ヲ受クル場合ヲ豫想シ去四月一日付ヲ以テ敦賀及小樽ニ露國領事官ノ駐在ヲ認可方閣議ヲ乞ヒ同月九日付ヲ以テ請議ノ通リ閣議決定致候處今回本野公使ノ來電依ニレバ露國政府ハ同公使ニ対シ(一)露國政府ハ浦塩斯德及ニコラエウスクニ日本領事官ノ駐在ヲ認可シ(二)日本政府ハ敦賀及小樽又ハ南樺太コルサコフ、ウラジミロフカノ内一ヶ所ニ露國領事官ノ駐在ヲ認可スルコトニ協定致度旨提議致シ來リタル由ニ有之候

先是帝国政府ハ浦塩及ニコラエウスク両港ニ我領事官ヲ駐在セシムルヲ以テ満足スルコト克ハス露國沿海洲ニ於ケル我漁業権ノ利害關係頗ル大ナルモノアルヲ以テ是非共堪察加半島ペトロパブロフスクニ一ノ領事官分館ヲ設置スルノ必要アルヲ以テ頻次露國政府ニ交渉ヲ試ミタルモ露國政府ハ之ニ應セス已ムナクムバ漁業季節ノミ駐在スヘキ漁業事務官ノ駐在ヲ認可サレ度旨更ニ交渉ヲ重ねタレトモ是又其承諾ヲ得ルコト能ハサリシ行掛リモアレベ右ペトロパブロフスクニ我領事館分館ノ設置又ハ漁業事務官ノ駐在ノ認可ヲ條件トシテコルサコフニ露國領事官ノ駐在ヲ認可致シ度

ク具体的ニ之ヲ言ヘバ前頭露國提議ノ対案トシテ左ノ通り申込ミ度候

一、帝國政府ハ敦賀小樽及南樺太コルサコフニ露國領事官ノ駐在ヲ認可スルコト

二、露國政府ハウラシオストツク及ニコラエウスクニ帝國領事官ノ駐在及ペトロパブロフスクニ帝國領事館分館ノ設置又ハ漁業事務官ノ駐在ヲ認可スルコト

日露講和條約第十條ニ依ルニ在來ノ露國臣民ハ樺太割譲圏内ニ引継キ居住スルノ権ヲ与ヘラレ居リ又實際居住スルモノ尠ラサル趣ニ付テハ斯ル方面ニ露國領事官ノ駐在ヲ許サヘルハ聊穩當ヲ缺クノ嫌アルコト同條約第九條ニ依レバ日露兩國ハ樺太南北兩部ニ軍備ヲ設ケサルノ約アル位ナレバ外國領事官ノ駐在ヲ認可スルモ軍秘ノ洩ル、ヲ虞ルヘキ理由ナカルヘキコト及コルサコフハ南樺太唯一ノ良港ニシテ之ヲ開港トシテ外國官民及船舶ノ入來ヲ許スハ我極北領土ノ開發ニ資スルコト専ラサルヘシトノ三理由ハ右対案提出ノ我ニ取ツテ有利ナル事ヲ説明シテ余リアル儀ト存候就テハ萬一露國政府ニ於テ到底ペトロパブロフスク港ニ我領事館分館ノ設置又ハ漁業事務官ノ駐在ヲ肯ンセサル場合ニ於テモ猶浦塩斯德及ニコラエウスクニ我領事官駐在認可ノ

償トシテ敦賀及コルサコフニ露國領事官駐在ノ認可ヲ与フル事ニ協定致度候間此趣意ニ基キ先以テ右対案提出ノ件々閣議ヲ以テ御決定相成度候也

(決議)

「請議之通 七月八日」

五一 明治四年七月六日

本野駐露公使宛(電報)

領事官駐在ニ關シ露國政府へ再照会方訓令ノ件

七月六日午後四時三十分発

大臣

本野公使

第一三三号

露國政府ハ浦塙ニコライスクノ代償トシテ敦賀小樽ニ領事館設置ノ認可ヲ希望スル由ニ付キ本大臣ハ閣議ヲ請ヒ承諾ノ意向ヲ表シ置タル處實電第一五五号ニヨレバ小樽ノ代リニコルサコフ又ハウラジミロフカヲ請求スルニ至ルヤノ趣然ルニウラジミロフカノ現状ハ到底外國領事官駐在ノ余地ナクコルサコフモ未タ外國領事ヲ受クヘキ設備ナキモ

五三 明治四年七月二十三日

本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

「ペトロパウルスク」領事館設置ニ關シ露國政府ノ意見報告ノ件

七月二十二日 東京着

本野公使

第二一九号

七月廿二日外務次官「イスワールスキイ」氏ノ使トシテ來訪兼テ交渉中ノ「ペトロパウルスク」問題ニ付左ノ通提議セリ

林外務大臣

右ノ次第ニテ「ペトロパウロフスク」問題ヲ是非共此際解

決セント欲セハ大分ノ時日ヲ要スルコト、可相成ニ付外務大臣ノ請求通一先ツ右ノ通相繼メ諸條約調印スル方可然ト在ス

本問題確定ノ上ハ最早他ニ一点ト雖意見ヲ異ニスル處ナキヲ以テ可成至急調印ノ御訓令アランコトヲ請フ

五四 明治四年七月二十六日

本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

通商及漁業二條約調印認可ノ件

七月二十六日前十一時三十分発

外務大臣

第一五七号

貴電二二九号ニ關シ通商漁業兩條約ハ何時ニテモ調印セラレ差支ナシ

「ニコラエフスク」ヲ許シ日本ヨリハ敦賀ト「コルサコフ」ヲ許スコト、シテ一先ツ落着シ「ペトロパウロフスク」並ニ小樽ノ問題ハ後日ノ事ニ致シ外務省ノ考ニテハ早晚日本ノ希望通漁業監督官ヲ置クモノ差支ナキ様運フヘキ見込ナルニ付今日ノ所ハ前陳ノ通ニ提議ヲ相繼メタシ云々

曲ケテ都合スヘキニ付キ代償トシテペトロパウロフスクニ領事官又ハ漁業事務官ノ駐在ノ承諾ヲ希望ス右ハ前電ニ述ヘタルカ如ク彼我漁業者間ニ必然起ルヘキ幾多ノ問題ヲ未だニ防キ又ハ円満ニ解決スルカ為メニ絶対必要ニ付今一応露政府ノ熟考ヲ促サレタシ浦塙ニコライスクペトロパウロスクノ三港ニ対シ敦賀小樽コルサコフノ三港ヲ承諾スルモ可ナリ

五二 明治四年七月六日

本野駐露公使(ヨリ)
林外務大臣宛(電報)

條約調印ニ關スル件

七月十六日午後三時三十五分発

大臣

在露 本野公使

第一四二号

貴電一九六号ニ關シ

秘密條約ハ英國ヘハ之ヲ通知セサルヘカラス仏國ヘ通知スルト否トハ露國ノ都合ニ一任スヘキニ付其舍ニテ先方ヘ打合ハサレタシ
通商條約ニハ一点ト間然スヘキモノナキニ付漁業條約ト同時ニ最終訓令ヲ送ル旨

五五 明治甲年七月三日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

條約調印ニ關シ露國ニ於テ公表ノ件

七月二十八日後三、四〇 露都發
本省着

在露 本野公使

林外務大臣

第一三六号

通商漁業兩條約締結ニ關シ露國政府ハ本日左ノ通り新聞ニ
通知ス

二時外務省ニ於テ日露通商航海條約及漁業協約調印セラレ
タリ露國側ヨリ通商條約ハ外務商務兩大臣及全權マレブス
キー、マレヴ・ツチ氏調印シ漁業協約ハ外務大臣及全權ゴウ
バストフ氏調印セリ日本側ヨリハ双方共本野全權公使調印
セリ此兩條約ノ本文ハ近ク行ハルヘキ批准交換後ニ発表セ
ラルヘシ

五六 明治甲年七月三日 本野駐露公使宛(電報)

通商及漁業一條約正本托送ノ件

七月二十八日後五、四五 露都發
東京着

本野全權公使

林外務大臣

第二三七号

通商條約及漁業條約 七月二十八日午後三時調印ヲ了セリ
「正本ハ三十日出発浦潮經由帰朝ノ重野文学博士ニ托シ送
付ノ積リ」

五七 明治甲年七月三日 本野駐露公使宛(電報)

祝意伝達ノ件

七月三十一日後五時發

林大臣

露都 本野公使

第一六五号

日露間通商漁業兩條約及協商何レモ調印ヲ了セルノ報ニ接

五九 明治甲年八月三日 林外務大臣ヨリ
西園寺總理大臣宛

日露通商航海條約批准奏請ノ件

附屬書一 上奏案

附屬書二 御批准案

附屬書三 日露通商航海條約

附屬書四 議定書

附屬書五 日露領事館ニ關スル議定書

附屬書六 日露通商航海條約附屬別約ニ關スル

附屬書七 日露通商航海條約並漁權條約ニ關スル

附屬書八 日露通商航海條約並漁權條約ニ關スル
ル枢密院會議決定

附記一 日露通商航海條約附屬秘密賞書ニ關スル
記録(一)(二)

附記二 右御批准書並追記(一)(二)

明治四十年八月二十一日發遣

林外務大臣

第二四七号

通商漁業兩條約トモ七月三十一日御批准ニ相成リ八月一日

日本へ向ケ發送セル旨外務次官ヨリ話アリタリ又秘密協約
ヲ英仏両國へ通告ノ件ハ貴電第一六六号ノ通り同日ニ為ス

コトニ取極タリ土耳其政府通告ノ件ハ見合トナリ單ニ同地
駐在露國大使ノ舍マテニ電送セル由ナリ

機密送第七六号

日露通商航海條約及同條約附屬別約

御批准奏請ノ件

西園寺内閣總理大臣

露通商航海條約及同條約附屬別約御批准ノ義ニ付別紙ノ通上奏仕候間可然御取計相成候様致度此段申進候也

(附屬書二)

上奏案

日本國ト露西亞國トノ間ニ締結シタル日露通商航海條約及同條約附屬別約御批准相成候様仕度因テ別紙御批准案相添此段謹テ奏ス

明治四十年八月二十一日

外務大臣子爵 林 董

(附屬書二)

御批准案

天佑ヲ保有シ万世一系ノ帝祚ヲ践ミタル日本國皇帝（御名）此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十年七月二十八日露西亞國聖彼得堡ニ於テ帝国全權委員カ露西亞國全權委員ト共ニ記名調印シタル日露通商航海條約及同條約附屬別約ヲ閱覽点検シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元一千五百六十七年明治四十年九月九日東

京宮城ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈴セシム

御名 国 聖

外務大臣子爵 林 董

随意タルヘク而シテ其ノ身体及財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ
該臣民ハ其權利ヲ伸張シ及防護セムカ為自由ニ且容易ニ裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其權利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民ト同様ニ代言人、弁護人及代人ヲ撰択シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ関シテ内國臣民ノ享有スル總テノ權利及特典ヲ享有スヘシ

住居権、旅行権及各種動産ノ所有、遺言其ノ他ノ方法ニ因ル動産ノ移転及合法ニ取得スル各種財產ノ处分ニ關シ兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内國臣民又ハ最惠國ノ臣民若ハ人民ト同様ノ特典自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國臣民又ハ最惠國ノ臣民若ハ人民ニ比シテ多額ノ税金又ハ賦課金ヲ徵收セラルルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ関シ完全ナル自由ヲ享有シ及法律、命令及規則ニ從テ公私ノ礼拝ヲ行フコトヲ得竝其宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬又ハ火葬又スルノ權利ヲ享有スヘシ

(附屬書三)

註 條約文ハ御批准ニナリタルモノヲ採録セリ

日露通商航海條約

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ兩國通商上ノ關係ヲ進捗セシメコトヲ希望シ「ボーツマス」ニ於テ調印セラレタル講和條約第十二條ノ規定ニ基キ公正ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシテノ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ為日本國皇帝陛下ハ露西亞國駐劄特命全權公使法學博士本野一郎ヲ全露西亞國皇帝陛下ハ外務大臣「メートル、ド、ラ、クール」、「アレキサンドル、イズヴォルスキ」、商工務大臣「マンブル、ヂュ、コンセイユ、ド、ランビル」、「エキュイエー、ド、ラ、クール」、「ドミトリ、フィロゾフオフ」及上院議員「ストトル、ド、ラ、クール」、「ニコラ、マレヴァスキ、マレヴィッチ」ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國ノ法律ニ遵由シ何レノ所ニ到リ、旅行シ又ハ居住スルモ全ク

農業、不動產ノ所有權並其ノ他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有ニ關スル各般ノ事項ニ付テハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民ヲシテ内國臣民又ハ最惠國ノ臣民若ハ人民ノ現ニ納付シ又ハ将来納付スヘキモノニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ賦課金又ハ租稅ヲ納付セシムルヲ得ス

兩締約國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ住居スル者ハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ且其ノ服役ノ代トシテ取立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又一切ノ強募公債及軍事上ノ賦歛又ハ捐資ヲ免カルヘシ

前記ノ免除ハ不動產ノ所有ニ附着スル所ノ賦課金及一般ノ内國臣民カ不動產ノ所有者、小作人、賃借者又ハ保有者トシテ負担スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵發ヲ包含セサルモノトス

第二條

兩締約國ノ間ニハ相互ニ通商航海ノ自由アルヘシ
兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テ

モ其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵由シテ總テ工業又ハ手工業ニ從事シ正業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸売又ハ小売營業ニ從事スルヲ得ヘシ右營業ニ從事スルニハ

自身ニ之ヲ為シ又ハ代理人ヲ以テシ或ハ一人ニテ之ヲ為シ又ハ外國人若ハ内國臣民ト組合ヲ結ヒテ之ヲ為スモ隨意タルヘク又家屋、倉庫ヲ所有シ、之ヲ借受ケ又ハ占有シ且住居スル為又ハ職業ヲ營ム為ニ土地ヲ借受クルコトヲ得但シ内國臣民ト同様其ノ國ノ法律、警察規則及稅關規則ヲ遵守スルヲ要ス

該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地、諸港及諸河ニシテ外國通商ノ為ニ開カレ又ハ開カルヘキ場所ヘ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得且通商及航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人、會社其ノ他何等ノ施設タルヲ問ハス其ノ名義ニ於テ又ハ其ノ利益ノ為ニ賦課スル稅金又ハ取立金ハ其ノ性質又ハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民ノ払フ所ニ異ルカ又ハ之ヨリ多額ノモノヲ払フコトタク内國臣民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

然レトモ本條及前條中ニ掲タル規定ハ兩國ノ一方ニ於テ現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ商業、工業、手工業、職業、所有權、警察、公安及衛生ニ關スル特別ノ法律、命

產又ハ製造ニ係ル同種ノ物品ハ何レノ地ヨリ輸入セラルルモ之ヲ禁止スルコトナカルヘシ此ノ規定ハ人類ノ安全並ニ農業ニ有用ナル家畜及植物ノ生存ヲ保護スルニ必要ナル衛生上其ノ他ノ禁止ニ適用スヘカラサルモノトス

第五條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ輸出スル一切ノ物品ニハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ又ハ賦課スヘキモノニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅金又ハ賦課金ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

第六條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ内地通過稅、保稅倉庫、獎勵金、便益及戻稅ニ關シ最惠國ノ臣民又ハ人民ト全ク均等ノ取扱ヲ受クヘシ

第七條

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ又ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦露西亞國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入シ又ハ輸出スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ何等ノ名稱ヲ以テス

シ故ニ締約國ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ又ハ輸入セラルヘキ物品ハ其ノ輸出ノ日本國船舶ニ依ルト露西亞國船舶ニ依ルトニ拘ヘラス又其ノ仕向先ノ締約國ノ一港タルト第三國ノ一港タルトヲ問ハス締約國ノ版圖内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出稅ヲ以テシ又ニ許スニ同一ノ獎勵金及戻稅ヲ以テスヘシ

第八條

令及規則ニシテ外國人一般ニ適用スヘキモノニハ何等ノ影響ヲ及ホサルモノトス

第三條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居、商業又ハ工業ノ為ニ供スル家宅、倉庫、店舗及之ニ屬スル構造物ハ侵スヘカラス

右家宅及構造物ヘハ猥ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類又ハ簿記帳ヲ検査点閱スヘカラス但シ内國臣民ニ對シ法律、命令及規則ヲ以テ制定セル條件及定式ニ拠ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產又ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリスルモ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入シ又全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ生產又ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリスルモ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルトキハ總テ他ノ各外國ノ生產又ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ賦課スル稅ニ異ルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ賦課セラルルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ版圖内ヘ他ノ各外國ノ生產又ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ輸入スルトキ賦課スヘキモノニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅金又ハ賦課金ヲ賦課セサルヘシ又相互對等ノ取扱ハ右物品ノ直ニ原產地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ為スヘシ

テ又ハ其ノ利益ノ為ニ賦課スル噸稅、港稅、水先案内料、燈台料、檢疫費其ノ他之ト類似ノ取立金ハ其ノ性質及名義ノ如何ニ拘ハラズ同一ノ條件ヲ以テ且同様ノ場合ニ於テ内國船舶一般ニ課スルモノニ非サレハ兩締約国ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ両國ノ船舶カ何レノ場所ヨリ來リ又何レノ場所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第九條

兩締約国ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港湾、船渠、碇泊所又ハ河川ニ於テ船舶ノ繫留、貨物ノ船積及船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就キ他ノ一方ノ締約国ノ船舶カ均霑セサル特典ヲ自國

ノ船舶ニ許与セサルヘシ兩締約国ノ意思ハ本件ニ關シテモ亦両國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ為スニ在ルモノトス

第十條

兩締約国ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限りニ在ラス各其ノ法律、命令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル日本國臣民又ハ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル露西亞國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各右法律、命令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民

ノ生シタル地方ニ駐在スル總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ若其ノ地方ニ領事官在ラサルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ之ヲ通知スヘシ

全露西亞國皇帝陛下ノ領水ニテ難破シ又ハ淺瀬ニ乗上ケタル日本國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手続ハ露西亞國法律、命令及規則ニ從テ之ヲ為スヘク又相互ノ主義ニ基キ日本國皇帝陛下ノ領水ニテ難破シ又ハ淺瀬ニ乗上ケタル露西亞國船舶ニ關スル一切ノ救助处分ハ日本國法律、命令及規則ニ從テ之ヲ為スヘシ

右ノ如ク難破シ又ハ淺瀬ニ乗上ケタル船舶、其ノ器具其ノ一切ノ附屬品該船舶ヨリ救上ケタル貨物及商品、右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ壳卸シタルトキハ其ノ收得金並該遭難船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ物主又ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主又ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ内國法律ニ定メタル期間内ニ當該總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主又ハ代理人ハ内國船舶難破ノ場合ニ於テ払フヘキ物品保存費難破救助費其ノ他ノ費用ノミヲ払フヘキモノトス

又ハ人民ニ許与シ又ハ許与セラルヘキ諸権利ヲ享有スルモノトス

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル露西亞國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩余ヲ陸揚スル為他ノ一港又ハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但シ常ニ両國ノ法律及税關規則ニ從フヘキモノトス

第十一條

兩締約国ノ一方ノ軍艦又ハ商船ニシテ暴風其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ為已ムヲ得ス他ノ一方ノ港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ払フヘキモノノ外何等ノ賦課金ヲ払フコトナク其ノ港ニ於テ修繕ヲ為シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但シ商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル為其ノ積荷ノ一部ヲ売却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及税表ヲ遵守スヘキモノトス

兩締約国ノ一方ノ軍艦又ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ難破シ又ハ淺瀬ニ乗上ケタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件認スヘシ

第十二條

本條約ノ目的ニ關シテハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト認メ又露西亞國ノ國法ニ從ヒ露西亞國船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ露西亞國船舶ト認ムヘシ

兩締約国ノ一方ヨリ交付シタル船舶積量測度證書ハ追テ両國間ニ協定スヘキ特別ノ取極ニ依リ他ノ一方ニ於テ之ヲ承認スヘシ

第十三條

領事又ハ其ノ代理官ヨリ其ノ逮捕、引渡ス、コトヲ地方官ニ依頼スルトキハ該地方官ハ其ノ權力ノ及フ限該脱船人ヲ逮捕シ且之ヲ引渡ス為助力量ヲ為スヲ要スルモノトス
乗組員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脱船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第十四條

兩締約国ハ其ノ一方ノ通商、航海及工業ヲ他ノ一方ニ於テ総テ最恵國ノ基礎ニ置ク意志ヲ有スルニ因リ通商、航海、工業及手工業ニ關スル一切ノ事項ニ関シ其ノ一方ヨリ他ノ各外國ノ政府、船舶、臣民又ハ人民ニ既ニ許与シ又ハ将来許与スヘキ一切ノ特典、殊遇又ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶又ハ臣民ニモ即時ニ且條件ヲ附セスシテ之ヲ許与スヘキコトヲ約ス

第十五條

兩締約国ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都府及其ノ他ノ場所ニ總領事、副領事及代辦領事ヲ置クコトヲ得ヘシ但シ領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラス
然レトモ右ノ制限ハ他ノ諸外國ニ対シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締約國ニ対シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノ

月四日（十七日）以後ハ本條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ他ノ一方へ通知スルノ権利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ為シタル後十二箇月ヲ経過シタルトキハ本條約ハ全然消滅ニ帰スヘキモノトス

第十八條

本條約ハ批准セラルヘシ而シテ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ調印後四箇月以内ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ

右證拠トシテ兩國金權委員ハ本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十八日即千九百七年七月十五日（二十八日）聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

本　　野　　一　　郎　　印
イ　　ズ　　ヴ　　オ　　ル　　キ　　一　　印
ド　　フ　　イ　　ロ　　ジ　　フ　　オ　　フ　　印
エ　　ヌ　　マ　　レ　　ヴ　　ズ　　キ　　マ　　レ　　ヴィ　　チ　　印

別　　約

左記ノ留保ハ外國トノ貿易及關係ニ一般ニ適用セラルル規定ト臺モ關係ヲ有セサル例外ノモノナルニ因リ本條約ニ抵触セサルモノト看做ス但シ如何ナル場合ニ於テモ左記諸例

トス
総領事、領事、副領事及代辦領事ハ相互ノ條件ヲ以テ一切ノ職務ヲ執行シ且其ノ駐在國ニ於テ最恵國ノ領事官ニ現ニ許与シ又ハ将来許与セラルヘキ一切ノ特典、特權免除及職權ヲ享有スルコトヲ得ヘシ

日本國政府ヨリ露西亞國ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館並之ニ附屬スル諸官吏ハ新聞雜誌並學術、技芸及文學ノ著作物ノ檢閱ニ關シ相当ノ條件ヲ以テ完全ナル自由ヲ享有スヘシ

第十六條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ法律ニ定ムル所ノ手続ヲ履行スルトキハ特許、商標及意匠ニ關シ内國臣民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

兩締約國ハ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ相互條件ヲ基礎トシテ一ノ條約ヲ締結セムカ為商議ヲ開クコトヲ約ス

第十七條

本條約ハ批准交換後二箇月ヲ経テ實施セラレ左ニ規定シタル方法ニ依リ終了スル迄効力ヲ持続スヘシ

兩締約國ノ一方ハ明治四十三年七月十七日即千九百十年七月四日（十七日）以後ハ本條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ他ノ一方へ通知スルノ権利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ為シタル後十二箇月ヲ経過シタルトキハ本條約ハ全然消滅ニ歸スヘキモノトス

日本國ノ方ニ於テ

第一條　日本國ト韓國トノ間ニ於ケル通商、工業及航海ニ關スル特別關係ノ規定

第二條　日本國ト「マラッカ」海峡以東ニ於テ日本國ニ隣接セル東亞細亞諸國トノ通商ニ關スル規定

第三條　日本國政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ關スル專賣權

露西亞國ノ方ニ於テ

第一條　幅員五拾「ヴェルスト」ニ達スル國境地帶内ノ地方貿易ヲ容易ナラシムル為ニ接境諸國ニ現ニ許与シ又ハ

将来許与スルコトアルヘキ殊遇

第二條　輸入又ハ輸出ニ關シ「アルカンジエル」洲ノ住民及亞細亞露西亞國ノ北部沿岸（西班牙）ニ現ニ許与シ又ハ将来許与スルコトアルヘキ殊遇

第三條　千八百三十八年四月二十六日露西亞國ト瑞典國及諾威國トノ間ニ締結シタル條約中ニ包含セラレタル特別

第四條 露西亞國ト其ノ亞細亞ニ於ケル接境諸国トノ商業ニ闊スル規定

(附屬書四)
議定書

第五條 露西亞國ニ於テ建造シ且露西亞國臣民ニ屬スル船舶ニ与ヘラル建後三箇年間航海税ノ免除

第六條 露西亞國ニ於テ遊航俱樂部ト称スル各種娯遊協会ニ許与シタル免除

第七條 露西亞國政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ闊スル専売権

本別約ハ本日締結シタル條約中ニ其ノ全文ヲ記入シタルト同一ノ効力ヲ有スヘシ又本別約ハ之ヲ批准シ其ノ批准書ハ該條約ノ批准書ト同時ニ之ヲ交換スヘシ

右證拠トシテ両国全權委員ハ本別約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十八日即千九百七年七月十五日(二十八日)聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

本野一郎印
イズヴォルスキイ印
ドフイロヅフォーフ印
エヌマレヴィスキイ、マレヴィツチ印

條約ノ無効ニ帰スルト同時ニ終了スヘキモノトス

右證拠トシテ両全權委員ハ本議定書ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十八日即千九百七年七月十五日(二十八日)聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

本野一郎印
イズヴォルスキイ印
ドフイロヅフォーフ印
エヌマレヴィスキイ、マレヴィツチ印

(附屬書五)

日露領事館ニ闊スル議定書

議定書

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ両國間ノ通商航海條約及漁業協約締結ニ闊スル商議中領事官ニ闊スル或種ノ問題ヲ決スルコトニ定メタルニ依リ下名ハ各正当ノ委任ヲ受ケ該問題ニ闊シ為シタル協定ヲ左ノ如ク記載スルコトニ合意セリ

一 露西亞國政府ハ浦潮斯德及「ニコラーエウスク」ニ答

一箇ノ日本領事館ヲ開設スルノ認許ヲ常例ニ依リ与フ

ヘシ

林外務大臣時代 日露通商條約 五九

(附屬書四)
議定書

自本国皇帝陛下ノ政府及全露西亞皇帝陛下ノ政府ハ本日調印シタル通商航海條約ト分離シテ双方ニ闊スル或特別ノ事項ヲ協定スルコトヲ以テ両国ノ利益上有用ナリト認メタルニ因リ両国ノ全權委員ハ左ノ規定ニ同意セリ

第一日本國臣民ノ携帶スル自國旅券ニ対スル露西亞國官憲ノ査證ノ有效期間ヲ六箇月トス露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外國行旅券ヲ交付シ又ハ其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出発許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ國庫ノ為ニ徵收スル手数料又ハ取立金ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ五十哥ヲ超過セサルヘシ

第二 遼東租借地内ノ生産物又ハ製造品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亞國黑龍江洲及沿海洲ニ輸入セラルモノノ及前記露西亞國ニ洲内ノ生産物又ハ製造品ニシテ陸路國境ヲ經テ遼東租借地内ニ輸入セラルモノハ稅關上ノ便宜及課稅ニ闊スル一切ノ事項ニ付双方共ニ滿洲ノ生産物又ハ製造品ト同一ノ取扱ヲ受クヘシ

第三 本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約ノ批准ニ依リ批准セラレタルモノト看做サルヘシ又本議定書ハ前記

二 日本国政府ハ又之ト均シク敦賀及小樽ニ各一箇ノ露國領事館ヲ開設スルノ認許ヲ常例ニ依リ与フヘシ

三 本協定ハ通商條約及漁業協約ノ批准書交換後即時ニ施行セラルヘキモノトス

右證拠トシテ両国全權委員ハ本議定書ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十八日即千九百七年七月十五日(二十八日)聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

本野一郎印
イズヴォルスキイ印

(附屬書六)

日露通商航海條約附屬別約ニ闊スル外交文書

以書翰致啓上候陳者本日日本國ト露西亞國トノ間ニ締結シタル通商航海條約ニ記名スルニ方リ本使ハ日本帝國政府ノ名ヲ以テ左ノ宣言ヲ為スノ光榮ヲ有シ候

日本帝國政府カ日本國ト韓國トノ間ニ於ケル商業、工業及航海ニ闊スル特殊關係ニ闊スル規定竝日本國ト其ノ東亞細亞ノ隣接諸国トノ間ノ商業ニ闊スル規定ヲ本條約ノ別約中ニ記入スルコトヲ露西亞帝國政府ニ提議シタルハ決シテ露西亞國ヲ他ノ諸国ト異ルカ又ハ之ヨリ劣等ノ地位ニ置クノ

意思ニ出テタルニ非ス

日本國カ前記別約中ニ規定セル或種ノ利益ヲ韓國又ハ「マラッカ」海峽ノ東部ニ位スル其ノ隣接亞細亞諸國ニ許与スル場合ニハ右利益ニ關シ日本國カ他ノ最惠國條款ヲ有スル諸國ニ適用スルト同一ノ取扱ハ均シク之ヲ露西亞國ニモ適用スヘシ

故ニ前記別約ノ規定ハ右規定カ日本國ニ於テ最惠國條款ヲ享有スル他國ニ適用セラルニ非サレハ露西亞國ニ對シテ其ノ實際上ノ効力ヲ生セサルヘシ

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年七月二十八日（十五日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎（手署）

露西亞國全權委員 イズヴォルスキ一殿

以書翰致啓上候陳者本日露西亞國ト日本國トノ間ニ締結シタル通商航海條約ニ記名スルニ方リ本大臣ハ露西亞帝國政府ノ名ヲ以テ左ノ宣言ヲ為スノ光榮ヲ有シ候露西亞帝國政府カ別約（露西亞國ノ方ニ於テ）第一條乃至第五條ニ掲タル規定ヲ本條約ノ別約中ニ記入スルコトヲ日本帝國政府ニ提議シタルハ決シテ日本國ヲ他ノ諸國ト異ル

テ上奏裁可ヲ得同年六月六日ヲ以テ在露本野公使ニ對シ本條約談判ノ全權御委任状ヲ送附スルト同時ニ詳細ナル訓令ト説明トヲ添附シタル本條約案ヲ送附セリ

本野全權委員ハ該書類ヲ受領シ直ニ七月十三日ヲ以テ談判開始ノ請求ヲ露國政府ニ提出シ同政府ハ八月三日ヲ以テ外務大臣「イズヴォルスキ一」及上院議員「マレヴスキ一、マレヴィイツチ」ヲ以テ全權委員ニ任命シタル旨ヲ通知シ來リ翌四日ヲ以テ第一回ノ正式會議ヲ開キ爾來十數回ノ會議ヲ開キ明治四十年五月下旬ヲ以テ雙方全權委員ノ意見合致スルニ至リタルヲ以テ帝国政府ハ本野全權委員ト露國全權委員トノ間ニ議定シタル一切ノ文書ヲ取寄セ之ヲ檢閱シタル上本野全權委員ニ對シ記名調印ノ訓令ヲ発シ同七月二十八日ヲ以テ兩國全權委員露國外務省ニ会同シ記名調印ヲ了シタリ

本條約ハ戰爭前日露兩國間ニ存在シタル通商航海條約ヲ基礎ト為タルモノナルカ故ニ帝國ト列國トノ間ニ現存スル諸條約ト大体其ノ規定ヲ同ウス但シ左ノ十四点ハ旧條約ト異ル重ナル事項ナルヲ以テ簡単ナル説明ヲ要スヘシ

一 火葬ノ權利

露國ニハ其ノ宗教上火葬ノ慣習ナキヲ以テ戰爭前ノ経験ニ

カ又ハ之ヨリ劣等ノ地位ニ置クノ意思ニ出テタルニ非ス

露西亞國カ前記別約中ニ規定セル或種ノ利益ヲ最惠國條款ヲ有スル或一國ニ許与スル場合ニハ右利益ニ關スル同一ノ取扱ハ均シク之ヲ日本國ニモ適用スヘシ

故ニ右別約ノ規定ハ最惠國條款ヲ有スル他ノ諸國ニ適用セラルニ非サレハ日本國ニ対シテ其ノ實際上ノ効力ヲ生セサルヘシ

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年七月十五日（二十八日）聖彼得堡ニ於テ

イズヴォルスキ一（手署）

日本國全權委員 本野一郎殿

（附属書七）

日露通商航海條約説明書

「ボーツマス」講和條約ハ其ノ第十二條ニ於テ戰争前日露両國間ニ存在シタル通商航海條約ノ消滅ヲ宣言シ且該條約ヲ基礎トシテ新ニ一ノ通商航海條約ヲ締結セムコトヲ約メタルニ依リ當局者ハ戰後日露ノ新關係ヲ研究シ之ニ適応スヘキ條項ヲ定メ且旧條約中治外法權時代ノ遺真ヲ存スルモノハ悉ク之ヲ除去シ以テ一ノ通商航海條約案ヲ作成シ明治三十九年四月十四日ヲ以テ之ヲ閣議ニ提出シ其ノ決定ヲ經

依レハ同國居留ノ帝國臣民ノ遭駭ヲ火葬ニ附スル場合ニ於テ地方官憲ヨリ故障ヲ唱フルノ虞アルカ故ニ本條約中特ニ之ヲ明記シタリ（條約第一條第四項）

二 農業、不動産ノ所有權ニ關スル最惠國民待遇ノ保証

露國領内ニ於テハ外國人ニ土地所有權ヲ與フル場所尠カラサルカ故ニ農業及土地所有權ニ關シ最惠國民ノ待遇ヲ得ルコトヲ相互ニ約定セリ（條約第一條第五項）

三 工業及手工業ノ自由ノ確保

旧條約ニ於テハ兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於ケル營業ノ自由ノミヲ規定シタリシカ帝國臣民ノ露國領内ニ到リ事業ニ從事スル者益々多ヲ加ヘタルヲ以テ營業ノ外ニ工業及手工業ナル文字ヲ加ヘ帝國臣民ノ權利ヲ一層確保スルノ必要ヲ感シタルニ由リ條約第二條第一項ノ規定ヲ設ケ且一般最惠國條款ヲ拡張シテ通商航海ニ關スル事項ノ外ニ工業及手工業ニモ之ヲ及ホスコトト為シタリ（條約第十四條）

四 沿海貿易

沿海貿易ニ關スル事項ハ全ク一國主權ノ自由作用ニ屬シ國際約束ヲ以テ之ヲ規定スヘキモノニ非ス帝國ト列國トノ間

ニ存スル通商條約第十條第三項ニ「外國船舶ニ沿海貿易ヲ為スヲ許スノ規定アルハ畢竟治外法權時代ノ遺臭ニ過キサレハ此ノ如キ明文ハ日露新通商航海條約ヨリ除去スルヲ要スト認メ露國政府ノ同意ヲ得タリ（條約第十條）

五 船舶積量測度証書ニ關スル條約締結ノ約束

今日世界ニ於ケル船舶積量測度ニ關スル方式ハ区々トシテ一定セス日露両國ノ船舶積量測度ノ制度モ亦相一致セス戰後日露間ノ航海益々発達スル今日ニ方リ不便尠カラサルヲ以テ此事ニ關スル條約ヲ締結シ以テ両國ノ交通ヲ便易ナラシメムコトヲ期セリ（條約第十二條）

六 居留地及永代借地權ニ關スル條項ノ削除

帝國ト列國トノ間に現存スル諸條約及日露旧條約中ニ規定セル本件ハ治外法權時代ヨリ内外人等の待遇時代ニ移ル過渡的事実ニ關スルモノニシテ今日最早其ノ要ヲ見サルモノナルカ故ニ本條約ニ於テハ全然之ヲ削除スルコトニ露國政府ノ同意ヲ得タリ

七 領事官ノ職權ニ關スル最惠國領事官ノ待遇ノ確保

日露旧條約ニ於テハ両國領事官ノ特典免除等ニ關シテノミ相互ニ最惠國領事官ノ待遇ヲ保証シタリシカ両國領事官ノ

十 本條約ノ存続期間

帝國ト列國トノ間に現存スル諸通商條約ハ一併ニ明治四十年六月二十日より施行スル。但し、本條約は、日露ノ通商工業ノ關係益々發展スヘキコト明白ナルヲ以テ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ條約ヲ締結スルコトニ關スル露國政府ノ提議ニ同意ヲ表シタリ（條約第十六條第二項）

十一 本條約ノ存続期間

四年七月及八月ヲ以テ消滅スヘキニ由リ本條約モ亦同時ニ消滅スヘキコトト定メ以テ其際ニ於ケル帝國政府ノ行動ヲ全然自由ナラシメムコトヲ期セリ

十二 旅券制度

露國ニ於ケル旅券ハ極メテ嚴重ナルモノニシテ戰爭以前帝國臣民ノ困難ヲ感スルコト尠カラサリシニ因リ本條約附屬議定書第一ニ於テ查證ノ有効期間ヲ六箇月ト定メ又手數料ノ最高額ヲ五拾哥ト定メタリ

十三 沿海洲及黑龍江洲ニ輸入スル關東洲ノ生産品及製造品ヲ滿洲品ト同一ニ取扱フコト

關東洲ニ於ケル産業ヲ發達セシムルノ必要ナルハ固ヨリ言ヲ俟タル所ナリ依テ帝國政府ハ同洲ノ物産又ハ製造品ヲ露領ニ輸入スルニ當リ無税タラシメムコトヲ露國政府ニ提議シタレトモ其ノ承諾ヲ得サリシヲ以テ遂ニ議定書第二ノノハ總テ本條約ノ規定ヲ適用スルコトニ為セリ）之ヲ承諾シ其ノ對価トシテ日本國ノ方ニ於テ三箇條ノ特別規定ヲ設ケタリ尤モ此等ノ規定ハ最惠國条款ヲ有スル他國ニモ之ヲ適用スルニ非サレハ日露両國ノ一方ニ之ヲ適用セサルコト別約ニ關スル外交文書ノ明言スル所ナルヲ以テ其ノ實行ヲ見ル場合多カラサルヘシ

職權ニ關シテモ亦互ニ最惠國領事ノ待遇ヲ與フルコトヲスルコト大ニ利便ナルヲ認メ本條約第十五條第二項ニ「職權」ノ二字ヲ插入スルコトニ關シ露國政府ノ同意ヲ得タリ從テ露國駐在帝國領事ハ同國ニ於ケル最惠國領事力行使スルコトヲ得ヘキ一切ノ職權ヲ行使スルコトヲ得ヘク帝國臣民ノ保護上利便少カラストス

八 露國ニ於ケル文書檢閱ニ對スル保證

露國ニ於ケル文書檢閱ノ制度ハ從來最モ嚴峻ニシテ同國ニ駐在スル帝國官吏ノ從來大ニ苦痛トセル所ナリ依テ本條約實施ト共ニ此等ノ制度ヲ我外交官領事官及之ニ屬スル諸官吏ニ対シ行ハサルコトヲ提議シ相互的取扱ヲ條件トシテ露國政府ノ同意ヲ得タリ（條約第十五條第三項）

九 工業及商業所有權ノ保護ニ關シ相互的條約締結ノ約束

今後日露ノ通商工業ノ關係益々發展スヘキコト明白ナルヲ以テ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ條約ヲ締結スルコトニ關スル露國政府ノ提議ニ同意ヲ表シタリ（條約第十六條第二項）

十四 日露領事館問題

(附屬書八)

日露ノ関係開始セルヨリ以来帝国政府ハ潮墳斯徳ニ常ニ貿易事務官ヲ駐在セシメタリ然ルニ明治九年露都ニ於テ露国外務大臣ト帝国公使トノ間ニ為シタル協定ニ依レハ貿易事務官ナル者ハ何等官憲タル資格ナク日本國商人ト露國官憲トノ間ヲ周旋スル私ノ媒介人タルニ過キサルカ故ニ殆ント何等公然タル職權ナク到底帝國臣民ノ利益ヲ保護スルコト能ハサリシカ故ニ十數年来同地ニ帝國領事官ヲ駐在セシムルコトニ關シ露國政府ト交渉ヲ重ねタレトモ同港ノ軍港タルノ故ヲ以テ常ニ不成功ニ了リ「ボーツマス」講和會議ニ於テモ亦其ノ目的ヲ達スル能ハサリシモ今般通商條約及漁業協約ノ締結談判ニ際シ遂ニ露國政府ノ承諾ヲ得ルニ至リ

タリ
帝國政府ハ又漁業ノ中心タル「ニコラーエウスク」ニ於テ帝國領事館ヲ設立スルノ提議ヲ為シ是亦露國政府ノ同意ヲ得タリ此二場所ノ對価トシテ露國政府ハ敦賀及小樽ニ露國領事館ノ設置ヲ請求シタルヲ以テ帝國政府ハ直ニ之ニ同意ヲ表シクリ（日露領事館ニ關スル議定書）

明治四十一年十二月廿一日 安達峯一郎

〔獨外註記〕石井外務次官御持合ノ一部記録課ニ引受ノ上條約本書ト共ニ歳ニ収蔵セリ

四十一年十二月廿一日 本好（？）

(一)

秘密覺書ノ説明書

露國產ノ石油ハ比較的ニ重ク英領殖民地及米國ノ石油ハ比較的ニ輕シ依テ露國ハ重量ニ依ラスシテ容積ニ依ル我現行關稅法中石油ニ關スル部分ヲ維持セムコトヲ欲シ英米両國ノ利益ハ正シク之ニ反ス然ルニ我國ノ利益ハ固ヨリ現行ノ關稅法中石油ニ關スル部分ヲ維持スルニ在ルヲ以テ十數年來常ニ之ヲ変更スルコトナン去明治二十八年日露條約改正ノ際露國政府ヨリ新條約實施中前記石油課稅制度ヲ變更セサル旨ヲ約束セラレムコトヲ帝國政府ニ請求シ帝國政府ハ駐露西公使ヲシテ此事ニ關シ秘密ノ宣言ヲ為サシメシコトアリ今回本協約締結ノ際ニモ亦露國政府ヨリ前記ノ宣言ヲ為サムコトヲ提議セリ依テ帝國政府ハ曩ニ滿洲產物及運輸業獎勵ノ為ニ提議シタル「黑龍江河口以南ノ沿海洲ノ一港ヨリ西比利亞東部ニ洲へ輸入スル日本品ト滿洲境上ヨリ右

明治四十年九月七日午前十時暑中休暇中ナルニ拘ハラス日露通商航海條約並漁業協約ニ關スル枢密院會議開催ニ付林外務大臣安達參事官參集セリ
當日ハ山縣侯議長席ニ着キ十時二十分陛下ノ臨御アリテ直ニ開會林大臣ノ兩條約ニ對スル詳細ノ説明アリ（別紙説明書ニ依ル）タル後直ニ採決シタルニ滿場一致ヲ以テ可決シ十一時五十分ヲ以テ陛下退御セラレ次テ各員散会セリ
當日顧問官ノ參集セル者十九名ニシテ頗ル盛会ナリ記

安達峯一郎記

(附記一)

日露通商航海條約附屬覺書ニ關スル記録(一)(1)

(一)

日露通商條約附屬秘密覺書ハ該條約ヲ枢密院ノ議ニ付スルシトノ一項ト交換シ且多少形式ヲ整理シテ之ニ同意ヲ表シタリ但シ兩國立法議會ノ發案權及之ヨリ生スル結果上兩國政府カ不得巳採ル所ノ決定ハ毫モ之ヲ拘束セサルヘキコトト定メタリ

(附記二)

御批准書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝（御名）此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス
朕明治四十年七月廿八日露西亞國聖彼得堡ニ於テ帝國全權委員カ露西亞國全權委員ト共ニ記名調印シタル日露通商航海條約及同條約附屬別約ヲ閱覽点検シ之ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百六十七年明治四十年九月九日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈴セシム

御名國璽

外務大臣子爵林董

(追記)

内閣送第三一号

林外務大臣時代 日露通商條約 六〇 六一

一 日露漁業協約御批准ノ件

右ハ別紙ノ通修正上奏裁可相成候間此段及御通牒候也

明治四十年九月七日

内閣總理大臣侯爵西園寺公望(印)

外務大臣子爵 林 董 殿

(追記)

日露通商航海條約及日露漁業協約御批准日附ニ闕スル件電話照会

(内閣書記官室天岡書記官)

日露通商航海條約及日露漁業協約ノ御批准ハ本日早朝完了致サレタル事確実ニ有之候

尙本陛下ノ御署名ハ九月七日ニ有之候ヘ共國璽ハ九

日鈴セラレ候ニ付為念申添候

明治四十年九月九日十一時

取調課 武田書記生接受

西園寺總理大臣宛

日露通商航海條約及同條約附屬別約公布ニ闕スル件

明治四十年九月十日発送ス

機密送第八一号

林外務大臣

日露通商航海條約及同條約附屬別約ノ儀ハ本月九日午後三

時半東京外務省ニ於テ日露兩國全權委員ノ間ニ御批准書交換ヲ了シ候處右條約ハ日露兩國ニ於テ右交換後四十八時間

ヲ経テ同時ニ公布可相成様両國政府間ニ協定致候ニ就キ帝

国政府ニ於テハ本月十一日午後三時半ヲ以テ右公布相成候様致度別紙條約公布案相添ヘ此段申進候也

別紙添付ノ事

六二 明治四十年九月七日

阪谷大藏大臣(ヨリ)
林外務大臣宛

石油税ノ密約ニ闕スル件

九月十九日接受

官秘第二三〇三号

龜ニ日露條約締結ニ關シ談判ノ際露国政府ハ右條約實施期

間即明治四十四年七月十六日迄帝国政府ニ於テ明治三十九

年三月三十日發布ノ關稅定率表ニ基キ露国ヨリ輸入スル石

油ニ対シ從量稅ヲ賦課スル場合ニハ重量ニ依ラス容量ヲ以

テ課稅ノ標準トセラレ度旨同国政府ヨリ申出タルニ依リ條

約成立上交換問題トシテ必要ナル場合ニハ本野公使ヲシテ

帝国政府ハ前記條約実施ノ期間石油課稅ノ標準ヲ変更セサ

ル趣旨ヲ内密ニ言明セラルヘキ件ニ付本大臣ノ意見御承知相成度旨客年十一月三十日附機密送第一〇七号御照会ニ對シ同日附秘第二九八三号ヲ以テ現存ナキ旨回答及ヒ候処

一一八

九月九日后六時発

本野公使

外務大臣

一九二号

日露通商航海條約及附屬別約並ニ漁業協約ノ批准書ハ九月

九日午後三時半本省ニ於テ交換ヲ了セリ

往電第一八一號ノ書類ハ来る十一日午後三時半官報号外ヲ以テ公布スペシ御含マデ

六一 明治四十年九月十日

西園寺總理大臣(ヨリ)

日露通商航海條約及同條約附屬別約公布ニ闕スル件

明治四十年九月十日発送ス

機密送第八一号

林外務大臣

日露通商航海條約及同條約附屬別約ノ儀ハ本月九日午後三

時半東京外務省ニ於テ日露兩國全權委員ノ間ニ御批准書交換ヲ了シ候處右條約ハ日露兩國ニ於テ右交換後四十八時間

ヲ経テ同時ニ公布可相成様両國政府間ニ協定致候ニ就キ帝

日露條約モ既ニ公布相成候ニ就テハ右露国ヨリ輸入スル石

油ニ対シ該條約實施期間容量ヲ以テ課稅ノ標準ト為スヘキ

コトハ條約成立上交換問題トシテ本野公使ヨリ露国政府ニ

對シ言明相成リタル義ニ候哉件ハ今後石油ノ輸入稅率調査上等ニモ關係ノ義ニ付致承知度此段及照会候也

明治四十年九月十七日

大藏大臣法學博士 阪谷芳郎(印)

外務大臣伯爵 林 董 殿

董殿

六二 明治四十年九月二十日

落合駐露代理公使(ヨリ)

落合駐露代理公使(ヨリ)

九月二十日後六、五六露都發

林外務大臣

落合代理公使

第二九一号

林外務大臣時代 日露通商條約 六四 六五

関スル往電第二六二号列挙ノ諸文書ハ露暦九月末ニ発表シ
タシト語レリ

林外務大臣 在露 落合代理公使
第二九三号

一〇〇

貴電第二〇四号ニ閑シ

外務大臣代理ト交渉シタル処同代理ノ談シニ目下露国有力
ノ新聞紙ガ通商漁業兩談判ニ於テ露国全權ノ日本ニ對スル
讓歩過度ナリシテ日々甚シキ攻撃ヲ加ヘ居レルニ鑑ミ
一日モ速カニ誤解ヲ解キ輿論ヲ鎮静セシメンガ為メ速カニ
一件書類ヲ發表シ度キ希望ニシテ本野公使ニモ其旨談シ置
ケリ（往電第二六七号）且ツ是等書類ノ如キハ條約ナド、
異ニシテ必シモ兩國同日ニ發表スルコトヲ要スル証ニモア
ラザレバ露国ニ於テハ成ルベクハ近日ノ内發表スルコト、
致シ度シ但シ多少ノ日延ベナラバ承諾スペキニ付日本政府
ニ於テハ凡ソ何時頃迄延引スルコトヲ要セラル、ヤ夫レヲ
承ハリクル上ニテ更ニ御談シスベシトノ趣意ニ付本邦ニ於
テ發表ノ準備ヲ急ギアリ度且ツ凡ソ何時頃ナラバ完成スベ
キ御見込ミナリヤ折返シ返電アリ度

六五 明治四十年九月三日 落合駐露代理公使（電報）
露國ハ條約公表取急ギ居ル旨通知ノ件

九月二十二日 后四、二十五 露都發

九月二十三日 前七、三〇 本省着

六六 明治四十年九月三日 落合駐露代理公使宛（電報）
條約公表ニ閑シ再訓ノ件

九月二十三日後三時十五分發

林 大 臣

落合代理公使

貴電第二九三号ニ閑シ

当方ニテハ邦訳ヲ急ギ居レトモ來月十日頃ニ至ラサレハ發
表スルコト能ハサルヘシ又發表スヘキ文書中一二個削除
シタキ部分アリ之ニ閑シテハ數日中ニ案ヲ具シテ電報スヘ
キニ付其ノ御含ヲ以テ露政府ニ交渉セラルヘシ

六七 明治四十年九月二十四日 落合駐露代理公使（電報）
條約公表露國側意向再報ノ件

九月二十四日 后五時二十分 露都發

林外務大臣 落合代理公使

第二九六号

六八 明治四十年九月二十六日 林外務大臣（電報）
石油税密約ノ儀ニ閑シ回答ノ件

明治四十年九月二十六日発送ス

貴電第一〇六号ニ閑シ

林外務大臣時代 日露通商條約 六六 六七 六八

一一一

林外務大臣時代 日露通商條約 六九 七〇

機密送第五八号

大 藏 大 臣

大 臣

石油輸入税賦課方法不変更ノ旨露国政府
ト密約ノ件

本月十七日付官房秘第一三〇三号ヲ御問合相成候石油輸入
税賦課方法不変更ノ旨内密ニ言明スヘキ件ニ關シテハ去七
月廿八日露通商航海條約調印ノ際別冊写ノ通り秘密覺書ヲ
作成シ両国全權委員之ニ記名調印致居候間右様御承知相成
度此段御回答申進候也

追テ本文秘密覺書ノ儀ハ当省中村書記官本月初日閣下

ニ御面会致候節御内覽ニ供シ置候モノニ付其ノ實質ハ

既ニ御了承ノコト、存候間此段為念申添候也

七〇 明治二十九年九月三十九日

落合駐露代理公使ヨリ

條約公表ニ付我ガ希望事項交渉ノ件

九月二十九日 后四、二七 露都發

本省着

林外務大臣

落合代理公使

第三〇〇号

貴電第二一〇号

外務大臣代理ト談判交渉ノ結果發表スマキ文書中ヨリ本年
四月九日付本野公使ノ「プロメモリヤ」ノ内第六第七ノ

「パラグラフ」即チ le gouvernement impérial prenant

ニヨリ leurs ouvriers parmi sujets japonais 迄及ヒ露曆三月
三十一日付外務省ノ「プロメモリヤ」ノ内終リノ一「パラ

六九 明治二十九年九月三十八日 林外務大臣ヨリ

落合駐露代理公使宛（電報）

條約公表ニ付本邦希望ノ廉電報ノ件

九月二十八日後二時四十分発

落合代理公使

大 臣

第一二〇号

グラフ」即チ quant au 以下ヲ削除スルコトニ纏メタリ
尙ホ往電第二九六号通商談判ノ會議錄ヲ新曆十月十日迄社
会ニ發表セサルコトハ本日確シカヌ置キタリ漁業談判ニ關

スル書類ハ印刷ノ校正手遅レトナリ其他主任者ノ差支ヘ等
ニ依リ發表ハ前記ノ期日ヨリ一週間カニ週間遅タル、コト
ハナルベシト講ヘリ

七一 明治二十九年九月三日 落合駐露代理公使ヨリ

林外務大臣宛（電報）

條約公表期日ノ件

十月一日 後二、五〇 東京着

林外務大臣

落合臨時代理公使

第三〇三号

貴電第二一一号ニ關シ外務大臣代理ハ輿論カ一日モ遠ニ日
露談判關係書類ノ發表ヲ希望セルニ依リ少クトモ既ニ準備

整ヒタル通商談判會議錄丈ハ此ノ上延期スルコトナク發表
シタシ十月十日ノ期限ハ「マレウスキ」氏ヲシテ漸ク承
諾セシメタルコトナレハ此ノ上延期セシムルコトハ困難ナ

リ又漁業談判關係書類ノ發表ハ露國側ニテハ都合ニヨリ多
少延引スルモ之力為メ日本側ニ於テ發表ヲ延期セラレント
トヲ望ム次第ニモアラサレハ新曆十月十日以後ハ両国共何
時如何ナル方法ニテ發表スルトモ自由ナリト云フコトニ定
メシント云ヘリ

貴電第三〇〇号ニ關シ

當方ニテハ兩條約關係書類ヲ同時ニ發表スルヲ適當ト認ム
ルニ付露國側ニテ漁業談判ニ關スル書類發表ノ日ヲ以テ両
條約關係書類發表スルコト、致度シ仍テ其ノ御含ニテ交渉

アリタシ

貴電第二九六号ニ關シ

帝國政府ハ本年四月九日付本野公使往東及同月十三日付露
國外務省答稟中南樺太露國人漁權問題ニ關スル部分ノミヲ
發表セサルコト、致シタシ又往電第一九九号ニ關シ探索ノ
結果電報アレ